



続 尊敬する歴史上の人々

それぞれの時代に生きた - 偉人たちの記録

田中 義明

はじめに

この本は主として人生の目標や自分の生き方を探している子供たち、その子供たちを指導する立場にある大人たち（親・祖父母や先生方）に読んでもらうことを目的として書かれたものです。（続）となっているのは、去年出版した「尊敬する歴史上の人々」の続編になっているからで、できれば合わせて読んでいただければ幸いです。前書は著者がオーナーをしているアートサロン（パーティホール、ギャラリー、貸会議室）のホームページ（<http://www.artsalon.co.jp/>）に電子本の形で掲載されています。

本書は次の3部構成になっています。

【第1部 世界史年表と取り上げた人々】

これは、本書及び前書で取り上げた各偉人が生きた時代的背景を日本史、中国史、世界史の中で簡単に知ることができるように年表様式でまとめたものです。

この部分は、「わたしたちの中学社会」（日本書籍新社）の年表をもとに作成しました。

このシリーズで取り上げた人々全部で60人になりますがそれらの人々の生年順に並べて一覧表に示しました。そして各人が収録されている場所が簡単に分かるように収録順序とページが分かるようにしました。

【第2部 世界の偉人たちの生きざま】

これは、世界の人々、あるいはある地域の人々の文明、文化、生き方などに重要な影響を与えた偉人たちのうち、前編で取り上げなかった26人を選んで抄録風にまとめたものです。普通1人で1冊にまとめられているので、偉人全員を読むのは大変ですが、各人数ページ程度であればそれ程の負担にはならないでしょう。勿論人名辞典や広辞苑や学校の歴史の教科書よりは詳しいことが書いてあります。もし興味が湧いたら、より詳しい資料へと入っていけば良いので、各人の終わりにその出典が書いてあります。

「世界の偉人が何故この人たちなのか」という疑問が必ず起こるでしょうが、私のこれまでの経験、見聞の中で勝手に選ばせてもらったと答える以外にありません。ただ架空の人物臭い人や明らかに独裁者は意図的に外しました。

なお、並べた順は分野と関係なく誕生順となっています。

【第3部 房総ゆかりの人々】

昨年「尊敬する歴史上の人々」を発行したところ、お陰さまで大変好評で、郷土史愛好家の方々から、「房総ゆかりの人々についても分かり易く簡潔にまとめてもらえると有難い」というご要望がいくつかが寄せられましたので、私の好みで12人を選び独立の章といたしました。中には第2部に入れても支障がない人々も含まれています。なお房総ゆかりの人々については可能な限りゆかりの地を取材して回りました。

世界の偉人、郷土にゆかりのある偉人の生きざまを追いかけてきたのは、最初はどうかしたら良いのか迷っている若い人たちに、偉人といわれる先人たちの生きざまを紹介し、その中から何か参考になるものを掘り出さなければという動機からでしたが、続編を書き終えてみて一番勉強になったのは私自身ではないだろうかと思うようになりました。知らないことが多かったし、本を書くことによって生き甲斐を感じるということもできたからです。これからも書き続けたいと思います。

最後になりましたが、パソコンへの入力にはアートサロンの従業員だった菅野寿子さんが担当し、表紙等書籍としてのデザインは出版社の高橋営業部長にお願いし、途中のアドバイスや校正は家内の京子が担当してくれました。応援して下さいました皆様に対してここに感謝の意を表します。

なおこの小冊子は前書同様無料で読める電子本（前述のアートサロンホームページにて）にもする予定です。

また新聞等で知って読んでみたい方は、下記へ御連絡いただければ、在庫がある限り寄贈させていただきます。

尚、前書は千葉市の図書館や中学校に寄贈したことから、千葉市長から表彰状をいただきました。

〈連絡先〉アートサロン（または田中京子）

〒260-0855 千葉市中央区市場町2-6 TEL.043-222-2962 FAX.043-225-1631

目次


目次	4
【第1部 世界史年表と取り上げた人々】	8
【第2部 世界の偉人たちの生きざま】	
1. 宗教界の超天才 空海 (774—835) 62才没	20
2. 史上最大の王国を築いた チンギス・カン (1162—1227) 65才没	25
3. ルネッサンス美術を集大成した ルーベンス (1577—1640) 63才没	31
4. 世界の童話王 アンデルセン (1805—1875) 70才没	36
5. 音で綴る詩人 ショパン (1810—1849) 39才没	41
6. 天才オペラ作曲家 ワーグナー (1813—1882) 69才没	44
7. 昆虫学者 ファーブル (1823—1915) 92才没	51
8. ロシアを代表する作曲家 チャイコフスキー (1840—1893) 53才没	58
9. 日本人に最もポピュラーな洋画家 ルノワール (1814—1919) 78才没	65
10. 鳥人 ライト兄弟 兄(1867—1912) 45才没 弟(1871—1948) 77才没	70
11. 日本画界の風雲児 横山大観 (1868—1958) 90才没	75
12. 日本人の心の故郷を描いた 川合玉堂 (1873—1957) 84才没	81
13. 好奇心の塊だった アインシュタイン (1879—1955) 76才没	85

14. 現代アートの巨匠 ピカソ	91
(1881—1973) 91才没	
15. 女性の社会進出をファッション界から支援した ココ・シャネル	96
(1883—1971) 87才没	
16. 米大リーグを軌道に乗せた ベーブ・ルース	99
(1895—1948) 53才没	
17. 100万ドルの脚線美 マレーネ・ディートリッヒ	105
(1901—1992) 91才没	
18. 映画道を極めた 黒澤 明	108
(1910—1998) 88才没	
19. 愛の奉仕者として生きた マザー・テレサ	111
(1910—1997) 87才没	
20. 最後まで女優道を生きた イングリッド・バーグマン	114
(1915—1982) 68才没	
21. 一代で松下王国を築いた 松下幸之助	118
(1894—1989) 94才没	
22. 大相撲史上最強の元横綱 大鵬	124
(1941—2013) 72才没	

【第3部 房総ゆかりの人々】

1. 房総とも関わりのあった 源頼朝	128
(1147—1199) 52才没	
2. 自分の信ずる宗教を貫いた 日蓮	131
(1222—1282) 60才没	
3. 義民 佐倉宗吾郎	136
(1612—1653) 41才没	
4. 「見返り美人」の絵師 菱川師宣	138
(1618—1682) 64才没	
5. 晩年に正確な日本地図を完成させた 伊能忠敬	140
(1745—1819) 74才没	
6. 南総里見八犬伝を著した 滝沢馬琴	145
(1767—1848) 82才没	

7. 農民を救った 大原幽学	148
(1797—1858) 61才没	
8. 日本洋画の先駆者 浅井 忠	152
(1856—1908) 52才没	
9. 女子高等教育の創始者 津田梅子	155
(1864—1929) 65才没	
10. 牛乳屋と歌人・小説家を両立させた 伊藤左千夫	157
(1864—1913) 49才没	
11. 戦争を終結させた総理大臣 鈴木貫太郎	160
(1867—1948) 81才没	
12. マルチタレント 武者小路実篤	163
(1885—1976) 90才没	
【著者プロフィール】.....	167



第1部

世界史年表と 取り上げた人々

日本		原 始						
日本		縄文時代				弥生時代		
中国		殷	周	春秋	戦国	泰	前漢	後漢
世界の主な出来事		<p>○中国で紙が改良される</p> <p>六七 仏教が中国に伝わる</p> <p>前二七 ローマ帝国ができる</p> <p>前二二一 秦の始皇帝が中国を統一</p> <p>前二七二 ローマがイタリア半島を統一</p> <p>前三三四 アレクサンドロスの東征はじまる</p> <p>前四四三ごろ ギリシャ（アテネ）が栄える</p> <p>前一六〇〇ごろ 黄河文明が栄える</p> <p>前二五〇〇ごろ インダス文明が栄える</p> <p>前三〇〇〇ごろ エジプト文明が栄える</p> <p>前三三〇〇ごろ メソポタミア文明が栄える</p> <p>○採取・狩り・農耕・牧畜の時代</p>						
		西洋		古 代				

古 代						
古墳時代		飛鳥時代		奈良時代	平安時代	
三国	晋	南北朝	随	唐		五代
						宗 (北宋)

- 一〇九六 十字軍の遠征がはじまる (一〇二七〇)
- ローマ教皇の権威が高まる
- 宋で火薬・羅針盤・活字印刷の発明
- 西ヨーロッパで封建社会ができあがる
- 九六〇 宋ができる
- 九三六 高麗が朝鮮統一
- 八七〇 フランク王国がフランス・ドイツ・イタリアに分かれる
- 杜甫や李白が「唐詩」をつくる
- イスラム帝国が栄える
- 六七六 新羅が朝鮮半島を統一
- 六六一 イスラム帝国ができる
- 六一八 唐が中国を統一
- 五八九 隋が中国を統一する
- 四八六 フランク王国が建国される
- 四七六 西ローマ帝国がほろびる
- 三九五 ローマ帝国が東西に分かれる
- 三二三 ローマ皇帝がキリスト教を公認する
- ローマ帝国が栄える

中 世 (封建時代前期)		
鎌倉時代	(南北朝時代)	室町時代 (戦国時代)
(南宋)	モンゴル／元	明

- 一五一九 マゼランが世界周航に出発
- 宗教改革 ルター(一五一七) カルバン(一五四一)
- ルネサンスが全ヨーロッパに広まる
- 一四九八 バスコルダリガマがインドに着く
- 一四九二 コロンブスがアメリカに着く
- 大航海時代はじまる
- 一四五三 東ローマ帝国がほろびる
- グーテンベルグが活版印刷術を発明
- 一三九二 朝鮮王朝を建国
- 一三六八 明建国
- 一三八七 ダンテが「神曲」を書く
- イタリアにルネサンスがおこる
- 教皇や教会の勢力がおとろえる
- 一二七四 マルコポーロが元に着く
- 一二六〇 フビライハン即位
- 一二〇六 チンギスハンがモンゴル民族を統一
- 一一七七 朱子学がおこる
- 自治都市が発達する

近 世（封建時代後期）	
安土桃山時代	江戸時代
	明
	清
	<p>一七六九 ワットが蒸気機関を改良</p> <p>一七六二 ルソーが「社会契約論」を書く</p> <p>一七四八 モンテスキューが「法の精神」を書く</p> <p>一七四〇 フリードリヒがプロイセン国王になる</p> <p>一六八九 イギリスの権利章典</p> <p>一六八八 イギリスに名誉革命おこる</p> <p>一六四四 清が中国を支配</p> <p>一六四三 フランスのルイ十四世が即位（絶対王政）</p> <p>一六四二 イギリスの清教徒革命</p> <p>○市民階級のパ力が盛り上がる</p> <p>一六二八 イギリスで権利請願</p> <p>一六〇二 オランダが東インド会社をつくる</p> <p>一六〇〇 イギリスが東インド会社をつくる</p> <p>一五八八 イギリスがスペインの無敵艦隊を破る</p> <p>一五八一 オランダがスペインからの独立を宣言</p> <p>一五五八 エリザベス1世が即位</p> <p>○絶対主義の国家があらわれる</p> <p>一五三三 スペインがインカ帝国をほろぼす</p>
	<p>中 世</p>
	<p>近 代</p>

近世（封建時代後期）

江戸

明治

清

- 一八七六 ベルが電話を発明
 - 一八七一 ドイツの統一
 - 一八六九 スエズ運河が開通
 - 一八六七 マルクスが「資本論」を書く
 - 一八六六 アメリカで南北戦争が始まる
 - 一八六一 イタリアの統一
 - 一八六〇 ロシアが沿海州を領土とする
 - 一八四二 清がイギリスと南京条約を結ぶ
 - 一八四〇 アヘン戦争（清・英）一八四二
 - 一八三二 イギリスが第1次選挙法改正
 - 一八二〇ころ ラテンアメリカ諸国の独立
 - 一八一四 ウィーン会議がはじまる
 - 一八〇四 ナポレオンが皇帝となる
- 欧米の産業革命が進む
- 一七八九 フランス革命がおこる（人権宣言）
 - 一七七六 アダム・スミスが「国富論」を書く
 - 一七七五 アメリカの独立戦争（一七八三）
 - 一七七〇年代 イギリスの産業革命が進行する

近代

近 代	
明 治	大 正
清	中華民国

一九二九 世界大恐慌がはじまる

○世界の平和がゆらぎはじめる

一九二二 ソビエト社会主義共和国連邦が成立

一九二〇 国際連盟の成立

一九一七 ロシア革命 アメリカ参戦

一九一四 第一次世界大戦（～一九一八）

一九一一 中国で辛亥革命がおこる

一九〇五 シベリア鉄道が完成する

一八九九 清で義和団事件（～一九〇二）

一八九八 フィリピンがアメリカの領土となる

一八九五 マルコーニの無線電話

一八九四 朝鮮に甲午農民戦争がおこる

一八九〇ころ アフリカの分割終わる

一八八六 ビルマがイギリスの植民地になる

一八八五 フランスがベトナムを征服

一八八二 三国同盟（ドイツ・オーストリア・イタリア）

○植民地の争奪が激しくなる（帝国主義の時代）

一八七七 インドがイギリスの領土となる

現 代	
昭 和	
中 華 民 国	中 華 人 民 共 和 国

- 一九六九 人間が月面におり立つ(米)
- 一九六八 核兵器拡散防止条約調印
- 〃 東南アジア諸国連合(ASEAN)の成立
- 〃 ヨーロッパ共同体(EC)が発足
- 一九六〇 アフリカで一七国が独立
- 一九五九 キューバで革命がおこる
- 〃 ソ連の人工衛星打ち上げ
- 一九五七 ヨーロッパ経済共同体(EEC)結成
- 〇平和共存への努力
- 一九四九 北大西洋条約機構(NATO)が成立
- 〇冷たい戦争がはじまる
- 一九四六 アジア諸国の独立
- 〃 ポツダム会談 国際連合発足
- 一九四五 ドイツが降伏
- 一九四三 イタリアが降伏
- 一九三九 第二次世界大戦(一九四五)
- 〃 アメリカでニューディール政策開始
- 一九三三 ドイツでナチスが政権をとる

現 代	
-----	--

現 代	
	平 成
中華人民共和国	
	二〇一一 三・一一 東日本大震災
	二〇〇三 米英軍、イラク戦争開始
	二〇〇二 欧州単一通貨「ユーロ」一二カ国で流通
	〃 米英軍、アフガニスタン攻撃
	二〇〇一 アメリカで同時多発テロ
一九九三	ヨーロッパ連合（EU）が発足する
〃	ソ連の解体
一九九一	湾岸戦争
一九九〇	東西ドイツ統一
〃	東欧の共産党政権がたおれる（～一九九〇）
一九八九	中国で天安門事件おこる
○冷たい戦争が終わる	
一九八六	ソ連で「ペレストロイカ」はじまる
一九七九	ソ連がアフガニスタンに侵攻（～一九八九）
一九七六	ベトナム社会主義共和国が成立
一九七三	ベトナム和平協定

取り上げた人の生年と収録場所

人 名	生 年	前 編	続 編	房 総	収録場所	
					前編(頁)	続編(頁)
1 孔 子	前 552	1			18	
2 ソクラテス	前 470	2			23	
3 ブッダ	前 463	3			28	
4 キリスト	前 4~7	4			34	
5 マホメット	570	5			39	
6 聖徳太子	574	6			44	
7 空 海	774		1			20
8 源頼朝	1146			1		128
9 チンギス・カン	1162		2			25
10 日 蓮	1222			2		131
11 コロンブス	1446	7			47	
12 ミケランジェロ	1475	8			53	
13 ガリレオ	1564	9			59	
14 ルーベンス	1577		3			31
15 佐倉宗吾郎	1612			3		136
16 菱川師宣	1618			4		138
17 平賀源内	1729	10			62	
18 伊能忠敬	1745			5		140
19 滝沢馬琴	1767			6		145
20 ナポレオン	1769	11			64	
21 ベートーベン	1770	12			70	
22 二宮尊徳	1787	13			71	
23 大原幽学	1797			7		148
24 アンデルセン	1805		4			36
25 ダーウィン	1809	14			74	
26 リンカーン	1809	15			80	
27 ショパン	1810		5			41
28 ワーグナー	1813		6			44
29 ナイチンゲール	1820	16			85	
30 ファーブル	1823		7			51
31 トルストイ	1828	17			89	

人 名	生 年	前 編	続 編	房 総	収録場所	
					前編(頁)	続編(頁)
32 福沢諭吉	1834	18			95	
33 チャイコフスキー	1840		8			58
34 ルノワール	1841		9			65
35 エジソン	1847	19			98	
36 ゴッホ	1853	20			102	
37 浅井 忠	1856			8		152
38 津田梅子	1864			9		155
39 伊藤左千夫	1864			10		157
40 ライト兄弟 (兄)	1867		10			70
40 ライト兄弟 (弟)	1871		10			70
41 鈴木貫太郎	1867			11		160
42 キューリー夫人	1867	21			110	
43 横山大観	1868		11			75
44 ガンジー	1869	22			116	
45 川合玉堂	1873		12			81
46 シュバイツァー	1875	23			125	
47 アインシュタイン	1879		13			85
48 ヘレン・ケラー	1880	24			131	
49 ピカソ	1881		14			91
50 ココ・シャネル	1883		15			96
51 武者小路実篤	1885			12		163
52 チャップリン	1889	25			136	
53 ベーブ・ルース	1895		16			99
54 マレーネ・ディートリッヒ	1901		17			105
55 黒澤 明	1910		18			108
56 マザー・テレサ	1910		19			111
57 イングリッド・バーグマン	1915		20			114
58 松下幸之助	1918		21			118
59 キング牧師	1929	26			138	
60 大 鵬	1940		22			124



第2部

世界の偉人達の 生きざま

1. 宗教界の超天才空海

空海は西暦774年、奈良時代の終わる20年前に讃岐国多度津に父佐伯氏、母阿刀氏の三男として生まれました。空海は幼い頃から神童と呼ばれる程の天才で、伯父の阿刀大足から論語を教わったり、独学に励んで漢文はもとより、梵語を含む仏教の経典まですらすら読めるようになっていたと言われます。

幼名を真魚まおといましたが、いつから空海というようになったかは明らかではありません。恐らく室戸岬の洞窟の中で修業した時に、その場から入り口の方を見るとぽっかり開いた丸い入り口の上半分が空、下半分が海に見えたので空海と自ら名乗ったのだらうと推測されています。また洞窟の中での修業等を思い立った背景には、日本古来からある山岳信仰の修験道との出会いがあったと言われています。

ところで、空海が如何に天才であったとしても、貴族でない単なる地方豪族の息子では主都奈良の大学に入学することは制度的に出来ないのですが、空海はその大学に入学しています。それは空海の実力の凄さを知っている伯父が、そのまま埋もれさせるのは勿体ない、と皇子の教育係をしていた自分の地位を利用して宮廷内で色々働きかけた上に、まず空海を自分の養子として奈良に呼んで万全の準備をしたからではないかと言われています。しかし18才になって大学に入学した空海にとって、そこはあまり楽しい場所ではありませんでした。大学での授業は主として儒学で、学友たちにとっては律令りつりょう国家の役人となるのが約束されているので儒学は実学ですぐに役に立つ先の開けたものですが、空海にとっては下級の文官になるだけの面白くない場所で、伯父には悪いと思いつつも、じきに脱出して独学で仏教の道に進むこととなります。

遠慮しない空海は知人の紹介や一人で奈良のお寺を訪ね回り、あらゆる宗派の経典を読みあさり、比較しました。またいずれ唐に渡り勉強したいと思っていたので、鑑真がんじん（既に死亡）が唐から連れて来た唐人の最後の生き残りの如宝にょほう

と知り合い、漢語での会話を学びました。また王義之^{おうぎし}の書を学んだのも薬学の勉強をしたのも唐招提寺ではなかったかと推定されています。後にライバルになる7才年上^{さいちよう}の最澄は大乗仏教の最古典とされる法華教に心酔していましたが、既に修験道に出合っている空海は、もっとダイナミックな理論が必要だと考えていました。

その後空海は忽然^{こつぜん}と姿を消し、約10年後新しく都となった京都に現れます。その間は何処^{どこ}で何をしていたのか全くの謎です。ただ世話になった伯父には余程申し訳ないと思ったと見えて、一通の長い手紙が来ています。それは儒学を捨て仏教を選ぶに至った理由を一つの大論文としてまとめたもので、儒教より道教が、道教より仏教が優れていることを理路整然と説いており、後に「三教指帰」と改題されて空海の最初の著書となります。

空海は多くの著書を残していますが、恥ずかしながら私は一冊も読んでいません。読んでも分からないでしょう。ただ我が国の歴史上天皇から大師の称号^{たまわ}を賜った高僧は20人以上いる中で、「お大師様」といえば空海のことだといまだに慕われていることから、余程偉いお坊さんだったんだろうと思い、私も空海の生涯について知るチャンスがあれば出来るだけ追いかけてきました。一番印象に残っているのは北大路欣也が空海役を、加藤剛が最澄役を演じた映画で彼の生き様の概要を知りました。次いで司馬遼太郎自身が自分の作品で一番気に入っていると言っている「空海の風景」という小説を読んだ時です。その本で私は彼が唐から日本にもたらした真言密教の大もとが、大日経で宇宙そのものである大日如来を中心に据えていること、更に^{さかのぼ}遡ればインドのヨーガに通ずることを知り、ますます興味をそそられました。実は私の人生の師であった中村天風先生はインドのヒマラヤ山中でヨーガの修業をしてきた人で、キリスト教、イスラム教など全ての宗教を統合できるのは大日経、大日如来だけであると断言していたからです。

以来私は空海ゆかりの地にはなるべく訪れるようにしています。代表的な所

では空海誕生の地といわれる香川県の善通寺、空海が遣唐使に選ばれるために数ヶ月通って^{とくどじゅかい}得度受戒した奈良の東大寺、空海が自らデザインしたという立体^{まんだら}曼陀羅が配置されている京都の東寺、空海が天皇に願い出て広大な山全体の建物を立体曼陀羅にした和歌山県の高野山などです。空海は唐で宗教ばかりでなく土木技術の書物も譲り受けてきて、始終渴水に悩まされていた讃岐平野に現代のダムに近い巨大なため池萬濃池を作り、農民の救済に当たりましたが、私も香川県が渴水に見舞われた時水問題のコンサルタントとして視察に行ったことがあります。

私は特定の宗教は信じないいわば無神論者ですが、高野山の幽玄な佇まいに^{たたず}死んだら骨の一かけらでも奥の院への道の路傍にこっそり埋めてもらいたいものだと思うようになったから不思議です。

さて本題に戻りますが、空海は、最澄が自らのために天皇に要請して実現した遣唐船の一艘に特別に乗り込んだことは事実です。このこと自体通常ではあり得ないことです。何故なら空海は大和民族ではなく、蝦夷出身の一私度僧で遣唐使に選出されることすら困難なのに、先発した最澄一行を自分のために1年間も九州の太宰府で待たせるといふ芸当までやってのけたのですから、時の桓武天皇と余程^{ねんご}懇ろになっていて、超法規的な措置が図られたとしか考えられません。そこにその直前の空海の謎の10年間について色々な憶測が生まれる余地があります。

私がこの紹介文で参考に使っている三田成広氏は、その間空海は山岳信仰の修験者として出羽三山を含め全国の山々を歩き回り、その折りに奥羽の蝦夷討伐のため征夷大將軍として遠征していた坂上田村麻呂と面会し、彼を通じて桓武天皇と親しくなったのだらうと推測しています。いずれにしても30才以降の空海の活躍ぶりから推して仏教の知識は別として洞窟等での座禅で^{さんまい}三昧の境地に達し、^{げだつ}解脱していただらうと想像されます。

遣唐使船は四艘で唐に向けて出航しますが、当時の日本の造船技術は低く、

まさに命懸けの航海でした。海は大荒れで、結局無事目的地に着いたのは最澄の乗った船だけで、二艘は難破し、空海の乗った船は大分南に流されてやっと福州に漂着しました。ところが怪しまれてなかなか上陸が許されません。同船していた日本政府の代表が手紙で何回上陸を願い出ても返事すら来ません。一留学僧に過ぎない自分が書いても同じだろうと思いつつも、地方の長官に一筆献上すると何と手の平を返したように役人の態度が変わり、上陸が許されました。それだけ空海の文章も字も上手だったのでしょう。一行は陸路長安に向かい4ヶ月かかってやっと皇帝に接見します。

それから各留学僧はそれぞれ自由に20年以上勉強して帰国するという決まりになっていましたが、空海には最初からそんな悠長な気はありません。唐で必要なものを学んだら、なるべく早く帰国し、それを生かした活動をしたい、そのための時間を十分取っておきたいと思っていたからです。彼は自分が必要としているのは真言密教であると狙いを定め、それを学ぶためには梵語ぼんごが必須であると二人のインド僧から寸暇を惜しんで梵語を習います。

そして入唐2年目にして青龍寺の恵果和尚の門を叩きます。恵果和尚は空海を一目見るなり、これはただ者ではないと察知し、自分の死期が迫っていることから異国の留学僧であるにも拘わらず、早々と自分が護ってきた真言密教の全てを並み居る自国の弟子たちを差し置いて空海に伝授することにします。それから僅か3ヶ月で、数十年かかっても分からない人には分からない真言密教の神髓ぼうだいを空海に伝授すると同時に儀式に使う龐大な小道具も惜しげもなく与えてその年の内に亡くなってしまいます。真言密教は唯一人に全てを譲る決まりになっていたのです。空海はそれでは後に残る僧たちが困るだろうと、曼陀羅など模写できるものは現地の絵師などに模写してもらって帰国の準備に掛かりました。

一方最澄は一足先に来た時の船に乗って帰国していました。天台宗を我が国に導入するという特命を皇室から受けて来唐した別格の僧だったので、20年

間という縛りは全く無かったからです。天台山から下山した時、船の準備が出来ていなかったのも船を待つ間だけ恵果と共に学んだ僧から真言密教の入門編を学び、空海が貰ったものに比べればはるかに粗末な小道具を譲り受けて帰国しました。ところがどうでしょう。日本に帰ってみると、ついでに学んだ真言密教の部分が天台宗以上に馬鹿受けしてしまい、空海が帰国する前に高雄山で密教の儀式をして見せなければならぬ羽目になってしまいます。

空海は1年遅れで帰国の途につきますが、20年の留学期間を終えていないという理由で太宰府で足止めを喰らってしまいます。それには空海の後援者だった桓武天皇が既に崩御ほうぎょしていたこと、保守的な皇室が空海の飛ぶ鳥をも落とす勢いの噂を聞いて恐ろしくなったこともあるでしょう。空海はその拘束期間も決して無駄にすることはありませんでした。持ち帰った膨大な経典をじっくり読み込む時間がそれまでなかったからです。やっと解放された頃には空海は名実共に日本の真言密教の押しも押されぬ教祖としての実力を備えるようになっていました。

空海は初めは自分の寺がなかったのも、高雄山（後に下賜され神護寺とする）を真言密教の修行の場とし、公卿、貴族、僧、農民誰でも平等に教えました。最澄は既に比叡山で天台宗を興し、自他共に認める高僧になっていましたが、後輩の空海の持ち帰った真言密教の隆盛が気になってなりません。それで再三弟子たちを遣わしては写経をさせるように要請しますが、空海は良い返事をしません。遂に最澄自ら出向き、一泊二日の弟子入りを申し込んだまでは良いのですが、その時も平然と真言密教の奥義に当たる経典の借用を要求したのです。既に天皇をも恐れぬ自信に満ちた空海は、如何に身分の異なる先輩僧とはいえさすがにカチンと来て即座に断ってしまいました。以降二人の仲は生涯戻りませんでした。空海は真言密教は釈迦の教えにより近い小乗仏教の代表として、最澄の天台宗は、釈迦の弟子たちが一般大衆に広めるために整理しなおした大乘仏教の代表として現代まで残っています。両者の明暗を分けたのは両

者の位置でした。天台宗は京の都に近く僧兵まで擁していたために織田信長に襲撃され焼き払われるという悲劇に遭ってしまったのに、高野山は京の都から遠く離れ、もっぱら僧たちの修行の場所であり続けたため、信長の襲撃にも遭わず、多くの建物が^{こんりゅう}建立当時のまま残されています。

一般には公開されていませんが、高野山の奥の院には、^{にゅうじょう}入定といって座禅をしたままミイラになった空海（62才）が祀られており、毎日食事が供えられているようですが、それを即身成仏と誤解している人が多いようです。真言密教は誰でも即身成仏できることを目指していますが、それは生きたまま悟りを開くことを意味しています。

以上で空海の生涯の概要は終わりますが、先日テレビで空海の紹介をしており、そこからいくつか追加させていただきます。1つは空海が不動明王など憤怒の表情をした仏像を初めて日本の寺院に取り入れたということ、第2は空海が現在の西安（当時は長安）でも書の達人として知られていることです。

（注）この紹介文は主として河出書房新社「謎の空海」（三田成広）によっています。

2. 史上最大の王国を築いたチンギス・カン

チンギス・カンが生まれた年は諸説ありますが、元史に記述されている1162年というのが通説で、本名はテムジンと言ひ1227年に亡くなっています。チンギスはテムジンがモンゴル部族の長になった時に周囲から贈られた名前であって「強大」とか「大海」といった意味があります。チンギスは西欧ではチンギスと発音しており、日本でも羊の肉を焼く鍋をチンギス・カン鍋と呼んでいます。「カン」は王に対する尊称であって後に「ハン」とも発音されるようになります。「ハーン」というのは王より位の高い皇帝という意味で、現代のモンゴルではチンギス・ハーンと呼んでいます、生前はチンギス・カンと呼んでいました。

私は井上靖の小説「蒼き狼」という名作に感動しチンギス・カンに興味を持っていたので、今回取り上げることにしました。ちなみに「蒼き狼」というのは井上氏が広い草原を走り回る狼を表すために用いたもので、「灰色の狼」というのが正しいそうです。

モンゴル国が産声を上げた当時、中国では統一王朝は存在せず、漢民族による宗、異民族による西夏、金が並び立ち混乱していました。日本も貴族社会が崩壊し、武家による鎌倉政権が誕生して間もない動乱期でした。一方ヨーロッパではローマ教皇の権力が強化され、十字軍遠征が盛んに行われていました。東欧では800年続いた東ローマ帝国が衰退し、西アジアでも強国セルジューク・トルコが分裂し、中央アジアではホラズムが勢力を増し、インドなど周辺国のイスラム化が進んでいました。

このようにユーラシア大陸は既存の秩序の崩壊、民族・宗教の対立の激化などがこれまで以上に目立った時代で、まさに新しい主役の登場を待っているような状態でした。そんなユーラシア大陸に衝撃を与えたのが大モンゴル国の出現でした。その初代のリーダーがテムジンで後に王に即位して「チンギス・カン」と呼ばれるようになります。彼はほぼ1代でユーラシア大陸の東西にわたる巨大王国を築き上げるという偉業を成し遂げます。

それではチンギス・カンの生涯の足跡を追ってみましょう。テムジンはモンゴルの一部族の長の家に生まれ、「目に火あり、面に光あり」と形容されるほど利発な少年でした。食料は豊かな大自然から採れる野生の動植物、魚、山芋の他、羊や馬の遊牧によって得ていました。遊牧のために冬は雪害や季節風を防ぐことのできる山の南斜面など、夏は暑さを避けるため高山や水辺、春と秋はその中間を求めて移動する生活でした。かれはポルテという女性と結婚し、4人の息子をもうけました。同じモンゴル族同士の紛争が頻発していたため、一家を守るため一時強大な金国の一武将として辺境の防衛に当たりますが、頼もしい若きリーダーのもとにちりぢりになっていた同じモンゴル族の人たち

が次第に集まって来ました。そして部族の未来をテムジンに託そうとチンギスという名を贈りました。

テムジンからチンギスになったとはいえ、いくら戦功を立てても未だ異国の武将としてでした。チンギスは自分が王となるモンゴル人の独立国を築こうと金国を離れ、高原の諸部族を次々と滅ぼしていきます。その過程で自身も大きな傷を負いますが、遂には自分に反抗するモンゴル人のグループも含め大草原を平定し、大モンゴル国の礎^{いしずえ}を打ち立てます。

モンゴル高原の遊牧民族は昔からリーダーを決める時には、「クリルタイ」という各部族の長老が集まって民主的に審議して決める慣わしでした。そこでは血統以上に、リーダーとしての実力が評価されます。苛酷な環境を生きていかなければならない遊牧民族は、農耕民族以上にリーダー選びには慎重でなければならなかったからです。その場でチンギスは「カン」に推戴され、名実共にチンギス・カンになりました。

チンギスが周辺の敵対部族を平定した時に率いた兵士の数はせいぜい4～5千人と推定されていますが、モンゴル王国を築いた後相手にする国は皆強国です。彼は至急兵力の拡充に迫られていました。彼はまず軍制の改革に乗り出しました。それは自分を頂点とするピラミッド組織の構築です。10人の兵士で小隊とし、それをまとめて100人の兵士で中隊を作り、さらにそれをまとめて1000人の兵士で大隊を作り、チンギス・カンは大隊長を統率することによって全軍の末端まで一糸乱れぬ行動がとれるようにしたのです。彼は大隊長、中隊長の子弟の中から優れた若者1000人を選んで親衛隊とし自分の警護に当たらせました。大隊長には戦功に応じ征服した部族の土地と民を分け与え、戦時に兵を出す以外は原則として自治を認めました。それは日本の幕藩体制とちょっと似ています。

この体制を作り上げた時の千人隊長は95人といえますから、兵力は95000人と推定され、チンギス・カンが逝去時点でも約13万人といわれますから、

あれだけの大国を築いたモンゴルとしては意外に少なかったのだと思います。さらにモンゴルでは有能であれば異部族出身者も積極的に登用したし、女子供、老人まで馬を乗りこなし、当時は騎馬戦が主だったので、国民皆兵に近かったのではないかとみる学者もいますから、そのことも考慮すると実際にモンゴル人の成人男子の兵力はもっと小さかったのかも知れません。

チンギスは軍制を確立すると、次いで軍備を拡充するために鉄礦石を求めて交易を盛んにし、いくつかの製鉄所で鉄やじり、刀剣、槍、馬具などの生産を増強します。こうして準備万端整えた上で隣接する強国へ攻め込みました。まずかって自分が仕えたことのある金を内政の乱れに乗じて疾風の如く攻略し、金の都である中都を壊滅させ、略奪の限りを尽くして引き上げました。

次いで西夏、西遼、ホラズムと攻略し、南はインドのインダス川、西はカスピ海、北はシベリアに至るユーラシア大陸の広大な地域を自らの勢力下に置きました。チンギス・カンのこのような成功の要因を多くの歴史家は彼の類い希なる「天佑」、つまりカリスマ性、あるいは統率力、戦略の^{たく}巧みさといったチンギス・カンの個人の素質に求めています。勿論それだけでこれだけの偉業を成し遂げることは無理でしょう。そこには弟や息子たちの命を張った献身的な協力、「鉄を中心とした資源の確保→適地までの交通路の整備→食料を中心とする後方支援」という勝利へのシステムの取り組み、侵略国の人々の自軍への積極的な取り組みなどがあってのことでしょう。

滅ぼされたイスラム国の歴史家は、口々にチンギス・カンは残忍な殺戮者^{さつりく}として非難しています。都市を破壊し、婦女や財宝を強奪し、数十万、数百万にものぼる虐殺を行ったと誇張して伝えています。それはチンギス・カンに徹底抗戦の姿勢を取り続けた都市に対してであって、以降無駄な抵抗をする都市が現れないようにするための見せしめでした。モンゴル軍の基本的な作戦は、オアシス諸都市を接收し、その経済的な繁栄をそのまま手に入れることでした。そのため降伏した都市では住民の安全を保障し、宗教に対しても寛容で、モン

ゴルの支配に支障のない限り既存の信仰が認められました。モンゴルの侵攻以降急速に繁栄した都市が多かったのは、チンギス・カンのそのような硬軟合わせ持ったシナリオがあったからです。

チンギス・カンは背が高く頑丈な体つきをしていたと伝えられ、現在台湾の故宮博物館にある彼の肖像画は、丸く非常に柔和な顔付きをしており（相撲の横綱白鵬に似ている）、その親しみやすい容貌が周囲から好感を持たれ、人々が彼のもとに続々と集まった一因だったのかも知れません。日本では江戸時代から源義経が奥羽から逃れチンギス・カンになったという説がもてはやされたことがあります。義経を死なせたくないという人々の心情「判官贖身」に訴えたもので、どちらかといえば小柄だった義経が大男だったチンギス・カンになれるわけはありません。戦後も高木彬光が小説「成吉思汗の秘密」を著して人気を博しました。「英雄色を好む」と言われるようにチンギス・カンにも多くの女性（数百人とも言われる）が仕えていました。正妻の他は全て戦利品で、当時の戦では敵将の妻を奪うことが勝利の証^{あか}しでしたから、戦に明け暮れていたチンギス・カンが結果として多くの女性に囲まれるのは自然の成り行きでした。しかしその中で彼が特に可愛がったのは正妻のポルテの他には3人の女性だけで、他は4人に隷属させて手工芸などに従事させました。主要な4人の女性の1人は戦地にも連れて行きました。

チンギス・カンはユーラシア大陸の大方を平定していましたが、その中で西夏だけは過去4回の遠征にも拘わらず未だに滅びていませんでした。そのためシルクロードの安全な通行を妨げられ、彼にとってはまさに画竜点睛を欠いた状態でしたので、今度こそはと大軍を率いて第5次の遠征に出ました。その途上での気晴らしのための狩りの時、突然現れた獣に驚いた彼の馬が前足を上げた拍子にうかつにも彼は落馬してしまい重傷を負い、その傷が原因となって65才で亡くなってしまいました。そのことは伏せられたまま部下たちによって西夏を滅ぼすことには成功し、彼の願望であったシルクロードの安全は確保

されました。

しかしチンギス・カンがどこに埋葬されたかは未だに分かっていません。歴史上の英雄でアレキサンダー大王などもその墓所は分かっておらず、チンギス・カンと共にその墓所探しは考古学者のロマンをかき立てています。

さてチンギス・カンが亡くなったとなると、当然のこととして後継者を誰にするかが問題となります。そして恒例の長老の最高意思決定会議「クリルタイ」が開かれました。継承権のある者は正妻の4人の息子に限られますがクリルタイは何ヶ月も続きました。それだけもめにもめたということです。結局はチンギス・カンの生前の意思を尊重して3男のウゲディに決まりますが、財産や軍隊の統帥権はモンゴルの慣習に従って末子のトルイが全て相続してしまいます。

ウゲディとトルイはその後も協力してモンゴルの支配領域の拡大に努め、金を完全に滅亡させ、南宋も滅ぼし、現在の中国全土を支配するに至ります。そしてウゲディはモンゴル国を「大元」と名付け、自らを皇帝と名乗ります。皇帝のことはモンゴルでは「ハーン」と呼んでいます。現代のモンゴル人は「チンギス・カン」とは呼ばず「チンギス・ハーン」と呼んでいます。それはチンギスに対する尊敬の表れであって、緑の草原を馬で疾風の如く走り回り、民衆と殆ど同じ遊牧生活を送っていたチンギスには、宮殿に定住し、戦略のみを考えるハーンではなく、やはりチンギス・カンという呼称がふさわしいでしょう。

ある時トルイが謎の死を遂げてしまい、トルイを煙たく思っていたウゲディ皇帝による暗殺ではないかという噂がもっぱらでしたが、真相は分かっていません。しかし、トルイの子フビライが第五代の皇帝となっているのをみると、トルイの一族が完全に抹殺されてしまった訳ではないことが分かります。フビライが皇帝の時、つまり鎌倉時代日本侵略を目指して2度にわたって大船団を派遣したことは誰でも知っています。丁度その時、嵐が吹き荒れて蒙古軍（実

態は殆ど征服された朝鮮人)が全滅してしまったので、日本は神の国であって、いざという時は神風が吹くという信仰が根付いてしまったことは、我が国にとって不幸なことでした。大東亜戦争で神風特攻隊などど称して多くの少年たちが尊い命を落としてしまった歴史的事実を私たちは決して忘れてはならないでしょう。

(注) 以上の紹介文は中公新書「チンギス・カン」(白石典之)によっています。

3. ルネッサンス美術を集大成した ルーベンス

ルーベンスの生涯

ルーベンス(リュウベンスとかリュベンスと書く人もいる)は北フランドル地方(現在のベルギー)のアントウェルペン(現在のアントワープ)の生んだ偉大な芸術家です。彼の両親は熱心なカルヴァン派のプロテスタントだったので、当時^{かたく}頑ななカソリック国のスペインが支配者としてプロテスタントを迫害するのを逃れてドイツのケルンに亡命していた1577年に次男として生まれました。

彼の父は法律家で、ケルンでオラニア公ウィレム一世の妃の法律顧問となりますが、こともあろうに妃と不倫関係に陥ってしまいます。それが発覚して死刑を宣告されます。しかし母の勇氣ある異議申し立てにより、やっと恩赦を受けますが、ルーベンス一家はケルンも追放され辛い放浪生活を送ります。ルーベンス10才の時父が亡くなると母は故郷のアントウェルペンに戻り、ルーベンスは13才で伯爵未亡人に小姓として仕えるようになります。

絵が大好きだったルーベンスは、聖書の挿絵などを模写していましたが、息子の才能を認めた母は、^{かか}厳しい家計にも拘わらず、彼が地元の先生に弟子入りすることを許可します。ルーベンスはそこでたちまち才能を開花させ、21才

という若さで画家のギルドである聖ルカ・ギルドにフリーの画家として入会が認められます。そして彼は自分の将来のために、プロテスタントとしての信仰を捨てます。

23才の時、ルーベンスは憧れであったイタリア旅行を母の援助も受けて実現させます。ヴェネツィアではティツィアーノ、ティントレット、ヴェロネーゼの作品の実物を観て^{きょうたん}驚嘆します。彼はヴェネツィアのマントヴァ公の知遇を得てその宮廷に仕えることとなります。そしてマントヴァ公の命令でスペイン王フェリペ三世への使者としてスペインへ旅立ち、これが彼の外交官としての初仕事となります。

スペインで彼は^{こうぐう}厚遇されると同時に画家としての才能も認められ注文を受けて数点の絵を制作しています。スペインでの任務を終え、第二の故郷ヴェネツィアに戻るとマントヴァ公はルーベンスを宮廷画家としても採用し、かなりの報酬を支払います。それに報いるためルーベンスは3点の宗教画の大作を残しています。当時イタリアはいくつかの都市国家に分かれて対立していましたが、ルーベンスは外交官としての地位を利用してジェノヴァやローマ等を旅行し、ローマでは図書館の司書として働いていた兄フィリップと会うこともできました。

イタリアに来て8年程した時、母危篤の報があり、急いで母のいるアントウェルペンに戻りましたが、臨終には間に合いませんでした。彼はヴェネツィアのマントヴァ公の元へ戻ることはせず、第一の故郷フランドルに腰を落ち着けて仕事をすることにします。そして32才の時、フランドル地方を支配するスペインのアルベルト公に外交官及び宮廷画家としてかなり高い報酬で雇われ、特別に首都のブリュッセルではなく、アントウェルペンで制作することを許されます。

ルーベンスは既にヨーロッパではかなり有名な画家になっていましたが、多くの注文に応えるために工房で弟子たちや画家仲間と分業して一枚の絵を仕上

げるといふ能率的な方式を取り入れました。それにも拘わらず私がルーベンスを画家として高く評価しているのは、その製作過程と関係なくその作品の素晴らしさからです。彼の作品の評価については後述することにして、ここでは彼の生涯についてまずその概要を述べることにします。

その頃の作品に、彼の宗教画として有名なアントウェルペンのノートルダム寺院に飾られている祭壇画「キリスト昇架」と「キリスト降架」があります。私もベルギーのアントワープに行った時、その絵を観てこれまでの宗教画にはない躍動的な描写に圧倒されたことを覚えています。この二枚の祭壇画はイギリスの女流小説家ウィーダによる童話「フランダース（英語でフランドル地方のこと）の犬」という貧しい牛乳配達の少年ネロと愛犬パトラッシュとの悲しい物語によって世界的にも知られるようになりました。画家志望のネロが憧れのルーベンスの絵を一目でも見たいと、牛乳配達の帰りに必ずその祭壇画のある寺院に立ち寄るのですが、二枚の絵には普段布がかけられていて別途料金を支払わなければ見せて貰えません。文無しで家を失い死ぬ前にその絵を見たいと最後の力を振り絞り、自ら絵を覆っている布を取り払い一瞬窓から差し込む月明かりで絵を見てネロとパトラッシュは息絶えるという感動の物語です。

ルーベンスは32才で兄の紹介でイサベラと結婚し、3人の子供をもうけました。ルーベンスは非常に仕事熱心で、毎日朝の4時に起きて工房に行き、夕方の5時まで制作に没頭しました。工房には沢山の助手や弟子が働いていて巨匠のスケッチに基づいて絵の部分を分担し、最後にルーベンスが仕上げをしてサインを入れました。助手の中には後にルーベンスの画風を引き継ぐヴァン・ダイクも含まれていました。また時には一枚の絵の中に多くの農民などを描き込むヤン・ブリューゲルと共同で制作したこともありました。

ルーベンスは49才の時、最初の妻イサベラ（享年34才）に先立たれます。彼は悲嘆ひたんに暮れ、絵の制作を数ヶ月休むことになります。そしてその悲しみを克服するため、自ら外交ミッションを引き受けて旅に出ます。その折りルーベ

ンスはスペインで貴族に列せられ、イギリスではナイトの称号を授けられます。久方振りにアントウェルペンに戻ったルーベンスは53才でアントウェルペンで最高の美少女と謳^{うた}われていた僅か16才のエレーヌ・フルマンと再婚します。

画家としても外交官としても功なり名を遂げたルーベンスは、アントウェルペン郊外の自宅で、エレーヌとの間に生まれた子供たちに囲まれ穏やかで幸せな家庭生活を送ります。56才で正式に政治活動から引退します。それまでは各国の王侯貴族からの注文によって絵の制作に当たってききましたが、晩年は自分のための絵の制作に専念できるようになり、数々の名作を残しています。その中には妻エレーヌの肖像画や、明らかにエレーヌを描き込んだと思われる複数の婦人たちの絵も残されています。ルーベンスは63才で激しい痛風の発作で波乱に富んだ人生の幕を閉じました。

ルーベンスの人と作品

ルーベンスは、彼が生きた時代で最も偉大な人物の一人でした。彼を特徴づけるのは何と言ってもその多才さでしょう。画家であると同時に外交官であったことは既に述べましたが、他に学者でもあり、絵画や古代彫刻のコレクターでもありました。画家としても油絵だけでなく版画（銅版・木版）も手掛け、書物の扉絵や挿絵、彫刻家や銀細工匠のための下絵も提供し、その原画だけでも生涯3千点にも及びます。それだけ発想が豊かであったということでしょう。

彼の知人であるドイツ人医師が彼の工房を訪れた時、彼は下絵を描きながら歴史書の朗読に耳を傾け、同時に友人に出す手紙を口述中なのに、それを中断することなく客人に対応したといいます。一つのことにはすら集中できない私たち常人からみれば、まさに羨ましい^{うらや}天才ぶりです。

彼はまた誰にでも愛される人柄で、各国の王侯貴族に好かれたし、信用もさ

れて、多くの絵の注文も途切れることなく続いたので、結果として大きな工房を維持でき、晩年は荘園主として巨万の富を残しました。注文画というものは、最初から飾る場所が決まっておき、そのため縦横の長さは厳密に守る必要があり、描く絵の内容も注文主の依頼に従わなければならないという制約の中で作家は独自の創造力を発揮しなければなりません。その上壁画と同様自由に持ち運びが出来ないものが多いため、そこを訪れる者以外はなかなか鑑賞することが出来ません。それにも拘わらずルーベンスは後世の画家たちに多大な影響を与えました。

特に影響を受けた有名な画家はドラクロワ、セザンヌ、ルノアール、キリコ、ポロックなどで、彼等はルーベンスの絵の模写のためにルーブル美術館などに通っています。わけてもルノアールは女性美を描いた先人としてルーベンスを大変尊敬しており、自身の「水浴びをする人々」を完成させた時、「これならルーベンスも満足するだろう」と言ったといわれています。事実ルーベンスは史上最も多くの裸婦を描いた画家です。

ルーベンスに対する評価には勿論批判的なものもあります。その一つが、女性を神聖視するフェミニストたちで、ルーベンスの裸婦は男性の眼からの美の追究であって欲情をかき立て芸術性に欠けるといえるものです。

もう一つは、ルーベンスは公職を引退してからは別として、大きな工房で助手や弟子たちと分業して制作したという点に向けられたものです。同時代のネーデルランド出身の画家レンブラントとの対比で、ルーベンスを一格下にみる批評家も多いのです。ルーベンスの作品はあくまでも彼のコントロールの下で彼の下絵に基づいて制作したもので、全て彼の作品とみなしても良いと私は思っています。

(注) この紹介文はタッシュェン・ジャパン (株) 「ルーベンス」 (ジル・ネル) と岩波世界の美術「リュベンス」 (クリスティン・ローゼ・ベルキン) によっています。

4. 世界の童話王 アンデルセン

アンデルセンは、正式名をハンス・クリスチャン・アンデルセンといい、デンマークのオーデンセという町で貧しい靴職人の一人っ子として1805年に生まれました。お父さんはお客様にも愛想がなく、決して商売上手とはいえませんでした。腕が良く、手抜き仕事をしなかったため、家族3人が何とか食べていくだけの稼ぎはありました。

お父さんは日曜日にはハンスの相手をして遊んでくれて、ハンスのために操り人形を作ってくれたり、アラビアン・ナイトのお話を聞かせてくれたりしました。天気の良い日は、お母さんも連れだって近所の森に遊びに行きました。家を出ると、職人仲間が酔っ払って3人から来て来ましたが、お酒を飲まないお父さんは彼等を見向きもせず森へ向かいました。お父さんは酔っ払いの言ったことが気に障ったのか、森の中の石に腰を下ろしたまま動こうとしません。そこでハンスとお母さんは森の奥に入って花を沢山摘んで来て花環を作り、お父さんの首に掛けてやりました。そうするとお父さんは機嫌を直し、ハンスに言いました。「いいかいハンス、他人が笑ったってどうしたって構わない。自分が正しいと思う道を見出し、それをどこまでも進んでいくことが人間にとって一番大事なことなんだよ。さあそろそろ帰ろうか。」

ハンスが10才の時、お父さんは亡くなりました。フランスのナポレオン軍にデンマークも味方をしていたので、ナポレオンを大変尊敬していたお父さんは自ら志願して軍隊に入り、終戦を迎えて帰国したのですが、その時の疲れが原因となったようです。

お父さんが亡くなってから、ハンスは急に淋しくなりました。お母さんは近所に洗濯女として働きに行くようになったので、日曜日は一人で小さな部屋にこもってお父さんの読み古した本を繰り返し読むしか楽しみは無くなりました。お母さんは心配して「たまには町や森へ行って外の空気を吸ってこないと丈夫

な身体にならないから」と言って僅かばかりの小遣いをハンスにくれるのでした。事実ハンスはその頃背ばかり伸びて弱々しい体付きをしていました。

ハンスは、それからは努めて町や森へ出歩くようになりました。そのうち、ハンスを快く迎えてくれる場所を見つけました。それはお父さんが安らかに眠っているお墓のある、美しいセント・クヌート教会でした。そこの詩人でもあった牧師さんは既に亡く、奥さんと牧師の妹さんが二人で暮らしていました。そこでハンスは、二人の女性が牧師が詩人であったことを大変誇りに思っていることを知り、自分も詩人になりたいと思って「ぼくでも詩人になれるかしら？」と問うと、「心にダイヤモンドのようなものがいつもあればね。」と妹さんが答えてくれました。

ハンスは、毎日よその家で洗濯女として働いているお母さんが、自分を誇れるような日が来れば良いなと思い、教会にある沢山の本からシェイクスピアなどの芝居の本を借りて一生懸命勉強するようになりました。

ハンスが13才になった時、お母さんが「ハンス、お前どこかで働いてみる気はないかい。例えば近所の子が行っている織物工場とか」と尋ねました。ハンスは日頃からお母さんばかり働かせて悪いと思っていたし、そのことを近所のおばさんたちが問題にしていることも知っていたので直ぐに承知しました。織物工場では仕事仲間が新人のハンスをつかまえて、「お前得意なものを何かやって見せろ」と強要したので、ハンスは歌を歌いました。すると皆はその高くて透き通るような声に聞き惚れました。ハンスは変声期が遅れているボーイソプラノだったのです。

それ以来ハンスは、昼休みに毎日歌わせられるようになりました。ハンス自身も悪い気はしなかったのですが、工場通いは楽しいものでしたが、ある時、「こいつは男じゃねーぞ、女じゃないか、皆で調べてみよう」という声が上がって、ハンスのズボンを脱がそうと大勢が押しかけて来ました。ハンスは驚いて家に逃げ帰りお母さんに報告しました。お母さんは「世間体などを気にした自分が^{せけんてい}

悪かった」と謝り、工場を辞めることを認めてくれました。

お母さんは、ハンスを立派な仕立て職人にしたいと思っていました。しかしハンスは仕立ては嫌いではなかったけれど、一生の仕事としては考えていませんでした。ある時ハンスは、思い切って「僕は王立劇場に立てるような役者になりたいんだ。そのために首都コペンハーゲンでもっともっと勉強しなければ」とお母さんに申し出ました。案の定お母さんは泣いて反対しましたが、ハンスは「自分の信ずる道を行け」と言ったお父さんの言葉を信じ、今度はばかりは引き下がりません。困ったお母さんは占いのお婆さんを家に呼んでハンスの将来を占ってもらいました。すると、「あなたのお子さんはデンマークの全国民が誇れるような立派な人になりますわい」と言われました。それでハンスのコペンハーゲン行きは決まりました。ハンス14才の時です。

1人でコペンハーゲンに乗り込んできたハンスは、いきなり王立劇場を訪れ、支配人に「僕役者になりたいんです。どんな下働きでも良いから働かせて下さい」と申し出ましたが、精一杯のおしゃれをしていったつもりのハンスを見た支配人は、どこか垢抜けのしないノッポでやせっぽっちのハンスの姿に、やっかいな田舎者がやってきたとばかりに「君、悪いことは言わないから真っ直ぐ田舎に帰りたまえ、役者になるにはもっと学問を積んだ者でなくてはだめだ。」と言って話を聞いてくれようともしません。

がっかりしたハンスは、その晩は安宿を探して泊まり、家に帰るべきか、コペンハーゲンに何とか留まって新たな道を探すべきか考えました。その時ふとオーデンセでのことが思い起こされました。歌が上手だという噂が町中に知れ渡ってハンスを特別に可愛がってくれる家族も出てきたのですが、その中にグルベアーという軍人の家族がありました。グルベアー氏はハンスに「君もいずれコペンハーゲンで勉強することもあるだろう。自分の弟がコペンハーゲンで詩人をしているので誰も頼る人がいない場合は訪ねてみたら良い。きっと力になってくれると思うよ。」と言ってくれたことを思い出したのです。

そこでハンスは、翌日からグルベアという名の詩人探しを始めました。彼は有名な詩人で、名前を知っている人は多かったのですが、住所まで知っている人は少なかったので辿りつくまでは大変でした。会ってみるとときさくで優しい人で、ハンスのことは兄からの手紙で知っていて、ハンスが困っていることは何でも相談に乗ってくれるということでした。この出会いがハンスのその後を決定する転換点となりました。これ以降ハンスをアンデルセンと呼ぶことにします。

まずグルベア先生がアンデルセンにしてくれたことは、アンデルセンをコペンハーゲンにいる色々な分野の著名人に紹介してくれたことです。そのお陰で王立劇場の小間使いのような仕事に就くこともできました。大道具や小道具を用意したり有名な役者の使い走りをする仕事でしたが、アンデルセンはそれでも満足でした。いつか舞台に立ってみせるという意気込みがあったからです。ある日大勢の通行人の1人として実際に舞台に出してもらった時は、セリフもない役でしたがアンデルセンはまるで夢心地でした。そして次の日曜日、劇場も休みでしたが、アンデルセンは裏口から入り、観客もいない舞台に1人で立って、シェークスピア劇のハムレットになったつもりで演じてみました。

その時に気付いたのですが、自分の自慢の美声が、声変わりですぐの間にか消え失せていました。アンデルセンは大変なショックを受け、失意のどん底に暫く陥っていましたが、役者が駄目ならシェークスピアのような劇作家になろう、と目標を切り換えることによって立ち直りました。そして暇を見つけては初めての戯曲の制作に取り掛かりました。

やっと出来上がったのでグルベア先生に見てもらおうと、先生は渋い顔で、「誤字や文法の間違いが沢山あるね、これでは劇作家は無理だよ。」と言われてしまいます。アンデルセンは「先生、僕は貧乏だったので小学校しか学校に行っていないんです。できればラテン語学校や大学へ行って思いっきり勉強したいのですが、学費を貸して頂けないでしょうか。」とお願いしてみました。

グルベア先生はアンデルセンの非凡な才能を認めていましたので、快く承知してくれました。アンデルセンが大学に行くまでの世話をしてくれた人に、もう一人大恩人がいます。その人は農林大臣までやった大政治家で、コリン氏と言い、アンデルセンが第二の父として尊敬していた人です。

在学中アンデルセンはがむしゃらに勉強して、文章も一流のレベルに達し、新しい戯曲にも取り組んでいました。そして学友たちにも読んでもらい、「早くこれが上演されるのを観たい」と皆に称賛されるものが書き上がりました。丁度その頃コリン氏が王立劇場の支配人に就任し、幸運にもアンデルセンの戯曲を上演してくれることになりました。

初演の日、勿論アンデルセンも劇場に行っていましたが、今にもピュー、ピュー口笛を吹き鳴らされるのではないかと気が気ではありません。当時観客は劇が面白くないと口笛を吹いて騒ぎ立てる慣わしでした。ところがどうでしょう。口笛が鳴らないどころか、芝居が終わるや万雷の拍手です。「アンデルセン君万歳」と叫んだのは大学の学友たちでした。

良いことは続くものです。その年アンデルセンは借金までして初めての詩集を出しました。どこの出版社も出版してくれないので自費出版にしたのですが、その詩集が大変な評判になったのです。すると次の詩集は是非うちから出させてくれと大きな出版社も名乗りを上げてきました。

アンデルセンが28才の時は色々なことがありました。まず第一はお母さんが亡くなったことです。アンデルセンはお母さんの死に目にも会えず、自分がデンマークの文化人の仲間入りをしつつあるところを見てもらうことも出来なかったことを大変残念に思いました。第二は主にイタリアを巡る彼にとっては初めての外国旅行が国王の費用で実現したことです。靴屋の息子の旅行に国王が費用を出すということは、余程将来性を認めてのことです。アンデルセンは喜ぶと同時に、重い宿題を与えられたように思いました。彼は旅行中に最初の小説「即興詩人」を書き出しました。さらにローマでは既にデンマークを代表

する彫刻家トーバルセンと偶然出会い、以来生涯お互いを励まし合う無二の親友となります。

アンデルセンが役者を諦めてから目指したのは詩人、劇作家、小説家でしたが、それらは国内でこそ有名になりましたが、彼の作品で世界的に有名になり、現在でも各国の子供たちに愛読されているのは彼が余技として書き出した童話です。アンデルセンは出版社に請われるままに童話を書き続け、70才で亡くなるまでに130編も童話を書き残しました。その中には有名な「マッチ売りの少女」、「みにくいあひるの子」、「裸の王様」、「親指姫」、「雪の女王」なども含まれています。余技が本業よりも高く評価されることはファンの人気や批評家の評価に左右されるアートの世界では良くあることです。

ところでアンデルセンは生涯独身でした。それは女性にもてななかったとか、女性が嫌いだったということではなく、たまたま結婚するまでの縁がなかったということでしょう。事実少年時代はテンネルという少女と恋愛関係になり、成人してからは、リンドというスウェーデンの役者と兄妹の契りを結ぶなどのロマンスがありました。

千葉県の船橋市にはアンデルセン公園というテーマパークがあり、私たちも行ったことがあります。なかなか良く出来た公園だったので、これを機会にもう一度散歩に行ってみようかなと思っています。

(注) この紹介文は主として偕成社の児童伝記シリーズ「アンデルセン」(伊藤佐喜雄)によっています。

5. 音で綴る詩人 ショパン

若い頃見たコーネル・ワイルドがショパン役を、ミッシェル・モルガンがジョルジュ・サンド役を演じた「楽聖ショパン」という白黒の映画を私は今でも鮮明に覚えています。その後タイロン・パワーがショパンの有名なノクター

ンをバック・ミュージックとして使用し「愛情物語」というカラー映画もありましたが、それだけショパンが一般の人々から愛されているという証拠でしょう。最近「ショパン紀行」（堀内みさ・堀内昭彦著、東京書籍）という本に出会いました。ショパンが1810年に生まれ、39歳で短い生涯を終えるまでの道のりをほぼその通りの順で辿った紀行文と現場の写真集です。それぞれの場所でゆかりの人々のインタビューや施設の様子を彼女の感想を交えて紹介したもので、大変面白く読みました。

ショパンは不世出の偉大な作曲家であったことは言うまでもありませんが、その前に一人の人間だったのです。堀内夫妻はそれを肌で実感するだけのために2ヶ月の旅に出たのでした。そうせざるを得ないほどショパンが好きで惹かれていたのでしょう。

ショパンは旅の人でした。一夏を過ごした避暑地を含めると2万5千キロにも及び、馬車が主な交通手段だった当時のことを考えるとそれは大変なことでした。若い頃から身体が弱く、そのうえ20歳前後から死に至る病と恐れられていた結核に罹っていたショパンにとって、夏は都会の雑踏を離れ空気の良い田舎で過ごすことが必要だったのです。

ショパンはポーランドの首都ワルシャワの西60キロにある、人口60人の静かな村で生を受けました。父は地主の家庭教師、母は家政婦という貧しい夫婦ながらも、父はヴァイオリン、母はピアノを嗜むという音楽的な雰囲気の中で7ヶ月を過ごした後、一家はワルシャワに移住し、20年間そこで過ごします。父は中学校のフランス語の先生となり、家計を支えながらも乏しい資金で4人の子供の内ただ一人の男子であったショパンに4歳から母を師としてピアノを習わせました。6歳からは専門の教師に付き7歳で早くもポロネーズを作曲し、8歳で宮殿での演奏会を成功させ、まさに神童として華々しいスタートを切ります。

ワルシャワ音楽院に在学しながらポーランドで音楽活動をしていたショパン

は、19歳の時友人4人と旅行したウィーンで偶然演奏会のチャンスが訪れ、それに大成功した彼は、世界に眼が向くようになります。20歳で一人、家族と離れプラハ、ウィーンを経てパリへと勉学の旅に出ます。そして1ヶ月も経たないうちに、ポーランドを支配していたロシア軍に対してワルシャワ市民が蜂起ほうきしたというニュースが届きます。彼と同行していた親友のティトスは帰国して革命軍に参加することにしますが、共に戦おうとするショパンに対し一晩かけて「君は自分の芸術に専念し、後世外国にもポーランドの名を広めることによって、銃を手取るよりも遙かに多くのことを祖国のために成し得るのだ」と懸命に説得します。結局思い止まったショパンは、その時の苦悩を家族への手紙や楽譜（革命のエチュード）に残しています。しかし革命は半年で鎮圧ちんあつされ、ショパンは祖国を失ってしまいます。それでも彼の祖国愛はいささかも衰えず、マズルカやポロネーズといったポーランド発祥の音楽をベースとした曲を生涯にわたって数多く作り続けました。

パリではユダヤ人の大富豪ロスチャイルドの支援を受けながらリスト、メンデルスゾーン、ベルリオーズなどの音楽家、画家ドラクロワ、女流作家ジョルジュ・サンド、詩人ハイネ等と積極的に交流し、お互いに影響しあいました。特にリストはショパンの難曲を見事に弾きこなし、ショパンに演奏家としての人生を諦めさせ作曲に専念させるきっかけとなりました。

また病身のショパンも男性です。生涯独身を通しましたが、多くの女性に惚れてはふられ、年上のサンドとは27歳から10年近く付き合い、彼女のノアンにある別荘で夏を過ごし、その間に多くの作品を残しています。結局サンドにもふられ、一人床に伏すことが多くなったショパンは、収入を得るためピアノ教師の職を求めてロンドン、スコットランドを巡りますが、大作曲家の最後としては極めて惨めな2年間を過ごします。

ポーランドを出てから一度も祖国の土を踏むことのなかったショパンは、その遺言によって心臓だけがワルシャワに戻り、現在聖十字架教会で眠っていま

す。

私たち夫婦もショパンが一番好きな作曲家で、ショパンのピアノ曲が含まれている演奏会には何回となく足を運んでいます。最近では同じポーランド出身で、ショパンを弾かせたら世界一と言われたルービンシュタインが演奏したショパン全集（CD全8ディスク）を枕元に置いて睡眠導入剤に使っています。最後にルービンシュタイン自身がCDの巻頭に書いているショパン評をもってこの項を終わりたいと思います。

ショパンは普遍的な魅力を持った天才でした。彼の音楽は、あらゆるタイプの聴衆を獲得しています。ショパンの曲の最初の音がコンサート・ホールに鳴り響く時、私は聴衆からの快い反応を感じます。全世界の人々が彼の音楽を理解しています。彼らはショパンの音楽を愛し、感動を受けるのです。しかし、それはバイロンの意味でのロマンティックな音楽ではありません。物語を語るわけでもなく、絵を描くわけでもありませんが、表情豊かで、親密な、しかも純粋な芸術作品なのです。感動ということが流行らない現代の観念的で科学万能の時代においても、ショパンは生き続けているのです。彼の音楽は人類の共通言語といえるでしょう。私がショパンを演奏する時、私は人々の心に直接語りかけているのです。

（注）この紹介文は主として「ショパン紀行」（東京書籍、堀内みさ・堀内昭彦）によっています。

6. 天才オペラ作曲家 ワーグナー

ワーグナーは、1813年にドイツのライプツィヒで警察官の父とパン職人の娘である母の9番目の子供として生まれましたが、その年の内に父がチフスで亡くなってしまいます。そのためワーグナーは父の記憶が全くありません。そして僅か3ヶ月後母は5才年下の舞台役者ルードリッヒ・ガイアーと再婚しま

す。あまりにも早い再婚のため、ワーグナーはどちらが本当の父親だったかという疑問が生涯つきまとうこととなります。ガイアーはユダヤ人だったという噂もあり、ユダヤ人嫌いのワーグナー自身にユダヤ人の血が流れているということになるので問題は深刻です。

いずれにしても、病弱な子だったワーグナーは「コサック兵」とあだ名される程に元気でわんぱくな少年に育っていきました。一方ガイアーはワーグナーが8才の時病気で亡くなってしまいます。ワーグナーの年上の兄弟たちの多くはオペラ歌手や舞台役者としてドイツ各地で活躍していましたが、母は末息子のワーグナーにはより堅実な警察官のような道を歩ませたかったようで、牧師の家に預けたり、名門校で学ばせたり、敢えてピアノの教育はしませんでした。

ワーグナー12才の時、学友の死に対する追悼文の募集があり、ワーグナーの詩が最優秀作品として印刷されると、彼はそれに気をよくし、2年掛けてシェイクスピアを参考に5幕の大悲劇「ロイバルト」を書き上げたのですが、^{ひそ}密かな自信作を兄姉たちに^{ちょうしょう}嘲笑されて、自らこの処女作を破棄してしまいます。

ワーグナーがオペラの制作を決意したのは恐らくウェーバーの「魔弾の射手」を観てからでしょう。ワーグナーの義理の父が存命中、ウェーバーは自宅と劇場との途中にある宮廷歌手ガイアーの家を何回か訪れていますが、幼いワーグナーはウェーバーの知的で、控え目で穏やかな人柄にも魅了される一方、一緒に来たイタリア人のカストラート（男性のソプラノ歌手）のかん高い声で陽気にしゃべりまくるのは何とも不快で、イタリア人、イタリア音楽までが嫌いになってしまいました。後にウェーバーの「魔弾の射手」を一人で観に行き、彼の団員に対するリーダーシップ、イタリアオペラ最盛期にも拘わらず自ら制作したドイツオペラにこだわって上演し続ける姿勢にますます尊敬の念を深くするのでした。

ワーグナーの作曲家としての人生に大きな影響を与えたのは、意外にもベー

トーベンの第九交響曲でした。彼はあちこちからその楽譜を借りてきては写譜し、それをピアノ曲に編曲し、有名な出版社に持ち込みました。勿論正式にピアノを習ったことのないまだ無名の少年（17才）の素っ頓狂な依頼すつとんきょうに出版社が応ずる訳もなく、直ちに送り返してきますが、ワーグナーはそれにもめげず少し手を入れてはまた出版社に計3回も送りつけています。こんな所にもワーグナーの並の人とは違う性格の一端が出ているような気がします。

ワーグナーは18才になり、ゲーテも学んだ憧れのライプツィヒ大学に入学し、新設されたばかりの音楽美学を専攻しますが、彼はここでも勤勉な学生ではありませんでした。学生酒場に入り政治的な議論やカード賭博に明け暮れ、時には決闘騒ぎを起こすなどして2年で退学になってしまいます。しかしその間彼は無為むいに過ごした訳ではありません。聖トーマス教会のテーオドル・ヴァインリヒに音楽理論の個人教授を受けていたのです。師の高潔で誠実な人柄と丁寧で熱心な指導に心をうたれ、半年の内に和声楽や対位法を基礎からみっちり勉強しました。

後に大作曲家になったワーグナーに師がいるとすれば、このヴァインリヒをおいていないでしょう。ワーグナーはヴァインリヒに師事している間に早くも作曲に取り掛かり、ヴァインリヒの紹介で楽譜の出版にまでこぎ着け、あの伝統のあるゲバントハウス管弦楽団でも演奏してくれたということは、駆け出しの作曲家にとって大きな自信となりました。その時ピアノ・ソリストとして出演した13才のクララ・ヴィークいいなづけは許婚であるシューマン（ワーグナーより3才年上）へ「あなたは管弦楽曲でワーグナーに抜かれたわよ」という手紙を送っています。

ワーグナーは生涯で一曲しか交響曲を書いていませんが、それは彼の前にベートーベンというあまりにも偉大な先輩がいて、それを超えるには同じことをやっているのは駄目だという気があったからだと思われれます。

ワーグナーは23才の時、3才年上で既に11才になる連れ娘のいる花形女優

のミンナと結婚します。彼女はワーグナー同様わがままで、浪費家で嫉妬深かったため、二人の収入だけでは足りず、借金に追われる生活でした。夫婦はパリで一旗揚げようと債権者の眼を逃れて海路でパリを目指しますが、途中で台風^{そうぐう}に遭遇し、ノルウェーの港町に漂着します。ワーグナーはこの体験から「さまよえるオランダ人」の発想を得ますが、ミンナは船中で流産し、その後二人の間に子供は出来ませんでした。

債権者にパスポートを取り上げられていたワーグナー夫妻は、密入国でやっとパリに辿りついてみたものの、パリの実態は二人の期待したものとは程遠いものでした。そこで演じられていたオペラは低俗でレベルも低く、能力のある者が競い合うということもなく、全てコネや裏金が支配するドイツの田舎の劇場と変わらないものでした。パリで生活を続けるお金が必要ですが、自分のオペラの作品を上演してくれる劇場がない以上、小遣い稼ぎの作曲や指揮をしたり、さらに新聞・雑誌などに音楽批評を書く他ありません。独奏会を開ける位のピアノの腕前があればまだ良かったのですが、ワーグナーにはそこまでの実力はありませんでした。

ワーグナー夫妻は3年間のパリでの極貧生活の後、ドイツのドレスデンに帰りますが、パリでの収穫は天才ピアニストのリスト、作曲家のシューマンやベルリオーズ、詩人のハイネ等と知り合えたこと、ドイツ出身の若手芸術家たちと自宅で毎晩のように芸術論を闘わせたこと位でした。

ワーグナー29才の時、新装なったドレスデンのオペラ劇場で彼の作曲による5幕5時間以上にもなる本格的なグランド・オペラ「リエンツィ」が上演され、大成功を収め、若手作曲家としては珍しく続演されました。その好評にドレスデンのあるザクセン王国はワーグナーを宮廷指揮者に指名してきました。妻のミンナは狂喜して喜びましたが、ワーグナーは「リエンツィ」の成功に気をよくし、稼ぐことよりも創作活動に専念したかったので返答に迷っていました。そして不遜にも先輩の指揮者と同じ条件ならばと答えるとOKが出たの

で、自作の3幕の「さまよえるオランダ人」を舞台に掛け自ら指揮をとりました。しかし今回は前回のような訳にはいかず、4回の上演で打ち切られました。

当時ヨーロッパでは封建体制打倒を目指す市民蜂起が各都市で頻発ひんぱつしていましたが、1849年（36才）に彼の住むドレスデンにも飛び火し、ワーグナーは貧民を救済するというよりも、自らの自由な芸術活動を実現させたいという気持ちから、革命に参加しました。警察側では、彼を首謀者の一人とみて逮捕状が出てしまいます。やむなく彼はミンナをドレスデンに置いて一人国外脱出を試み、友人のリストの助力で偽造旅券でスイスのチューリッヒまで逃れ、そこで以降のための正式の旅券を取得します。その時の身長が166cmで、2度目の妻コージマより低かったことから、後世の風刺画では頭でっかちの小男に描かれることが多いのですが、当時のヨーロッパ人としては中肉中背だったといえるでしょう。

一人暮らしが続く間にワーグナーはワイン商のロソー夫人と恋仲になってしまい、ミンナに離縁状を書いたのですが、ミンナはかんかん怒ってワーグナーを追い回すし、ロソーには拳銃で命を狙われるという事態になって二人の駆け落ちは失敗に終わり、チューリッヒでミンナとの生活が再開されます。

食べていかなければならないワーグナーは、ロンドンのフィルハーモニー協会から指揮者としての依頼があったので4ヶ月の契約で16年ぶりにロンドンに向かいます。その間に嬉しい出来事がありました。デンマークの童話作家アンデルセンがヴァイマルでリスト指揮によるワーグナーの「ローエングリン」を聞いて感動し、直接作者に会いたいとわざわざロンドンまで来てくれたことです。

ところでミンナとの関係ですが、双方の歩み寄りの努力にも拘わらずミンナの嫉妬深さとワーグナーの浮気癖から彼が49才の時破局を迎えます。

翌年ワーグナーは自作のみの演奏会を3回パリで開きますが、一般の受けは概して良くなく、ベルリオーズに至っては理解不可能とまで酷評しています。

しかし、グノー、サンサーンス、詩人のボードレールやルノーなどは絶賛し、やがてフランスに訪れるワグネリズム（ワーグナー主義）を予感させるものがあったことは収穫でした。

ワーグナーにとって更に嬉しいことに、13年の長きにわたったドイツ追放が解除されて晴れて自由の身となったことでした。彼は既に49才になっていましたが、ナポレオン三世直々の要望で「タンホイザー」など彼の曲でパリのオペラ座を使って4回の公演が行われました。フランスにはオペラの途中にバレエを挿入するという伝統があり、ワーグナーがそれを拒否したこと、ナポレオン三世と対立関係にある旧王党派の貴族たちがパリのオペラ座の中心だったことから、この公演を失敗させてやろうという企みがあって皇帝臨席にも拘わらず、笛や太鼓を使った大ブーイングが起こり、やむなく4回目の公演は断念せざるを得ませんでした。

そんな折り、ワーグナーには思い掛けない朗報がもたらされました。バイエルの若き国王ルートヴィヒ二世がワーグナーに会いたがっているというので、秘書官と連れ立って直ちにバイエルの首都ミュンヘン^{えっけん}に行き、国王に謁見します。国王は15才の時に「ローエングリン」を観て感激し、ワーグナーを育てることこそ自分の一番の使命と考えるようになります。そして作曲のための多額の支援をすると同時に、自分の離宮の近くの一軒家ベレット荘をワーグナーの仕事場として提供します。ワーグナーは天国と地獄のような境遇の変化に大喜びし、さっそく自分の仕事の手伝いをしてくれていた指揮者でピアニストのビューローとコージマの夫婦をベレット荘へ呼び寄せます。ワーグナーの本意は恋の芽生えたコージマを身近に置くことだったとみえ、彼女は間もなくワーグナーの子を身ごもり彼女の三女として誕生しますが、あくまでも世間的にはビューローとコージマの子として押し通すことにします。

しかしいかに国王の意向とはいえ、ワーグナーへのあまりもの厚遇と彼がプロテスタントであること、彼の作品の公演のスタッフに多くの外国人を呼び集

めたことへの反発が新聞などに書きたてられるようになると、ワーグナーも居たたまれなくなり、国外退去を思い立ちますが、国王に強く慰留されて思い止まります。しかしルートヴィヒ王は首相や政府要人からの強い要請に抗しきれず、遂にワーグナー追放令にサインしてしまい、ワーグナーはコージマとビューロー夫妻を連れて取り敢えずチューリッヒに逃れます。その後も国王は生涯独身を通したので、ワーグナーとの同性愛さえ噂されました。

この追放中にワーグナーにとって二つの喜ばしいことがありました。一つはコージマとの間に彼の初めての長男（その前に2人の女の子をもうけています）が誕生したことです。そして翌年にはコージマ（リストの娘）と正式に結婚します。ビューローにはミュンヘンの宮廷歌劇場で「マイスタージンガー」の指揮をしてもらうなどワーグナーは大変世話になっているにも拘わらず、不思議にもビューローとコージマとの離婚が円満に成立したからです。ワーグナー57才の時でした。もう一つは若き哲学者ニーチェと会い、ショーペンハウエル論で意気投合し、お互い影響しあう仲となったことです。

ワーグナーは69才で作曲中に心臓発作を起こして亡くなりますが、それまでは若干健康上の問題はあったものの、主に自作のオペラを中心にヨーロッパ各地を演奏して回り順風満帆^{まんぱん}という音楽家人生を送ることができました。しかも自分の死後のことも考えてフリードリッヒ二世の支援と各国のワーグナー・ファンの寄付金を使ってドイツの静かな田舎町バイロイトにバイロイト祝祭劇場と私邸ヴァーンフリート邸を建設します。ワーグナーは生前2回その祝祭劇場で演奏会を開いていますが、その志を引き継ぎ、毎年の行事として定着させたのは、妻のコージマを初めとする子孫たちです。

コージマは夫亡き後、彼の作品の全曲を出来るだけワーグナーの演出を忠実に守って上演することと、彼との間に出来た息子ジークフリートを音楽家として自立させることが自分の役割であると認識し、見事にそれを実現させました。

私はワーグナーが大変な天才に恵まれていただけでなく、どこでも誰に対し

でもある意味で我が儘ともとれるほど自分の意思を貫き通す生き方に感心させられました。

ワーグナー作曲の主なオペラを列挙しておきましょう。

1. さまよえるオランダ人
2. タンホイザーとヴァルトブルクの歌合戦
3. ローエングリン
4. トリスタンとイゾルデ
5. ニュルンベルクのマイスタージンガー
6. ニーベルングの指環
7. バルジファル

(注) この紹介文は主として「ワーグナー」(吉田眞、音楽之友社)によっています。

7. 昆虫学者ファーブル

ファーブルは1823年南フランスのサン・レオン村の貧しい農家に長男として生まれました。名前をアンリー・ファーブルといいます。両親はあまりにも貧しかったので、アンリーを山で牧場を営むおじいさん、おばあさんの家に一時預かってもらうことにしました。アンリー5才の時です。

アンリーは両親と離れて暮らす淋しさよりも、牧場で蜂や蝶や蝉やてんとう虫、さらには大きなかぶと虫やくわがた虫を捕まえたり観察するのが楽しく、ホームシックに陥ることはありませんでした。特に見たことのない虫を捕まえることには異様な情熱を燃やし、その鳴く声が聞こえると周囲が真っ暗になるまで粘り強く追い回すので、おじいさんはアンリーが狼に襲われたのではないかと心配して銃をかついでアンリーを探しに行くこともありました。

「アンリー、この辺には夜になると恐ろしい人食い狼が出るんだぞ。お前にもしものことがあったら、わしらはお前のお父さん、お母さんに申し訳ないで

はないか。」と叱られました。「大丈夫だよ。僕には牛や羊を追い込む大きな犬がいつも味方として付いていてくれるから。」とアンリーは答えました。

昆虫好きのアンリーにも嫌いな虫がありました。それはかめ虫です。かめ虫をうっかり掴むと、ものすごい悪臭を発生し、手を洗ってもなかなかとれないのです。アンリーを最も惹きつけたのは、キリキリキリと澄んだ音色で鳴く虫で、何日もかかってやっと捕まえておじいさんに見せると、それはきりぎりすの仲間、やぶきりという虫でした。「お前はこんな虫を捕まえるために何日も暗くなるまでねばっていたんだね。なんと虫の好きな子だろう。」と言って呆れていました。

おじいさん、おばあさんの所に来て楽しく暮らしているうちに2年が過ぎアンリーも7才になり、小学校に上がる年になりました。そんな時お父さんが迎えに来ました。そしてすっかりたくましい山の少年に成長していたアンリーに抱きつきました。二人は積もる話があるのに何から話して良いか分かりません。お父さんは、おじいさん、おばあさんにお礼と別れの挨拶をしました。その頃はアンリーも牧場の仕事を手伝い、無くてはならない労働力に組み込まれ、立派な後継ぎとして期待されていたので、おじいさん、おばあさんもアンリーを手放したくありませんでしたが、教育の重要性についても十分認識していたので、涙をこらえて別れの晩餐会ばんさんかいを、催してくれました。アンリーも胸が一杯で全然食欲が湧きません。大好きな牛、羊、山の虫たち、仲良くなった犬などのお別れが辛かったのです。

アンリーはサン・レオン村にたった一つある小さな小学校に入学しました。その小学校には教室が一つしかなく、そこで1年生から6年生までの生徒が10人一緒に勉強していました。先生も一人で、教室は先生の宿直室を兼ねていて、ベッドや調理台まであり、先生は子供に教える他に床屋さんや教会の鐘突きなど3~4つの仕事をして、やっと暮らしているという有り様でした。授業中に先生の飼っている豚の親子やにわたりの親子が残飯を貰いにブーブー、コッ

コッコと鳴きながら教室に入って来たりする、今では想像もできない牧歌的な学校でしたが、アンリーはそういう学校が好きで休まず通いました。

そしてアンリーは優秀な成績で小学校を卒業しましたが、その頃お父さんは農業経営に失敗し、農地を売ってコーヒー店を開業しましたがそれにも失敗し、ついに一家離散して暮らさなければならなくなってしまいました。お父さんは出稼ぎに、お母さんは弟を連れて住み込みの家政婦になり、アンリーは独り残されてホームレスのような生活に陥りました。公園のベンチや大きな木の下をねぐらに、昼間は公園に来る人たちにレモン水などを売り歩くアルバイトをして、やっと暮らすような生活をする惨めな有り様になってしまいました。雨の日はアルバイトが出来ないので、中学に付属している図書館に通って、昆虫の図鑑を借りては公園で捕まえた見たことのない虫の種類を調べるのを楽しみにしていました。図書館の係の先生がみすぼらしい身なりの子が雨の日に限って通って来て熱心に調べているのを見て感心し、アビニオンにある師範学校を紹介してくれました。そこは月謝を払えないような貧乏な子も入学試験の成績が良ければ月謝を免除し、食事付きで寮にも入れてくれる特待生の制度があるということです。

アンリーはお金の掛からない師範学校に入りたいと、雨でアルバイトの出来ない日は、図書館で入試用の参考書を借り、開館から閉館まで猛烈に勉強し、見事一番で合格しました。アンリー16才の時でした。これで修業期間の3年間は食べる場所にも寝る場所にも苦労せずに勉強できると胸を膨らませて登校したのですが、すぐにアンリーは失望してしまいます。師範学校にはアンリーの大好きな虫や植物のことを教えてくれる理科がないし、逆に苦手な数学を教えてくれる学科がなかったばかりか、他の学科はアンリーが一人でも勉強できるし、授業のレベルも低かったのです。アンリーはここに3年間も在籍しているのは時間の無駄だと考え、1年短縮しようと一年生の年度末一挙に三年生に飛び級させて欲しいと生意気にも校長先生に申し出ました。そして特別の試験を

受けさせられたのですが、先生方も驚く成績でパスをし、最終学年に進みました。

いよいよ卒業ということになって困ったことになりました。アンリーは就職の口が見つからなく、勿論帰って行く家ありません。校長先生は心配してくれて、「アンリー君、君は3年間この寮で生活する権利があるんだから、1年間授業に縛られることなく自由に好きな研究をしたらいい。」と言ってくれました。アンリーは喜んで昆虫の研究や詩の勉強に励みました。そして翌年は校長先生の^{すいせん}推薦もあって、アンリーはアビニオンの近くにあるカルパントラスという町の小学校の先生となりました。アンリーは19才になっていました。ここからは子供のアンリーではなく立派な大人のファーブルと呼びます。

ファーブルは50人のクラスの担任となり、出来の悪い子にも気を配り、出来る子にはさらに興味が持てるように教えたので、生徒にも父兄にも次第に評判になっていきました。そしてファーブルのクラスから中学校を受けた生徒は全員良い成績で合格するという近年にないことが起こると、翌年は周辺の町村からもファーブルに習いたいという子供達が沢山集まってくるようになりました。そしてファーブル21才の時、同じ小学校に勤めるマリー・ビヤールと結婚します。

しかしその小学校の給料はとても少なく、子供でも出来たらとてもやっていけません。ファーブルは中学校の先生となるため理科と数学の先生の免状を取りました。勿論パスしたのですが、ファーブルを採用してくれる学校がなかなかみつかりません。「ファーブルは生徒より虫が好きな虫気違いだ。」という陰口を仲間の先生たちに言われていたからでしょうが、26才の時やっと地中海に浮かぶコルシカ島で就職口が見つかりました。

ファーブルは奥さんのマリーを連れ早速コルシカ島の中学校に赴任しました。ファーブルは海を見たことがなかったので、見るもの、聞くものが皆珍しく、虫も山の中に住む虫とは大分違っていました。ファーブルは「天国とはきっと

こんな所だろうね。」と子供のように有頂天になり、学校の勤めが終わると毎日昆虫や植物の採集に出掛けました。

そんなある日、ファーブルの所へフランスのトゥールーズ大学の有名な生物学者タンドン先生が訪ねて来ました。ファーブルはそれまでタンドン先生とは手紙のやり取りで知り合っていましたが、お会いするのは初めてです。タンドン先生はコルシカ島に植物採集に来られたのです。ファーブルは時間の許す限りコルシカ島を案内して回りました。そしてお別れの時、タンドン先生に「ファーブルさん、あなたは大好きな昆虫の研究に専念してはどうでしょう。数学の先生をおやりになるよりもその方が世の中のためになると私は思いますよ。」と言われ、ファーブルは電気にでも触れたようにハッとしました。それまで虫では食べていけないので数学をもっと勉強して大学の先生になろうと考えていたからです。ファーブルは皆が「虫けら」と言って馬鹿にする虫を研究して一生を送るといふ道もあるのだと思いました。

ファーブルは4年間コルシカ島にいて、健康上の都合で、師範学校で懐かしいアビニオン中学校に転任しました。その頃ファーブルには3人の子供が出来、離れ離れで暮らしていた両親も呼び寄せて7人家族で暮らしていたので小さな下宿は超満員でした。台所の隅に机を置いて勉強のスペースとしていたファーブルはレオン・デュフルという昆虫学者の書いた一冊の本を読んで衝撃を受けました。

その本は一種類の蜂の生き方を詳細に観察し正確に記述したものでした。「そうだ、採集して死んだ昆虫を沢山観察して分類するよりも、短い期間しか生きられない昆虫の生きている姿、つまり生態を詳しく研究する方が世の中の為になるのだ。」という昆虫学の正しい道にファーブルが気付いたのは、30才にもなろうという時でした。

それからというもの、ファーブルは森に行っては同じ虫を探し、餌えさの捕らえ方、その保存方法、巣の作り方、卵の生み方、子供の育て方などの真の姿を

じっくり観察するようになりました。ファールブルを中学校の先生とは知らないお百姓さんが、それを見とがめて、この男は最近あちこちで起こっている^{うさぎ}兎泥棒に違いないと思いこみ、屈強な若者を集め、警察をも動員して山狩りをする騒ぎがありました。警察に連行されて^{じんもん}尋問されたファールブルは勿論釈放されましたが、人騒がせな一件でした。

ファールブルはこうした地道な研究の一区切りごとに専門の雑誌に発表していったので、昆虫学者の間には次第にその名が知られるようになり、たまには賞金を貰えることもありました。しかしファールブルの貧乏暮らしは相変わらず続いていました。ファールブルは、家族のためにも、アビニオンのためにも、自分の虫の研究のためにも、何とかお金を生み出す仕組みが欲しいと考えていましたが、思いついたのが町の特産物の染色用の植物である「あかね」から、もっと鮮明な赤を抽出する方法の開発です。そのために自宅を改造し、大鍋や樽をそろえ、手を真っ赤にして研究に取り組みました。

そんなある日、思いもかけない人がファールブルの家を訪れました。時の文部大臣デュルリィさんです。デュルリィさんは昆虫学者でもあり、以前アビニオン中学校にお見えになった折り、ファールブルは一度お目に掛かり顔見知りではありましたが、まさか自宅にまで来て下さるとは思ってもいませんでした。デュルリィさんはファールブルが困窮の中でも昆虫の研究を続けていることを知って「何かお望みのものはありませんか。」と尋ねると、ファールブルは「何もありませんが、握手して下さい。」と赤く染まった手を差し出しました。

やがて大臣がお帰りになる時間となり、アビニオンの駅までファールブルが送りに行くと、そこには町の偉い人や町民が沢山集まっているではありませんか。ファールブルは逃げ出したくなりましたが、大臣はファールブルの手をしっかりと握って離しません。町長に何か一言と^{うなが}促されると大臣はファールブルの赤い手を高々と上げて「皆さんはファールブル先生のことをあまり良く知っていないようですが、先生は町の特産であるあかねの染料の改良に長年取り組んでいる町の

恩人、町の宝です。」と言ってスタスタ列車の方に歩いて行ってしまいました。同じ年ファーブルは皇帝ナポレオン三世に呼ばれて勲章を貰っていますが、これもデュルリィ文部大臣の計らいです。

ここで一つファーブルの昆虫研究のエピソードを紹介しましょう。蝉はファーブルが捕まえようと近づくとおしっこをひっかけて逃げてしまいますが、少し離れた所で大声を出しても逃げません。ファーブルはもしかしたら音が聞こえないのではないかという仮説を検証したくて、町に一つだけある大砲を借り出して空砲を撃ったらどうだろうと思い付き、町長と交渉しました。町長は大臣の件があるので断れません。ファーブルは町民に協力して貰い、大砲を蝉の鳴いている木の近くまで運び3発空砲を撃ってみましたが、もの凄い轟音にも拘わらず、蝉は逃げないばかりでなく、気持ち良さそうに鳴いていました。

それから暫くしてファーブルはあかねの染料の改良に成功したのですが、それが商品化されることはありませんでした。実はドイツで石炭から赤い染料を安く抽出する方法が発明されてしまったのです。ファーブルは投資と10年近い研究の全てが水泡に帰してしまいました。ファーブル一家の極貧生活は続きます。2～3年してアビニオンに昼間働かなければならない子供達のための夜間中学が出来、ファーブルは依頼されてそこでも理科を教えるようになり、やれやれと思っていたら、ファーブルの評判の良さを妬む同僚が町の長老に嘘の告げ口をし、ファーブルは夜間中学ばかりか昼間の中学校まで首になってしまいます。ファーブル48才の時です。

安定収入を失ったファーブルは、以降執筆活動によって収入を得る以外に方法が無くなってしまいます。そしてまず書いたのが「子供のための科学物語」で、これは近年にない良い本だということで、まあまあの売れ行きでしたので、その勢いをかってファーブルは自分の専門の「昆虫記」第1巻を55才で出版します。そして2～3年に1巻ずつ出版を続け、全部で10巻という大作となりましたが、最初は専門家の評価こそ高かったものの一般の人々は殆ど買ってくれ

ませんでした。

ファーブル87才の時、友人や弟子たちが4月3日を「ファーブルの日」と定めて祝ってくれましたが、その頃から「昆虫記」が科学と結びついた優れた文学であるとして世界中の人たちに読まれるようになっていきました。そして90才の時にはフランスの大統領ポアンカレが、フランスの生んだ誇るべき偉人としてファーブルの自宅を訪問しています。ファーブルは92才で亡くなりましたが、幸せな最晩年だったと思います。

(注) 以上の紹介文は偕成社の児童伝記シリーズ「ファーブル」(神戸淳吉)によっています。

8. ロシアを代表する作曲家 チャイコフスキー

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキーは1840年にロシアの都ペテルブルグ(現在のサンクト・ペテルブルグ)から東に遠く離れたヴォトキンスクという鉱山の町に生まれました。父は鉱山の監督官を務める役人で、母はチャイコフスキー自身が近寄りがたいと思うほどの美人で、プロの歌手ではないけれど素晴らしい美声の持ち主だったといえます。チャイコフスキーには姉と兄と妹が居り、10才の時さらに双子の兄弟が生まれます。チャイコフスキーが幼い頃は父の稼ぎも良く、彼が4才の時フランス人女性ファニー先生を住み込みの家庭教師として迎えます。

ファニー先生は忙しい母に代わって子供たちに勉強を教えるだけでなく、世界の歴史や童話や易しい小説を読んで聞かせ、いつも側にいて優しく見守ってくれていました。

チャイコフスキー家では、皆音楽が趣味で、父はフルート、母は歌とピアノ、それに父の友人たちも加わって夕食後などにしばしば自宅でミニ・コンサートを開いていました。チャイコフスキーも小さい頃からモーツァルトのオペラやシュトラウスのワルツが大好きで、覚えた節を自分なりにピアノで弾いたりし

で遊んでいました。それを見て両親は音楽の才能があるかもしれないとチャイコフスキー5才の時から本格的にピアノを習わせました。

チャイコフスキー8才の時、母のように慕っていたファニー先生と別れの時が来ます。父が勤めていた鉱山の経営がうまく行かなくなり、チャイコフスキー一家も家庭教師を雇うほどの余裕が無くなってしまったからです。両親はチャイコフスキーを音楽家にするという夢も断たれ、彼は10才の時ペテルブルグの法律学校に入学させられ、寮生活が始まりますが、人一倍淋しがり屋の彼はたちまちホームシックになり、毎晩枕を涙で濡らす有り様でした。

その上、チャイコフスキーが10才の時、母がコレラに罹り、全身に黒い斑点が出来、消毒のために生きたまま熱湯に浸けられてあっという間に亡くなってしまいます。その一部始終を見てしまったチャイコフスキーは、あまりのショックに精神的に女性を愛することは出来ても、女性の肉体が母の肉体と重なってしまい、肉体関係を持つことが恐ろしくなっていました。

父は息子を母の死のショックから立ち直らせようと、乏しい収入ながらも新たにピアノの先生を探してきて、一旦やめていたピアノのレッスンを再開しました。しかしそれは彼をプロの音楽家にするためではなく、あくまでも趣味としてのものでした。何しろロシアにおける音楽家の地位は低く、役人のような安定的な収入はとても期待できなかったからです。彼はピアノを弾くことによって、9年間という長い法律学校を何とか卒業し、19才で父の期待通りペテルブルグにある法務省の役人になります。しかし役人生活はチャイコフスキーにとって何とも味気なく、生涯を捧げる気にはどうしてもなれませんでした。

そんな時、ペテルブルグにロシアで天才ピアニストとして評判のアントン・ルビンシテインが音楽教室を開くというので、チャイコフスキーは役人をしながら入門します。その音楽教室がペテルブルグ音楽院と名を変え、プロの音楽家の育成を目指すようになると、チャイコフスキーのように役人との両天秤という訳にはいかなくなります。チャイコフスキーは人生の選択にさんざん悩ん

だあげく、役人の道を捨て、どんなに厳しくても作曲家になろうと決意します。彼は既に23才になっており、ずいぶん遅い決断でした。彼が音楽の勉強に専念して2年、彼は優秀な成績で音楽院を卒業し、アントン・ルビンシテイン先生の弟のニコライ・ルビンシテインが新しく作ったモスクワ音楽院の先生として招かれます。

チャイコフスキーは先生としての仕事の合間をぬって毎晩遅くまで作曲に励みますが、自分が期待するような曲がなかなか出来ません。無理がたたったのか彼は病気になり、眠れぬ夜が続きます。それでも春が過ぎ夏が終わる頃、大作の「交響曲第一番」が完成したので、それを持ってペテルブルグのアントン・ルビンシテイン先生を訪ねますが、先生の言葉は「こんな曲は演奏できない。」という冷たいものでした。意気消沈してモスクワに帰った彼を励ましてくれたのは、意外にもニコライ・ルビンシテインでした。彼はチャイコフスキーの第一交響曲には確かに稚拙^{ちせつ}な面は多いけれど、逆に伝統にとらわれない自由奔放さがあり、そこを伸ばせば全く新しい交響曲が生まれる可能性があると言って、自ら指揮をしてモスクワの人々に紹介しました。結果は成功とまではいかないまでも、音楽院の友人たちを中心に何人かから称賛されました。チャイコフスキーはそれで十分満足し、それまで彼を悩ましてきた首都ペテルブルグへのホームシックに似たノスタルジーから抜け出し、未完成で粗削りなモスクワという都市の可能性を再評価し、自らもその建設に貢献したいと思うようになりました。

次に彼の取り組んだのはオペラの作曲でしたが、オペラは交響曲以上に大掛かりでその作曲には大変な労力を要するだけでなく、当時のロシアでは皇帝ピョートル大帝が150年前から推し進めた「ヨーロッパに追いつけ、追い越せ」運動の最中だったこともあり、イタリアやフランスのオペラの全盛期に、ロシアの若手作曲家が物語から書いて作曲もするということが困難に思われました。そこでチャイコフスキーは、以前にニコライ・ルビンシテインに紹介さ

れたロシアの文豪オストロフスキーに物語をお願いしてみようと思いついたのです。ルビンシテインは社交下手のチャイコフスキーを直してやろうとチャンスがあれば無理にでも彼を連れ出し、そこに集まっている人たちをうまく利用することを勧めていたのです。オストロフスキーは快く引き受けてくれて、「地方長官」というオペラの台本を書いてくれることになりました。

チャイコフスキーは物語が出来る順に待ちかねたように作曲していき、友人たちにピアノで聞いてもらって意見を聞いては手を入れていたので、物語が完成すると間もなくオペラも仕上がり、ルビンシテイン先生に見てもらいました。先生は「なかなか良く出来ている。この中の1曲「小間使いの踊り」を君自身が指揮して私が企画しているフィンランドの貧民のための慈善演奏会で発表してみたらどうかね。作曲者として大成功するためには指揮の経験も必要だよ。」と言ってくれましたので、チャイコフスキーは嬉しくなつてつい承諾してしまいました。それを聞いて気をもんだのは友人たちで、普段から気の小さいチャイコフスキーに大勢の聴衆を背にし、50人のオーケストラを指揮するなんてことが出来る訳ないと思ったからです。しかし下手に注意すると彼を傷つけることになると、誰も手を出せないでいるうちにコンサート当日を迎えてしまいます。

友人たちは心配して最前列を陣取って見守っています。チャイコフスキーは自分の順番が来て指揮台に向かった途端、満員の聴衆から好奇に満ちた眼差しの大拍手を受け、急に頭の中が真っ白になってしまいます。そして前のめりになりながら、やっと指揮台に辿りついたもののキョロキョロ聴衆の方を見たり、左手で最後まで自分の顎髭あごひげをつかつかんだまま右手で自分の書いた楽譜なのに全く出鱈目でたらめな指揮をしました。ルビンシテインに厳選された楽員はそういうことになれていたお陰で、コンサート・マスターの方だけを見ながら無事演奏は終わりました。その時は歌のないオーケストラだけだったことも幸いでした。それ以来チャイコフスキーは20年近くどんなに頼まれても、指揮をすることは

断り続けました。

それでもチャイコフスキー最初のオペラ「地方長官」はルビンシテインの強い申し入れもあってモスクワ第一の大劇場ボリショイ劇場で取り上げてもらうところまでは行きました。しかし、ロシア人作曲のオペラを軽視していた劇場側は、「地方長官」には二流のオーケストラと二流の歌手しか当てませんでした。チャイコフスキーのしている前で、練習の時足で楽譜をめくるヴァイオリニストもいる程練習に熱が入っていませんでした。案の定ボリショイ劇場での公演は失敗に終わりました。全力投球した自作オペラの失敗に気を落とした彼は、ボリショイ劇場の図書館から直筆の楽譜を持ち出して、自分で燃やしてしまい二度と公演出来ないようにしてしまいます。

こうして失意のどん底にあったチャイコフスキーはそこから抜け出そうと、妹の嫁いだウクライナの田舎町で一夏を過ごします。その時丁度妹の家ではペチカの修理をしていて、そのペチカ職人が口ずさんでいたウクライナ地方の民謡が何とも心地良く、それをベースに弦楽四重奏曲第一番第二楽章が生まれます。それは後にトルストイが涙を流して感動したというアンダンテ・カンタービレとして有名な曲です。

彼が30才になる頃にはモスクワ音楽院での彼の授業時間は週27時間にもなり、収入も大分増えたので、ルビンシテイン先生の家での居候生活から小さな部屋を借りて下男と二人で独立の生活を営むようになりますが、相変わらず貧乏生活でした。たまには作曲の仕事で臨時収入もあるのですが、彼は全くお金の計算は苦手で、入れば友人に奢^{おご}ってしまい、無くなれば毎日でも下男の作るキャベツのスープと黒パンだけで満足していました。彼の唯一の不満は次々に湧き出るメロディーやハーモニーを書き留める時間の不足でした。このままでは死の方が先に来てしまうのではないかと恐れるほどでした。

彼は貴族が趣味で片手間に作曲するのとは違い、パン屋がパンを焼くように毎日命懸けで作曲し続ける、これまでロシアにはなかった専門の作曲家、職人的

作曲家になりつつあったのです。

チャイコフスキーが36才の時、夫がロシアの大鉄道王だったフォン・メック未亡人との交際が始まります。メック夫人はチャイコフスキーの熱烈なファンで、ルビンシテインとも親しく、彼の財政状態については事前に良く知っていました。メック夫人は自分が弾くためのヴァイオリンやピアノの小品をチャイコフスキーに頼むこともありましたが、それとは関係なく彼に家計のやりくりを煩わされることなく作曲に専念できるようにかなりの額の年金を13年にもわたって支払ってくれました。それにも拘わらずメック夫人は彼に何も要求せず、顔を合わせないことを条件に手紙のやり取りだけを行いました。

メック夫人との交際が始まった翌年、彼は37才で若い女性と突然結婚します。彼女はいわゆる「有名人病」で、有名人の奥様におさまって派手な社交界にデビューすることだけが夢の無能で単純な女で、相手は別にチャイコフスキーでなくても良かったのですが、女性経験が殆どなかった彼にはそれが見抜けず、まるで押しかけ女房のような形で強引に結婚まで持ち込まれてしまいます。

結婚してみて、彼は自由に作曲できる時間が増えるどころか、彼女の身勝手な振る舞いに振り回され、直ぐに取り返しのつかない失敗をしたことに気が付きます。彼は完全にノイローゼになり、モスクワ川で入水自殺を図りますが、風邪を引いただけで助かってしまいます。

彼は彼女に二人での生活は不可能であることを説得し、結婚を取り消してくれるよう頼みますが、全く受け付けてもらえません。彼は黙って家を出て、すぐ下の弟に離婚の手続きを全て頼み、自分はウクライナの妹の所で暫く静養することにします。4ヶ月掛かってやっと離婚の手続きは完了しましたが、このことが二人に与えた精神的な影響は大きく、彼女は生涯精神病院暮らしが続き、彼の方はメック夫人を例外として女性恐怖症に陥ってしまいました。

彼はメック夫人のお陰でモスクワ大学からの給料に頼らずに自由に作曲に専

念することが出来るようになりました。それは当時の音楽家として実に恵まれた境遇でした。バッハにしてもヘンデルにしてもモーツァルトにしてもやりたくない仕事の束縛の元での作曲活動で、かろうじてベートーベンだけが貧乏暮らしながらも作曲活動に専念できたのです。

チャイコフスキーはモスクワ音楽院を辞して離婚のショックから立ち直る目的もあって、国内及びヨーロッパ各地を旅して回る生活をしていましたが、どこか田舎にじっくり落ち着ける拠点が欲しくなり、45才の時モスクワの北約100キロの小さな村クリンに家を建て、腰を据えて作曲に専念するようになります。

そこでは彼は2人の使用人を雇い、毎日の時間割を決め、それを守って生活をし、他人の不意の訪問によってそれを乱されるのを嫌いました。

彼が47才の時、あの忌まわしい指揮の失敗から19年たって、再び自ら指揮台に立たざるを得ない事態が発生しました。彼の新作オペラ「かわいい靴」の上演が間近に迫ったある日「指揮者急病で倒れる、代わりに指揮を頼む」という電報がボリショイ劇場の支配人から届きました。おそらく彼が断れば上演中止ということになるでしょう。彼は勇気を振り絞って承諾しました。結果は大成功でそのニュースはヨーロッパ中に広まり、彼の曲を彼の指揮でという要望が各地の劇場から舞い込むようになりました。それ以来長期演奏旅行と、田舎の自宅に閉じ籠もっての作曲という生活パターンが定着します。

演奏旅行によってチャイコフスキーは多くの作曲家に巡り会い、影響しあいます。わけてもブラームス、グリーグ、ドボルザークとは親交を結びます。この頃ロシア政府からも年金が出るようになります。

一方で彼にとって悲しい出来事もありました。生涯の友人と思っていたメック夫人から破産に瀕^{ひん}しているという理由で年金の打ち切りと別れを告げる手紙が届いたのです。年金の打ち切りはともかく、交際までやめるということはチャイコフスキーをひどく傷つけました。確かなことは分かりませんが、彼を

やっかむ人が、彼は同性愛者で好きな人もいると偽りの告げ口をしたということのようです。

チャイコフスキーは53才（1893年）でペテルブルグの水道水に当たり、母親と同じコレラで亡くなりました。その短い人生の間に彼はあらゆる分野の作曲をしましたが、その代表的な曲は、バレエ音楽「白鳥の湖」、「眠れる森の美女」、「くるみ割り人形」、オペラ「エフゲニー・オネーギン」、「スペードの女王」、交響曲第六番（悲愴）、弦楽四重奏曲「アンダンテ・カンタービレ」などです。音楽史的には、それまでありあわせの曲をつないで間に合わせてきたバレエ音楽を芸術性の高い音楽にしてバレエをオペラと並ぶ一つのジャンルに高めたことが評価されるでしょう。

チャイコフスキーは死の直前にイギリスのケンブリッジ大学から音楽名誉博士号を授賞しており、また自作のオペラ「エフゲニー・オネーギン」を100回以上も聞くことが出来たし、晩年は好きな作曲に専念出来たことなど短い人生ながら音楽家としては幸せな生涯だったのではないかと思います。

（注）この紹介文は主として「チャイコフスキー」（ひのまどか、リブリオ出版）によっています。

9. 日本人に最もポピュラーな洋画家 ルノワール

ルノワールは1841年にフランス中部の磁器の町で、仕立屋の父とお針子の母の間に7人兄弟の6番目の子として生まれました。13才の時、彼は父の意向で磁器工房に見習い工として入り、絵付けなどを行いますが、その出来映えは先輩たちを驚かせました。彼はその仕事に不満があった訳ではないのですが、機械化によって職人の手仕事が減りつつあったことや、ルネッサンス以降職人よりも芸術家の地位が上がってきたことから、芸術家への転身を決意します。ただし職人^{かたぎ}気質は生涯持ち続けました。

彼は21才で官立美術学校に入り、伝統的な絵画の技法を身につけますが、遅いスタートを挽回しようと、ルーヴル美術館での模写許可を得、また画家シャルル・グレースが経営する自由画塾にも入って猛烈に勉強しました。特に自由画塾で後に印象派といわれるグループの中心となるモネ、シスレーなどに会ったことは、彼の画家としての人生に大きな影響を与えました。彼は仲間たちとフォンテンヌブローの森に写生に行き、それぞれ自分に見えるままにキャンバスに描きました。このようなことは官立美術学校ではあり得ないことで、従来からの絵の勉強は、巨匠たちの絵を真似ることだったのです。仲間たちは、我が道を行くとばかり、そのまま突き進んでいきましたが、官展であるサロンのアカデミズムの中にも自分の学ぶものがあると思い、落選、入選を繰り返しながらも出展し続けました。そんなルノワールに対しても、仲間たちは除け者にならずに付き合い続けてくれました。

主としてモネとピサロが中心となってサロンに代わる自分たちだけのグループ展を1874年から計8回開催しますが、ルノワールはそのうち最初の4回だけ出品しています。そのグループを後世の人たちが印象派と呼ぶようになったのは、モネがグループ展に出品した作品に「印象一日の出」というタイトルを付けたことに由来します。ルノワールが印象派展に出品しなくなったのは、出版業者シャルパンティエの保護と援助を受けて一時途絶えていたサロンへの出品が出来るようになり、そしてサロンへの入選が続いたお陰で肖像画家としての地位が確立し、少しずつ肖像画の注文も増えていったからです。

一方でルノワールはモネとの親交も深め、光と陰の微妙な調和を一枚の絵に表現するため、パリ近郊の鉄道で15分で行けるようになったアルジャントウイユへ、モネと一緒によく写生に行きました。また二人は、パリ万博が行われたポン・ヌフ近くのセーヌ川に掛かる橋の情景もよく写生しました。セーヌ川では周辺の人々やパリの人々が散策や川遊び、ピクニックなどを盛んに行っており、二人はその活気を絵に表したかったのでしょう。

ヌードは何時の時代も画家たちが描きたいモチーフの一つでしたが、それを可能とする唯一の方法は、美の女神ヴィーナスとして描くことでした。ところがルノワールは豊満な肉体を持つ生身の人間をモデルとし、木漏れ日による肌の変化を色彩で表現しました。これを観た当時の有名な批評家は「この女性のトルソ（胴体）は腐敗の過程にある。」と酷評しました。

ルノワールの絵で特に有名なのは、オルセー美術館にある「ムーラン・ド・ラ・ギャレットの舞踏場」です。この舞踏場はモンマルトルの丘の中腹にあり、その名称は、ムーラン（風車）を建物の目玉にして、入場者にギャレットというクレープのようなお菓子を配ったことに由来します。この絵ではルノワールは庶民がダンスに興じて楽しむ姿を、生き生きと描き出しています。あくまでも現場主義のルノワールは、この絵のために近くに小さなアトリエを借りて仕上げたといわれます。

庶民の楽しみといえば、サーカスもその一つです。わけても道化師は芸術家の心情を投影するのに適していると思え、ルノワールの他にドガ、ロートレック、スーラ、後にピカソやルオーもモチーフとして取り上げています。少女像もルノワールが好んで描きました。勿論注文も多かったのですが、売るためでなく自分の創作意欲をそそられるモチーフだったのだと思われます。ルノワールの時代頃から裕福な市民が部屋を飾るインテリアとして絵を買い求めるようになり、画家と市民の間を仲介する画商や絵を集めることを趣味とする蒐集家しゅうしゅうかや画家を財政的に支援するパトロンが現れ、画家が宮廷画家としてではなく、普通の職業として次第に成り立つようになります。ルノワールにも多くの蒐集家やパトロンが付き、経済的余裕も出来たのですが、一方でそれらの人々の要望を聞き、好みに合わせざるを得なくなり、注文制作と芸術探求との間の葛藤に悩むようになります。

ルノワールは1881年の秋から翌年の初めにかけて、初めてイタリアを旅しますが、その目的は彼らの要求を受け入れるために繰り返されるモデルの同じ

姿勢、きざな上品さ、感傷的な甘さといった制約から逃れるためだったとも言われています。彼はヴェネツィア、フィレンツェ、ナポリ、ローマと旅しますが、その間新しいモチーフと構図を求めて沢山のスケッチをしています。そして彼が一番の影響を受けたのはローマのヴァチカン宮殿で観たラファエロの壁画だといえます。

ルノワールは40才の時（1881年）お針子だった若いアリーヌと結婚します。イタリア旅行は彼女との新婚旅行の意味もあったと思われます。旅行中に「水浴する金髪の少女」と題する健康で美しいヌードを仕上げています。アリーヌは彼との間に3人の男の子をもうけ、彼が78才で亡くなる4年前に55才で亡くなりますが、ルノワールの創作活動を支える良き伴侶であり続けました。

「ムーラン・ド・ラ・ギャレット」と並んで彼の代表作といわれる「船遊びをする人たちの昼食」は、絵画とは「生きる^{たわむ}喜び」を描くことだと考えていた彼の思想が良く表れた傑作ですが、その中で犬と戯れている少女が、結婚前の18才のアリーヌだといわれています。彼はこの作品で色彩を大事にする印象派の画法と輪郭線を明確にする古典主義の画法を融合させて彼独自の画法を確立しようと努力しています。

ルノワールはドイツの音楽家ワーグナーの肖像画を描いた後、以前モネに紹介されたセザンヌのアトリエを訪れ、一緒にサント＝ヴィクトワール山を写生しています。二人の画風はかなり違うのですが、後にセザンヌがメイドに心を乱して、半狂乱で妻子と共にルノワールの家に転がり込んで来た時にルノワールとアリーヌが温かく迎え入れていることから、ルノワールとセザンヌの親交関係が伺えます。ルノワールの友人として忘れてはならない人にヴァレリーナの絵で有名なドガがいます。ルノワールにも「踊り子」というタイトルの可愛い少女の絵がありますが、この絵はドガの作品だと思っていた人々もいたほど、ルノワールはドガの影響を受けています。

ルノワールは画家であると同時に彫刻家でもあり、多くの作品を残していま

すが、絵や彫刻のモデルとして一番多く登場するのがガブリエルという女性です。彼女は妻のアリーヌが実家に帰った時、妻がメイドとして自分の従妹を連れて来たのです。彼女は非常に明るい子で、3人の息子たちも大喜びでした。

ルノワールの晩年はリュウマチとの闘いでした。その原因とされるのが39才と56才の時の自転車事故による右腕の骨折です。右手の自由が効かないとなると彫刻は諦めざるを得ず、絵は腕に鉛筆を縛り付けての不自由な制作ということになります。ルノワールは62才の時、パリの喧騒^{けんそう}を避けて南仏のカーニュに移住し、郵便局のある建物の一部を借り受けますが、67才の時同じカーニュに自分の家を建てます。親しい友人や、自分を慕う若い芸術家に囲まれて談笑することの好きな夫のために、妻のアリーヌが努力したお陰で来訪者も次第に増えていきます。その中に梅原龍三郎もいました。彼はリュクサンブールで観たルノワールに大変感動し、同じ年山下新太郎や有島生馬^{いくま}を誘って再度訪問し、何点か彼の作品を譲り受け、日本に紹介します。雑誌「白樺」などを通じてルノワールの作品の画風を知って、岸田劉生^{りゅうせい}なども強い影響を受けました。

私は家内と平成6年にニースから車で30分ほどの小さな田舎町カーニュにあるルノワール記念美術館に行ってみました。ルノワールの最後のアトリエを今では町が買い上げて美術館として公開しています。作品の展示は少ないのですが、彼が使っていた車椅子やパレット、絵筆などの遺品が飾ってありました。広い庭からは中世の城郭都市カーニュ・シュル・メールを見あげることができ、見下ろせば地中海が見える風光明媚^{ふうこうめいび}な場所です。ここでルノワールが死ぬまで執念を燃やして創作活動に励むことができたのは、妻の従妹のガブリエルに秘かな愛を感じていたからだと思えます。

真ん丸い顔、太り過ぎと思われる体、日本人の感覚では決して美人の部類には入らないのだけれど、ルノワールの筆にかかるといかにも愛らしく、エロティックで、豊じょうな母なる大地を思わせる女性になるから不思議です。

現在ルノワールという店名の高級喫茶店が日本で全国展開しているのを見ても、ルノワールが我が国でも最もポピュラーな作家ではないかと思います。彼の絵は、国内のいくつかの美術館でも鑑賞することができます。中でも上野の国立西洋美術館が収蔵している「アルジェリア風のパリの女たち」という大作を、私はルノワールの代表作の一つとして挙げて良いのではと思っています。

(注) この紹介文は、主として「ルノワール」(島田紀夫、東京美術)によっています。

10. 鳥人ライト兄弟

ライト兄弟は、世界の偉人伝には必ず登場する有名人ですが、意外に何をした人たちなのかを知っている人は少ないようなので、最初にそのことについて触れておきましょう。ライト兄弟は、世界で初めて動力を使って鳥のように空を飛んだ偉大な発明家です。飛んだといっても、飛行距離は僅かに36m、飛行時間も12秒というものでしたが、ガソリン・エンジンでプロペラを回して飛んだというところに大きな意味があるのです。

その後飛行機は主として戦争のための武器として急速に発達していくという不幸な歴史をたどるので、私は敢えて先回の本の26人には入れなかったのですが、今回は大幅に範囲を広げたので入れることにしました。

ライト兄弟が初めての動力飛行に成功して24年後の1927年にアメリカの郵便飛行士だったリンドバーグがニューヨーク～パリ間の大西洋無着陸横断飛行に成功し、「翼よ、あれがパリの灯だ」と言ったという話は有名で映画化されジェームス・スチュアートがリンドバーグの役をやったシーンを私は今でも鮮明に覚えています。実は日本にも鳥人を目指した人がいたのですが、それについては最後に触れます。

ライト兄弟は、牧師の父ミルトン・ライトと図工の先生をしていた母スーザン・キャサリン・ライトとの間に生まれた男4人、末っ子の女1人のうちの3男、

4男です。兄をウィルバー（1867年生まれ）といい、4才年下の弟をオービルといい、二人は大変仲良しで、結婚もせず、何をするのも一緒でした。

オービルが5才の誕生日の時、お父さんから棒の先のわっかに付いているくるくる回る不思議なこまを贈られました。オービルが不思議がってどうしてなんだろうと思いながら一人で何回も回して遊んでいると、兄のウィルバーも好奇心にかられて「僕にも貸して」と言って自分でもやってみました。そして早速二人でこまの原理を研究することにしました。兄弟は古いおもちゃや時計を分解して、その仕組みを調べるのが大好きでした。二人の仕事場は物置の片隅でした。

二人が仕組みを解明し、新しい便利なものを創り出すという性向は、母を受け継いだもののようです。母は図工の先生だけあって、家の中のものはほとんど自分一人で作っていました。まず何に使うものかをよく考えて、それを図面に画いてから作り出します。二人はそういうことを繰り返していけば、いつかはもっと複雑なことも必ず出来るようになるという固い信念を自然に身につけていったのです。

実は母の父親、二人にとってのおじいちゃんの仕事が馬車を作ることで、その仕事ぶりを見るのが二人とも大好きでした。おじいちゃんの作った馬車は、どの馬車より格好が良かったし、走りが良かったからです。その仕事場には、二人にとって宝となる木切れや、釘、ねじなどが沢山あり、それらのいくつかを貰って帰ることが楽しみだったのです。

また、近所にある修理屋さんも、二人の勉強のために大変参考になりました。ある時その見学について夢中になり、あたりが暗くなるのも気づかず、二人の家事の役割である水運びやまき運びが出来なかったので、お母さんに夕食抜きを罰を受けてしまいます。二人は修理屋さんで学んだ知識を応用して家のためになれないかと、オーブンのふたを手始めに、家で故障した箇所を修理を自分たちに任せて欲しいとお母さんに申し出ました。久方振りに帰宅したお父

さんもそれを聞くと感心し、二人に自分の道具箱を自由に使うことを認めました。やがて我が家には修理箇所がなくなると、「早くどこか故障してくれないかなー」と心待ちするようになります。

その後二人は、雪そり競走用のそりを作りますが、一度目はスピードが出ず、しかも木にぶつかってしまって完全に失敗しました。お母さんにアドバイスを受け、空気抵抗を大幅に減らすと同時にその頃はなかった「かじ」を付けることによって、次の大会では見事1位になって自分達でも考えればやれるんだという自信を持ちました。二人は次に何を作ろうかと貯金を出し合いますが、何を作るにしてもその材料代にもなりません。そこで近所の修理屋さんに相談に行くと、裏庭に沢山捨ててあるこわれた手押し車などなら、ただでくれるというので喜んで貰って帰り、使える手押し車に直して修理屋さんに持って行くと、修理屋さんはその出来映えにびっくりし、「それを使って近所の家からガラクタを集めてくれれば小遣いをあげよう。」と言ってくれました。二人は学校から帰ると一生懸命ガラクタ集めに精を出したので、二人の貯金箱もズッシリと重くなっていました。

ある日お父さんが長い出張から帰った時、二人におもちゃのヘリコプターをお土産に買ってきてくれました。それは日本の竹トンボのようなものですが、動力は捻ったゴム紐が元に戻る力を利用したものでした。ゴム紐を限界まで巻いて手を離すとそのおもちゃは天井近くまで上がり、しばらく浮いてゆっくりと床に落ちてきました。それによって一挙に二人の空への憧れに火がつきました。二人は模型をもっと大きくすれば、より高くより長く飛べるのではないかと2倍の大きさの模型を作ったのですが、ほとんど上がらずに落ちてこわれてしまいました。

彼等はお父さんの仕事の都合で度々転居していますが、リッチモンドという大きな町に引っ越して来た時、ウィルバーは14才、オービルは10才、妹のキャサリンは7才になっていました。

そこで三人は大きな学校に転校しましたが、ガリ勉野郎と誤解され、最初のうちはいじめを受けました。ところが校内の凧揚げ大会の時、兄弟の凧が一番高く上がり、強風にも負けず一番長く空中に留まっていた優勝してしまいました。兄弟は風の計算を凧の設計の段階から取り入れていたからです。翌日から兄弟は校内の英雄に祭り上げられ、多くの生徒から凧作りを依頼されるようになりました。

兄ウィルバーが16才の時、アイスホッケーの試合中、相手のスティックが顔に当たり、前歯を8本も折る大けがをし、二人の共同作業は一時途切れます。しかしその間も弟オービルは印刷の仕事続け、古い効率の悪い印刷機を少しずつ改善していきました。オービルは2年にわたって大きな印刷屋でのアルバイトを続け、最新型の大型印刷機の仕組みを学び、兄が健康を回復するや二人で大型印刷機を作り上げ、「ウエスト・サイド・ニュース」という地域密着型の新聞を発行するようになります。その頃にはキャサリンも新聞の部数を数えたり、紙を揃えたりという単純作業を手伝えるようになりました。

そんな時、一家に大きな不幸が襲いました。以前から体調が優れなかったお母さんが実は肺結核だったことが分かり、子供達の必死の看病にもかかわらず亡くなってしまったのです。

お父さんは布教活動のため家を空けることが多く、実質上一家の中心はウィルバーとオービルが担うことになります。お母さんの願いも、「自分が死んだ後も明るく元気で生きて欲しい。」ということだったので兄弟はいつまでも悲嘆に暮れていることなく、当時若者の間で流行しだした自転車の修理・販売に精力を集中することにしました。地域新聞も発行部数が600部位まで伸びてきていましたが、その全てを友人に譲ってしまいました。

オービルは数週間後に町で自転車レースが行われるという話を聞きつけ、それに自分が自分達で作った自転車で出場し、優勝すれば「ライト兄弟の自転車は中古品を改良したものだけれど性能は新品以上だ」と評判になり、きっと売

れるようになると兄に相談すると、「自分は病み上がりで体力に自信がないのでお前に全てを任せる」ということになりました。オービル20才の時自転車レースが行われ、オービルはピカピカの新品の自転車の中で見事1位でゴールし、町で大変な評判となり、兄弟は目の回るような忙しさになりました。

そんな中、グライダーで15秒間飛んだという世界記録を持っているドイツ人のリリエントールが実験中の事故で死亡したというニュースが入ってきました。そのニュースにショックを受けましたが、人間が鳥のように空を飛ぶというリリエントールの意志を自分達が引き継ごうということになりました。そして二人は自転車の会社を友人に譲り、世界中から資料を集め飛行の研究に専念しました。

飛行の研究には命懸けの実験を避けて通れませんし、何段階にも分けて数多くの実験が必要です。二人はまずノースカロライナ州のキティホークという砂丘でグライダーを使った実験を行いました。そして何回目かに180mという世界記録を達成しましたが、その途中では墜落して機体はメチャクチャになる事故もありました。砂丘の上だったので乗っていたオービルは幸い無傷でした。二人はいよいよガソリンエンジン付きの飛行機の製作と実験に取り掛かりました。そして1903年、世界で初めて同じキティホークの砂丘でフライヤー1号と名付けた動力付きの飛行機の飛行に成功しました。その距離も滞空時間も僅かなものでしたが、人類史に残した功績は計り知れないものがあります。その時兄は36才、弟は32才でした。

1908年には、ウィルバーがフランスで行われた飛行大会で滞空時間2時間20分という世界記録を樹立しますが、一方のオービルはアメリカのワシントンで飛行中に墜落し、同乗していたセルフリッジ陸軍中尉が死亡し、自身も7週間入院という大けがを負ってしまいます。二人はこの事故で心に大きな傷を負い、飛行機の歴史から姿を消してしまいます。兄は腸チフスで45才で亡くなり、弟は心臓発作で77才で亡くなりました。

二人の作ったフライヤー1号はキティホーク号と名付けられ、ワシントンのスミソニアン博物館に展示されており、私たちも見学してきました。

実は日本にもライト兄弟に劣らない飛行機の発明家がありました。二宮忠八という陸軍の軍人で1893年には人を乗せて飛べる飛行機の模型を作り上げていたのです。忠八は軍の上層部に飛行機の開発を申し出ましたが受け入れられませんでした。そうこうしているうちにライト兄弟に先を越されてしまい、忠八は飛行機の研究を諦めました。その後戦争で飛行機が殺人兵器となり、多くの犠牲者を出したことに心を痛め、後半生は京都に二宮飛行神社を建立し、自ら神主となって生涯を終えました。

11. 日本画界の風雲児 横山大観

大観は1868年（明治元年）に水戸に生まれました。明治元年といえば、明治維新の残り火で水戸にはまだ佐幕派が新政府軍と戦っている最中だったので、母は危険を避けて自宅の奥の竹林で大観を生みました。父は水戸藩の下級武士で、大観には一人の弟と三人の妹がいました。

大観は母の意に従って中学卒業後17才の時酒井家から横山家に婿入り^{むこ}します。それまでの酒井家は廃藩置県で一挙に禄を失い、各地を転々として酒屋などを営みますが、所詮^{しょせん}は武士の商法、いずれも失敗し、父は水戸に戻って県庁の下級役人になります。大観もそれに従って転校を繰り返しますが、成績は極めて優秀で、当時導入されたばかりの野球なども上手だったと言われます。

中学を卒業すれば大学に進学するための受験資格が得られますが、当時東京には現在の東大しかなかったので、大観はその工学科を出て建築家になろうと志し、受験に臨みますが、すべり止めのため、同じ東大にある英語研修科も受験しました。そのことは違反行為であるとして他の受験生10数人と共に呼び出され、その年の東大受験は断念せざるを得なくなります。彼はこれからの

世の中はどの道を進むにしても英語が必要だと東京にある私立の英語塾に入り、国会図書館にも通って猛烈に英語を勉強します。

その頃、内務省出身の若い岡倉天心の努力もあって、東京美術学校（現在の芸大）の開校が間近いという情報を聞きつけ、大観はにわか勉強ながらも鉛筆画と毛筆画の勉強を始めます。父はいやしくも武士の子が画家を目指すなんてことは許せないと猛反対し、一切資金援助はしないということになりますが、大観は21才の時それを押し切って美術学校を受験し、かろうじて5倍以上という難関を突破して65人の第1回生となります。お金の全くない大観は小学校教科書の挿絵や地図の原稿などを描いて学資とします。

そして2年間の普通科と3年間の専門科を予定通り終了し、25才で美術学校を卒業します。専門科では橋本雅邦を教授とする日本画を学び、卒業制作として「村童観猿翁」と題する大作を描き12人の日本画の卒業生の中の最高点を取ります。雅邦に卒業制作の出来次第で同校の助教授に推薦すいせんすると言われて苦勞して構想を練り制作したのですが、卒業試験においてあまりにも他の学科の成績が悪く、その話は実現出来ませんでした。大観ばかりでなく大観を可愛がっていた雅邦もがっかりしますが、大観は当面の収入の道を探さなければなりません。

それぞれ短期間ですが、出来たての美術学校予備校の教師をしたり、伊勢神宮の依頼で寺社などが所蔵している古美術品の模写をしたり、京都美術工芸学校の教師となったりします。そしてやっと28才の時、美術学校校長の岡倉天心に東京に呼び戻されて美術学校の助教授の職を得ます。

大観は在学中に天心の指導を直接受けることは少なかったけれど、助教授になって天心との接触が増え次第に天心の革新的思想の影響を受け、心酔するようになっていきます。そして天心が有望な若手画家に発表の場を提供しようと企画した美術協会の共進会に大観は「無我」と題する4～5才の童女の天真らんまん爛漫な立ち姿を描いて出品します。ダブダブの羽織を着て、両手は見えず、草

履を履いた足がかるうじて出ている奇抜な像は、一度見たら忘れられません。私がこの絵を初めて観たのは島根県の庭園で有名な足立美術館の大観展の時でした。

この絵は実質上大観の出世作で、日本画の伝統を打ち破り、新風を吹き込む傑作だと天心は評価しましたが、共進会では銅牌ばいに留まりました。その時の出品者には、下村観山、菱田春草、川合玉堂なども含まれていました。

時を同じうして美術学校内で天心校長を追放しようという企てが校長代理の福地復一を中心として起こり、それに多くの伝統を捨てきれない守旧派の職員の支持を得て大騒動となりました。確かに天心の行動は急進的で、人に対する好き嫌いが激しく、一度ちょうよう重用したかと思うと駄目だと分かると見向きもしないという面もあり、人に恨みを買うことも多かったようです。福地もその一人でした。天心は日本の美術界のためと手塩に掛けて育ててきた美術学校でしたが、信頼してきた部下たちの反乱に辞任を覚悟します。ところが、天心が辞めるのであれば自分も辞めるという職員が雅邦を中心に大観、春草、観山など36人も出て文部省、新聞なども巻き込んでの大騒動となります。

結果として大観30才の時、天心辞任と同時に雅邦以下守旧派の切り崩しに屈しなかった14人と共に大観は美術学校を辞任します。しかし、こんなことでくじ挫ける天心ではありません。大学に大学院があるように美術学校の上に美術院があってもしかるべきという普段からの主張を一挙に実現しようと同志26人を正会員として準備会を立ち上げましたが、それには資金が必要です。皆で手を尽くして資金集めに奔走ほんそうしますが、国内では川上大将という参謀次長から3百円の寄付があっただけでした。ところが米国の日本美術愛好家で以前も美術学校教授のフェノロサを支援していた大富豪から、思いもかけぬ2万円という当時のお金としては大金の寄付があり、早くも翌年には美術院開院にこぎ着けました。私立の施設としては異常とも言える早さです。そして記念行事として行った展覧会（現在の院展の原点）に大観は「窟原」と題する中国戦国時代

の悲劇の伝説的詩人を描いた大きな力作を出品し、美術院を代表する作家であること世に知らしめます。しかし外見の成功とは裏腹に、その内実の^{きゅうぼう}窮乏は相変わらずで、

教授、助教授たちは決まった給料を受け取る代わりに内密に一般受けするような絵を描いてはそれを売って美術院の運営費に当てるという状況でした。

美術院はもともと各派に分かれてその伝統技法を守ろうとする守旧派に変革を迫ろうと天心中心にスタートしたのですが、天心が主張した新しい画法は無線画法という対象物の明確な輪郭線を出来るだけ描かない方法で、色彩を自由に使える西洋画においては既に一部導入されている方法ですが、日本画においては未だ試みられていませんでした。その主張に最も賛同し、研究を重ねたのが大観と春草で、展覧会の度にその成果を問う作品を出品してきましたが、旧来の作風に^{なじ}馴染んできた批評家や美術愛好家には拒絶され、その種の絵は軽蔑の意を込めて^{もうろうたい}朦朧体と呼ばれました。

大観は29才の時文子夫人を迎えたうえに、両親は健在であり、弟妹3人を加えた大家族を養う身であったので、美術院の薄給に一家の生活は相当厳しいものだったようです。美術界の将来を考えるには天才的な能力があった天心も経営の才は全く駄目で、借金は増え続け、ついに酒でその^{いらだ}苛立ちを^{まぎ}紛らすようになります。そして一人現実から逃避するかのよう^{しょうこう}に三千年の東洋文化の曙光を放ったインドに旅立ってしまいます。天心は1年ほどで帰国し、大観、春草にインド行きを奨めます。大観は文子夫人を亡くし、悲嘆に暮れていましたので現地で稼げば良いと十分な旅費も持たずに35才の時、春草と連れ立ってインドに旅立ちます。そしてカルカッタで現地作の作品を20点ずつ出品し、売却して半年後に帰国します。

その頃は日露開戦の前夜で、美術界も混乱に巻き込まれ、天心もこれでは落ち着いて仕事も出来ないとアメリカからヨーロッパへと再渡航を企画していました。大観と春草は帰国して半年も経っていませんでしたが、良いチャンスと

随行することにします。

一行はまずニューヨークに着き、天心の計らいで大観と春草の二人展を開き、大胆にも日本での価格の倍の値段を付けましたが、高い値段の絵から売れていくという珍現象が起こり展覧会は大成功を収めます。それに味をしめてニューヨークやボストン、ロンドンで何回か二人展を開催し、可成りの高収入を得ますが、一行は一切無駄遣いをせず、一部を美術院の借金の返済に充てます。彼等はボストン美術館では西洋絵画の歴史を本物を見ながらじっくり研究しました。その後ヨーロッパ各国を巡^{めぐ}って1年半にわたる外遊を終えますが、旅行中に大観は一人娘を病気で亡くします。大観は悲嘆に暮れながらも外遊中の経験を基に主彩画法（いわゆる無線画法）の正当性を強く主張する大論文を春草と連名で発表します。

天心はボストン美術館の東洋部長の仕事を得、半年は米国で過ごすようになりますが、その心はあくまでも美術院の再興にあり、次々と職員が去って有名無実となった美術院を茨城県の最北で太平洋を陸地が取り囲む風光明媚な五浦^{ふうこうめいび}に移して、その地を新たな拠点とし、大観、春草、観山とその弟子木村武山の4人に五浦移住を熱心に奨めました。4人共直ちに承諾し、大観は両親と妹を東京に残し、二度目の直子夫人を連れての移住となりました。そのうち天心の指導を求めて東京からも多くの画学生が集まって来るようになり、新聞社や美術愛好家も集^{つど}うようになって、鄙^{ひな}びた漁村が急に芸術の都に様変わりしたようになりますが、これも一時的な現象で、まず春草が眼を悪くして治療のために東京に戻り、次いで大観が火災で家を失い2年足らずで東京に戻ってしまうと、五浦はやがて灯^ひが消えたように寂^{さび}れていきます。大観が後年に海洋や海浜を描いた作品に優れた作品が多いのは、五浦での経験が役立っていると見て良いでしょう。

大観43才の時、親友で5つ年下の春草を、翌年には絶対の師と仰ぐ9つ年上の天心を、更に次の年2回目の妻である直子夫人をいずれも病気で亡くすとい

う不幸のどん底にある時、3回目の妻として静子夫人を迎えます。そして天心の亡き後急激に寂れていった日本美術院を再興しようと、大観は観山と共に東京谷中に330坪の土地を求め、翌年には建物を完成させます。両氏共に名声は得ていたものの、大観は文無しで主として観山の信用による52人の賛助員からの借財をこれに充てました。そしてその返済には、その後加わった武山、紫紅、未醒の5人の作品を毎年各1点ずつ提供し、数年の内に完済しました。

大観は90才で亡くなりますが、それまでに大観は夥しい数の作品を残しています。中でも「生々流転」と題する幅55センチ、延長40メートルにも及ぶ前代未聞の超長作は大観の3作目の水墨画で、彩画を主とした大観にとって画風の大転換となるもので、展覧会の前から新聞などで話題となり、院展初日は観客で満員となりますが、その最中に関東大震災が発生し、観客は大混乱に陥り、多くの作品が落下して、展覧会は即座に中止となります。また自宅も大破・焼失しますが、それにも挫けず大観はイタリア、ドイツ、アメリカなどで積極的に展覧会を行い、また芸術の使節として飛び回ります。昭和20年の空襲では自宅を焼かれ戦後9年間熱海市にアトリエを移して制作に当たります。大観は生涯において3回自宅を焼失し、3回結婚するという波乱に満ちた人生でした。また酒との関係も無視できません。若い頃は一日2升、老後も1升は食事代わりに飲んでおり、最晩年、病気で危篤の時に、友人が最後に好きだった酒を飲ませて送ろうと1合の酒を吸い飲みで飲ませたところ、たちまち回復してしまったという逸話も残っています。

大観は富士山の絵を一番多く残していますが、一度も実際に登ったことはありませんでした。また生涯在野精神を貫き、昭和12年にわが国1回目の文化勲章は受章しましたが、美術学校教授や芸術院会員は断っています。大観は技術的にも思想的にもまさに明治・大正・昭和を生きた日本画壇の革命児と言えるでしょう。

(注) この紹介文は主として「横山大観」(齊藤隆三、中央公論美術出版)によっています。

12. 日本人の心の故郷を描いた かわいぎょくどう 川合玉堂

川合玉堂は私の大好きな日本画家の1人で、奥多摩の御嶽山の麓に玉堂美術館があり、御嶽登山を兼ねて訪れたことがあります。そこには玉堂が子供の頃に先生の絵を見て描いた花や鳥の絵や、晩年そこで暮らした頃山里の情景を写生した作品も展示されており、素晴らしい画家だとは感じていましたが、この度港区広尾にある山種美術館が川合玉堂生誕140年の特別展を開催しているのをNHKの日曜美術館で知り、各地の美術館に収蔵されている作品も一堂に集めて観覧できるというので家内と観て来ました。私は玉堂が同世代の横山大観にも劣らぬ日本が誇れる画家だという実感を得たので後世の子供たちにも伝えたいとこの本でその生涯を紹介することにしました。

玉堂は1873年（明治6年）に愛知県葉栗郡外割田村に川合勘七の長男芳三郎として生まれました。勘七48才でまさに待ちに待った一粒種でした。芳三郎は村の小学校の頃から絵が上手で教師を驚かしたといわれます。

芳三郎8才の時、父は文明開化の波に乗り遅れ家が破産し、やむなく家を売り払い親戚から借金をし、岐阜市に移転して書道用の筆や紙などを小さく商うようになります。そして芳三郎は岐阜の尋常高等小学校に転校します。彼は全学科とも優秀な方でしたが、分けても絵が上手で、彼の絵が度々教室に張り出されたりすると、もともと内気な彼は顔を真っ赤にしながらも次第に自分の道はこれだと思えるようになります。家の近くに豊国座という芝居小屋があって、団十郎とか菊五郎といった名優が来ると、父や母に連れて行ってもらって、芝居を見ながら俳優を写生するのを楽しみにしていました。

芳三郎14才の時、京都の有名な書家青木泉橋と知り合います。泉橋の有力な後援者が岐阜にいて、しばしば岐阜に来ていたこともあり、書の用具を扱う彼の家とも親しくなって芳三郎の作品を目にすることも多かったのでしょう。

泉橋の奥さんも画家だったので、二人して「この子は絵の道に進んだら、きっと大物になる、絵をやらせるのなら今京都で評判の望月玉泉に^{すいせん}推薦しよう」と芳三郎の両親に盛んに勧めてくれました。芳三郎は大喜びでしたが、父はなかなか承知してくれません。当時余程の資産家の子でもなければ画家で身を立てることが難しかったこと、一人っ子でもあったし、生まれつき身体があまり丈夫ではなかったことなどの心配があったからでしょう。泉橋が「一週間に一度家に帰らせてもらうという条件をつけたらどうでしょう。」ということで、やっと父のOKが出ました。

こうして14才で岐阜尋常高等小学校を出ると早速芳三郎は泉橋の紹介状を持って京都へ出て、望月玉泉の弟子になり「玉舟」という雅号を貰います。玉泉は門人100人を抱える四条派の重鎮で芳三郎は大好きな絵を思いっ切り学べるとあって門人の誰よりも熱心に絵の勉強に集中しました。当時画技の勉強といえば、先生の描いた絵を手本にした模写が中心でしたが、芳三郎は門人の中でもたちまち脚光を浴びる存在になりました。玉泉も彼の才能を認め、毎週里帰りをするという大変さ^{おもんぼか}を慮って手本を沢山持たせ、全部仕上がったら来るようにと便宜を図ってくれました。

時あたかも文明開化の時代、伝統的な日本画にも西洋画の写生の重要性^{とな}が唱えられ無視できなくなっていました。芳三郎もお手本を見て描くという従来の学習法には次第に満足できなくなっていましたので、猿回しから無理を言って小猿を一匹借りて来てその仕草を何枚も写生しました。勿論全て写生に頼るといふ訳にはいきませんから写生と手本の両方を材料に一つの画面を構成し、創造するのです。芳三郎は流派にとらわれず、超派的に各流、各派の長所を総合し、絵画が持つ潜在的な美の追究に力を入れるようになっていきました。

そうした時、いよいよ自分の力量を試す機会がやって来ました。玉舟17才の時、内国勸業博覧会が催されることになり、全国から作品が募集されることになったからです。芳三郎は色々と画題を考えた末、春の猿と秋の鹿の二点を

出品したいと玉泉先生に相談すると、先生もそれは面白いと賛成されたので、早速下図を作成し、先生に見てもらおうと、なかなか良く出来ていると二、三ヶ所加筆してくれました。芳三郎は喜んで家に帰り、本作に取り掛かりました。この二点を出品する時に、芳三郎は入門時先生から貰った「玉舟」という雅号がどうも心にそぐわないので、玉泉先生の許しを得て「玉堂」と改めさせてもらいました。以降本文でも玉堂と称することにします。

この博覧会に出品の苦心作「春溪群猿図」と「秋溪群鹿図」は二点とも入選したばかりか予想もしなかった褒状ほうじょうにまでなり、17才の若き玉堂は故郷岐阜ばかりでなく、京都や東京の各新聞がその栄誉を大々的に報道しました。

玉堂は勇氣百倍となり同じ年にあった日本美術協会展にも「菊花狗子図」を出品し、これも宮内省の御用品としてお買い上げになりました。こうして玉堂の画壇へのデビューは見事に果たせました。

玉堂の父は趣味として絵をやる程度なら良からう位に思っていたのですが、こうも次々と好評を博し、賞を取ると画家になることを許さざるを得なくなってしまいました。玉堂はその年に玉泉の許可を得て、京都で玉泉よりも進歩的で技量も上と見られている幸野樗嶺にも師事することにしたいと申し出ます。玉泉は余程度量のある人と見え、玉堂の申し出に快く「それが良い、自分にはもうお前に教えるものは何もない。」と言って喜んでくれました。

樗嶺先生は画風も革新的でしたが、教え方もユニークで、100人程の塾生を木造の汚い2階に合宿させ各人の自由を大幅に認め、絵も食事も服装も自由に質問には何でも答えてくれました。玉堂が日本画の将来について尋ねると、「今は美人画や風俗画がもてはやされているが、将来は風景画や花鳥画が盛んになるだろう。写生はまず研究してみることが重要だ。」と答えてくれました。胃腸が弱かった玉堂は他の塾生のように店屋物を取るようなことはせず、日々せっせい写生には注意していたし、几帳面きちょうめんな性格から常に羽織袴はおりはかま（これは生涯続いた）で通しました。そして羽織袴が玉堂の渾名あだなになりました。

玉堂18才の時、大成義会研究大会に「本間資氏射鶚図」と題する絵を出品して一等賞になりました。楳嶺先生は大いに喜んで、半折りの大きさの紙に法螺貝ほらがいを描いて玉堂に与え、天下に名声を大きく鳴らせと激励しました。これを岐阜にいる両親に伝えると、二人とも我を忘れて喜んでくれましたが、これが父を喜ばせる最後になってしまいました。というのは、その年死傷者2万5千人という美濃尾張の大地震があり、父はその犠牲になってしまったからです。父母は地震の時はあの広場へ逃げると決めていて、父は先にそこまで避難したのですが、丁度そこに改築中の警察署があり、それが崩れ落ちて下敷きになってしまい亡くなりました。母は腰を抜かしてしまって家に残っていたので無事でした。

残された母子の悲嘆は筆舌に尽くせぬものがありました。いつまでも岐阜にいても仕方がないので玉堂は母を連れて京都に戻り、楳嶺先生の世話で一時小円寺という小さな寺の離れを借りて住むことにしました。そこから玉堂は楳嶺塾に通い、生活費を稼ぐために家では母は縫い物、自分は岐阜ちょうちん提灯などの内職をしました。しかし日当たりが悪く冬は寒くて仕方がありません。母はそれと疲労が重なりインフルエンザから急性肺炎を併発し、ついに亡くなってしまいます。玉堂は20才でした。その年玉堂は、天涯孤独となったため双方の親同士が彼女がお腹の中にいる時から決めていたという許嫁いいなずけの富子と結婚し、京都へ帰り烏丸通りに間借りをして住みます。そして2年後親身になって世話をしてくれた楳嶺先生が亡くなってしまいます。玉堂には既に長男が生まれていたもので、悲しんでばかりはいられず、売れるものは何でも描いて家計の足しにしなければなりません。

玉堂22才、日清戦争に勝って日本が湧き上がっている明治28年に第4回内国勸業博覧会が京都で開かれ、日本画壇の全国規模の大展覧会となりました。玉堂も「長良川鵜飼」を出品し、3等に入ったのですが、その喜びよりも、橋本雅邦の「龍虎図」、「釈迦、十六羅漢」の2点によるしょうげき衝撃の方がずっと大き

かったのです。特に「龍虎図」の無類の構想、雄大かつ強靱な描線、強く迫力のある墨色と彩色の融合、天の龍、地の虎、雲を起し暴風地を鳴らし、火を放って相撃つ気迫に玉堂は打ちのめされ、その靈氣に引きつけられて玉堂は三度も見に行きました。

そして、絵画に対する疑問や心の迷いが一度に吹き去って、深く^{かくせい}覚醒するところがあったのでしょう。^{ぜいたく}贅沢をしなければ家族3人何とか食べていける京都画壇を捨てて家族で東京に出て橋本雅邦の弟子になるということは、余程大きなショックを受けたことを物語っています。玉堂23才のことですが、これが玉堂の人生の大転換であったことには間違いありません。

以降玉堂は風景、人物、花鳥、動物、さらには俳画といった広い分野で優れた作品を残して84才で亡くなりました。私は個人的には、霞が掛かった山村の風景に小さく牛馬や農民が描き込まれた絵が特に好きですが、彼の絵には画面に彼の人間愛、感情の細やかさが融け込んでいるように思われます。

玉堂は画壇の動きに反旗^{ひるがえ}を翻して、自ら運動を起こすような激情家でもなければ、英雄色を好むというタイプでもありませんでした。目の前の作品の制作に情熱を傾ける地味な芸術家だったのだと思います。

(注) この紹介文は集英社の現代日本の美術「下村観山／川合玉堂」(永井信一、難波専太郎)によっています。

13. 好奇心の塊だった アインシュタイン

アルバート・アインシュタインは、1879年に南ドイツの小さな町でユダヤ人の温和な実業家の家に生まれました。父はヘルマン、母はパウリーネといい、2年後に妹のマヤが生まれました。

アルバート2才の時、父は弟のヤコブに熱心に誘われて共同で電気工場をやるために、もっと大きな町ミュンヘンに引っ越します。秀才、天才といわれる

人は、普通小さい頃から神童と周囲から騒がれますが、アルバートはしゃべり出すのも遅かったし、小学校の成績も普通でした。ドイツでは10才からは日本の中学校と高校を一緒にしたようなジムナジュームに進みますが、暗記の苦手だったアルバートにとってジムナジュームは決して居心地の良い所ではありませんでした。ただ不思議に思うことについてじっくり一人で考えることは好きで、数学、物理、哲学は学校の課程と関係なく独学で学んでいました。

アルバート一家はユダヤ人でしたが、熱心なユダヤ教の信者ではありませんでしたので、小学校もジムナジュームも普通のキリスト教の学校に通いました。ただし、貧しい学生を家に招いて御馳走するというユダヤ人の習慣は残っていて、毎週彼の家を訪れるミュンヘン大学へ通うユダヤ人の青年を通じて一般科学の知識を身につけ、微積分などの初歩的高等数学を学び、有名な哲学者カントの本も読みました。

アルバートが15才の時に父と叔父は事業に失敗し、再興を期してアルバート1人を残してイタリアのミラノに移住してしまいます。アルバートもついて行きたかったのですが、ジムナジュームがあと3年残っていたので両親はそこを卒業させたかったのです。しかしアルバートは歴史や語学など暗記物中心の授業が面白くなく、医者に頼んで「暫く両親の元で静養する必要がある」という嘘の診断書を書いて貰い、ジムナジュームを中途退学して両親の後を追いました。

ミラノに行ってみると、そこでも父たちの仕事はうまく行っていませんでした。アルバートは早く自分も稼げるようになって家計を助けるようになりたいと、特別の計らいでスイスのチューリッヒ工科大学を受験させて貰いますが案の定不合格になってしまいます。しかしそれは彼にとって絶望的な結果ではありませんでした。彼は受験年令の18才に達していない16才でしたし、数学や物理では合格点を越していたからです。彼はチューリッヒ近郊のアーラウ州立高校の3年に編入します。

アーラウ高校にはミュンヘンのジムナジュームとは全く異なる生き生きとした自由の精神がみなぎっていました。彼は幸いにも教師の1人であるヴィンテラー先生の家の下宿することができ、家族の一員として扱われ1年間実り多い楽しい高校生活を送ることができました。ヴィンテラー先生の息子の一人がアルバートの妹のマヤと結婚し、先生の娘の一人が後にアルバートの研究のパートナーとなるベッソーと結婚したこともあって、アーラウは彼にとって生涯忘れられない土地になりました。

アーラウ高校では、卒業試験に合格すればチューリッヒ工科大学に入れる制度があったので、彼は1年早い17才でチューリッヒ工科大学の教師を養成する学科に入学しました。アルバートの家には経済的な余裕がなかったので、学費は親戚の人たちから送って貰いました。アルバートは最初の頃こそ真面目に授業に出ていましたが、すぐにさぼりだし自分の好奇心の赴くままに自由な思索に耽るようになります。そんな時彼はグロスマンという良き友人に巡り会います。グロスマンは毎回きちんと講義に出席し克明にノートを取り整理をしていました。グロスマンもアルバートの非凡な能力は認めていたので、二人は毎週のように喫茶店で会っては色々な話をするようになりました。ここからアルバートをアインシュタインと呼ぶことにします。

アインシュタインが大学生になる以前は、物理学といえばニュートンの運動法則と万有引力を中心にしていましたが、19世紀の終わり頃からそれにマックスウェルの電磁気学が加わるようになりました。アインシュタインが興味を持ったのは電磁気学の方ですが、残念ながら大学の物理学の講義の中には未だ取り入れてなかったもので、彼は独学で勉強しました。現代の私たちは電気や電波を日常生活の中で当たり前のように使用していますが、その理論は私のような素人には残念ながら分かりません。

アインシュタインは21才で大学を卒業しますが、級友たちは皆就職が決まっていくのに彼だけは決まりません。あまりにも大学の授業を無視していた

ので、教授たちの推薦が得られなかったからとされています。親戚からの送金もなくなり、その日の生活にも困りだした彼は、家庭教師などをして何とかやりくりしながら「毛管現象」という優れた論文を書き、初めて学会誌に掲載されます。それに続いて第2、第3の論文も掲載されると、彼は他の大学の有名な物理学の教授にも、^{なりふ}形振り構わず就職依頼の手紙を書きますが、それでも就職口は見つからず、父の死も重なって失意のどん底にある時、^{なりふ}またも救助の手を差し伸べてくれたのは友人のグロスマンでした。

グロスマンは大学に残って学者の道を歩んでいたもので、彼自身はたいした力はありませんでしたが、彼は父に頼んでアインシュタインをスイスの首都ベルンにある特許局長官に紹介して貰いました。長官はアインシュタインに面接し、実務能力にはやや問題はあるものの、電磁気学に通じていることを買って、^{かか}空気がなかったにも拘わらずアインシュタインを臨時職員に採用してくれました。彼は2年間も就職浪人を経験したことになります。

アインシュタインは24才の時、学友だったミレーヴァ・マリッチと結婚し、翌年長男のハンス（後にカリフォルニア大学の河川工学教授）が生まれます。アインシュタインは2年後に特許局に正採用となり、30才まで勤めますが、特許局での7年間は彼の生涯で最も創造的な時期だったと後に回想しています。決して特許局の仕事を疎かにしたわけではありませんが、^{おろそ}いわゆる内職と称する自分の研究を勤務時間中にもこっそりやっていた。そして人の足音が聞こえると、そのメモ用紙を机の引き出しの中に隠すのでした。アインシュタインは、高校時代からの友人であるイタリア人の工学技術者ベッソーを同じ特許局に誘い、往復の道中や休日を使って内職で温めているテーマの議論に参加して貰いました。そのようにして生まれたのが特殊相対性理論であり、また一般相対性理論の^{たんしょ}端緒となる等価原理です。その他にも物理学の根幹を揺るがすような論文を次々に専門誌に発表し続けたため、次第に世界的にも有名になっていき、各地の大学から^{しょうへい}招聘の声が掛かるようになりました。

アインシュタインはチューリッヒ大学の準教授を皮切りに、プラハ大学を経て1911年には母校のチューリッヒ工科大学の教授に迎えられます。そこには学生時代から友人だったグロスマンが数学の教授になっており、彼の協力を得てアインシュタインは一般相対性理論の研究に熱中しました。彼は著名な物理学者ブランクなどの強い働きかけもあって、1914年当時世界の物理学の中心であったベルリン大学に移り研究を続けます。そして1915年の終わり頃やっと一般相対性理論が完成します。

一方世界の動きに目を移すと、1914年には第1次世界大戦が始まり、1918年まで続きドイツの敗北で終結しましたが、ドイツの敵国であったイギリスの有名な物理学者アーサー・エディントンは理論的には完成している一般相対性理論に非常な関心を持ち、それを何とか実証してみようと思いました。そしてイギリス政府の支援も得て戦争が終わった1919年の皆既日食の時、太陽の縁をすれすれに通る星の光の写真によって、太陽の近くの光のわん曲を証明しました。

このニュースは世界中に伝わり、敵国ドイツの首都ベルリンで開発された一般相対性理論が敵対国のイギリスの観測隊によって実証されたというので大騒ぎになりました。ヨーロッパの国々が戦争に疲れ、人類の希望がかすんでいた時に、敵対していた二つの国の学者による「光が太陽のために曲がる」という事実の証明は、まさにニュートン以来の物理学の大原則を覆し、一新するものとして戦争を越えた熱狂を巻き起こしたのです。

アインシュタインは一躍世界的な英雄、スターに祭り上げられますが、彼は戸惑いを感じながらも生まれつきの単純さとユーモアを失わず、尊大なそぶりなどは少しも見せませんでした。一方でドイツでは国家主義者が敗戦の原因を平和主義者とユダヤ人に押し付け、組織的に平和主義者やユダヤ人を攻撃し始めました。特にアインシュタインはユダヤ人であると同時にドイツの軍国主義に対し痛烈な批判を浴びせてきましたので、一部のドイツ国民からは憎悪の対

象とされました。ヒットラーが政権を握る以前からドイツ国内にはこのような動きがあったのです。

ここでアインシュタインの結婚生活について触れておきます。彼は2回結婚しています。1回目のミレーヴァとは2人の息子をもうけますが、彼が40才の時離婚します。二人の間にはしっくりいかないものがあったようです。離婚後すぐアインシュタインは肝臓病、胃潰瘍、^{おうだん}黄疸、全身衰弱などを病み、従姉のエルザの世話を受けている間に恋が芽生え、二人は結婚します。彼女も2度目の結婚で、二人の連れ子と一緒に生活するようになります。エルザとの結婚はうまく行っていましたが、彼女は彼の死の20年前に亡くなってしまい、76才で亡くなるまでの彼の老後は淋しいものでした。

アインシュタインはユダヤ人排撃の流れの中でも、1916年にブランクの後を継いでドイツの物理学会の会長となり、1921年にノーベル賞を受賞します。しかしそれは彼自身が誇る「一般相対性理論」に対してでなく、「理論物理学に関する功績ことに光電効果に合致する法則の発見について」というものでした。科学的にも政治的にも論争となっている相対性理論を取り上げるよりも無難な道を選出委員が採った結果でしょう。

1922年に彼は日本の出版社の招待で来日し、6週間も滞在し各地で講演や観光をしています。彼は晩年になってそのことを思い起こし「私は日本の国民と国土があまりにも好きになってしまい、別れねばならなくなった時は涙をこらえられなかった」と語っていました。

1933年にはヒトラーがドイツの政権を取るに至り、ナチスはユダヤ人の自由を抑制するだけでなくユダヤ人を捕らえ始めました。アインシュタインはいよいよドイツには住めないとベルギーの国王の^{ひご}庇護の元ベルギーとイギリスで暫く過ごした後1933年にアメリカに移住します。アメリカではアインシュタインに財政的支援をする人があって、プリンストン大学に彼のための高級研究所を設立してくれました。彼は晩年の20年を小さな大学の街で静かに過ごしま

した。

最後にアインシュタインと原子爆弾との関係に触れない訳にはいきません。彼は直接原子爆弾の開発に携わったことはありませんが、ナチスが原子爆弾の開発を始めていることを知り、その使用を抑止するためには、アメリカが先行して原子爆弾を完成させる以外にないと思い、時の大統領ルーズベルト宛に原子爆弾の開発を急ぐべきという手紙を1939年に送っています。その手紙が遠因となってアメリカが世界で最初の原爆保有国となり、ルーズベルトの後を継いだトルーマン大統領によって彼の大好きな日本に投下されてしまいます。彼は「何て恐ろしいことを」と言って絶句してしまいます。以降彼は死ぬまで科学者たちの核廃絶運動の中心であり続けました。彼は本質的には生涯平和主義者だったのです。

(注) この紹介文は主として岩波ジュニア新書「アインシュタイン16才の夢」(戸田盛和)によっています。

14. 現代アートの巨匠 ピカソ

ピカソの生涯

私はギャラリーも経営(主として家内が担当)していて、扱っている作品は現代アートが多かったので、美術界の革命児ピカソを無視することはできません。ピカソの作品はギャラリー・オーナーの素養として我が国だけでなく、フランス、スペイン、アメリカ等の美術館で機会があるごとに観て回った積もりです。ピカソの生涯の概要について書こうと図書館に行くと、沢山の本が出版されていて、参考書を選ぶのも大変な程で、アート・ファンのピカソへの関心の高さがうかがえます。それではかく言う私がピカソの作品が大好きかということ、正直言ってあまり好きではありません。あまりにも有名なので公平を期す

ために取り上げざるを得ないと言うのが本当のところでは。

ピカソは絵の先生をしていた父のもとに、スペイン南の海岸にあるマラガという町に1881年に生まれました。マラガは闘牛が盛んな町で、ピカソはよく父に連れられて闘牛を見に行き、8才の時には既に闘牛の絵をスケッチしています。以降ピカソは闘牛見物が生涯の趣味となり、よく闘牛の絵を描いています。

10才になったピカソは、父から正式に絵を習い始め、たちまち基本技術を身につけてしましますが、学校の勉強はどの科目もからきしダメで、行くのも嫌がり両親を困らせました。ピカソが13才の時、父は自分が描いている絵の仕上げをピカソに手伝わせ、ピカソの上達振りに驚きました。そして自分の持っていた絵の道具を全てピカソに与え、「私は今日限り、自分で絵を描くことをやめ、学校での指導に専念する」と言いました。

ピカソ一家はピカソが14才の時父の転勤でバルセロナに引っ越し、父の勤める美術学校に入学します。普通の生徒なら1ヶ月掛かるという入学試験用の絵をピカソは僅か1日で仕上げ、先生方を驚かせたと言われています。ピカソがその頃描いた「母の肖像」が残っていますが、それはデフォルメのない写実画で、ピカソには普通の絵は描けないのではないかという疑問を吹き飛ばす素晴らしい絵です。

ピカソはさらに本格的に絵の勉強をしたいと思い、単身マドリッドの美術学校に転校します。しかしプラド美術館で先人たちの絵に接し、「自分の本当の先生は美術館の中にいる」という確信を持ったピカソは、学校には行かず、美術館に入り浸る毎日を送っていました。それを知った父は怒り、仕送りを止めてしまいます。生活ができなくなったピカソは仕方なくバルセロナの家族の元に戻ります。

バルセロナでピカソは、「4匹の猫」というカフェに同世代の芸術家たちが集まって芸術論を語り合っているということを知り、仲間入りをさせてもらい、

カサジェマスという画家と親友になります。

そしてピカソ19才の時、親の承認を得てカサジェマスと一緒に芸術の都パリに出ます。そこでまた美術館や画廊巡りが始まります。その時ピカソに一番大きな印象を与えたのはセザンヌでした。翌年20才のピカソは、パリの人々の日々の生活を絵に描いて個展を開き成功します。ところがそんな折り、ピカソと一緒にパリに来たカサジェマスが自殺したという非常に悲しい知らせが入ります。これはピカソにとって大変なショックだったと見え、それから3年もの間彼の描く絵は画面全体が青く沈んだ色調で覆われ、モチーフも希望の光が全く見られないものばかりでした。後の人々はピカソのこの時代の絵を「青の時代」と呼んでいます。

23才になったピカソは美しいオリヴィエと恋に陥り、結婚はしませんでした。同棲するようになり、彼女をモデルに何枚も絵を描きながら、次第に精神的に立ち直っていきました。彼等は自ら洗濯船と呼ぶ安アパートに住みましたが、そこで詩人のアポリネール、画家のアンリ・ルソーやマリー・ローランサンなどと知り合いになり、芸術論を語り合いました。そして彼等に支えられてピカソの絵は徐々に明るくなっていき、後に「バラ色の時代」と呼ばれるようになります。大好きなサーカスにもよく出掛け、特にアルルカン（ピエロ）の絵をよく描きました。

26才の時ピカソの傑作の一つといわれる大作「アヴィニヨンの娘たち」が完成します。この絵はセザンヌとアフリカの黒人彫刻のイメージを重ね合わせて制作したのですが、洗濯船の友人たちは絶賛してくれたものの、一部の批評家の「この醜い顔はなんだ」という酷評もあり、世に出すには時期尚早とアトリエに9年間も裏返しに保管されていたといえます。

27才の頃からピカソは友人のブラックと全く新しい画法の研究に夢中になりました。その絵を見てピカソの生涯の友人であると同時にライバルでもあったマチスが「まるでキューブのような絵だ」と言ったことから、そのような画

法を「キュービズム」というようになりました。それは対象とする物体を一旦バラバラに分解して画面の上で三角や四角の立体として再構成したように見える絵にすることです。幾何学的に厳密に考えた訳ではありません。「何が描いてあるのかさっぱり分からない」という世評に対しては、ピカソ自身に答えてもらいましょう。

「人は何故絵画を理解したがるのだろうか。誰も小鳥の歌や草木の花を理解しようとせずにそのまま愛せるのに…」私もこの言葉に賛成です。批評家が難しい言葉で長たらしい論評を加えているから一般のアート・ファンが離れていってしまうのです。私は単純にこの作品が好き、嫌いで済ませてしまい、それ以上立ち入りません。

この頃ピカソの女性関係に大きな変化がありました。6年もモデルをしてくれていたオリヴィエが去り、その後迎えたエヴァをピカソは深く愛しましたが、僅か4年で亡くなってしまいます。悲嘆に暮れるピカソを見かねた友人の一人が、彼にバレエの舞台や衣装の仕事を頼みました。そしてロシア・バレエ団のローマ公演を迎えるのですが、バレリーナの1人オルガにピカソは一目惚れしてしまい、直ぐに結婚を申し込みます。二人は目出度く結婚し（ピカソ37才）、パリに新居を構え子供までもうけます。

やがて世間にもある程度認められ、絵もようやく高く売れるようになったピカソですが、さらに新しい描き方をどんどん開発して自分自身の芸術の世界を築いていきます。まるでページをめくるようにピカソの絵は変わっていきます。

ピカソが生きた時代は、決して平和な時代ではありませんでした。第一次世界大戦、第二次世界大戦、その間にスペインの内戦がありましたが、外国にいたピカソは直接戦争に参加することはありませんでした。スペイン内戦の様子はヘミングウェイの「誰がために鐘は鳴る」という小説と同名の映画（ゲーリー・クーパーとイングリッド・バーグマン主演）で私も知っています。ピカソの戦争に対する怒りの感情は、縦4m、横8mという巨大なキャンバスにほ

ば白黒の油彩で描かれた大作に表現されており、マドリッドのソフィア王妃芸術センターに展示されていますが、私たちが行った時は、他国の美術館に貸し出されていて観ることができませんでした。

ピカソは91才で亡くなりますが、それまでに多くの女性を愛し、彼女たちに支えられて創造力をかき立てられてきたと言っても良いでしょう。同時に複数の女性を愛してしまったために正妻に逃げられてしまったこともあります。79才で孫のようなジャクリーヌ・ロックと最後の結婚をしています。正式の結婚は2回だけですが、愛人を含めれば10人以上の女性と関係を持ち、4人の子供をもうけています。

ピカソはまた多能（マルチタレント）、多作の芸術家としても有名です。絵画、版画、彫刻、陶芸、舞台構成などそこまでやるのかと思うほど作品の範囲を広げました。その制作のスピードも人並み外れて早く91才の生涯の間に8万点ともいわれる作品を残しています。中には数週間掛かるような大作も含まれているでしょうが、制作期間75年、1日10時間として単純に計算して、3時間半で1点制作していたということになります。

（注）この紹介文は主として岩波書店「ピカソ」（V・アントワヌ）、博雅堂出版おはなし名画シリーズ「ピカソ」によっています。

ピカソは商売上手だった？

私たちは、「芸術家はお金や名声と無縁である」ことを無意識のうちに期待していないでしょうか。とりわけ日本ではゴッホやモジリヤニなどが、経済的苦境にあえぎ、批評家の拒絶にあいながらも、芸術家の信念を貫き、志し半ばにして世を去った生き方に、芸術家の理想像を求めている人が多いようです。私もそう思っていた一人ですが、近頃はアート・ファンのそのような固定観念が、芸術家の自由闊達な創作活動を束縛しているのではないかと感じるように

なってきました。

ピカソが自分の名利のために、企業家よろしく戦略・戦術をいかに駆使したかを、豊富な資料をもとに紹介している「ギャラリー・ゲーム」という本を最近読みました。ピカソは「画商は敵だ」と言ったかとおもうと、画商と組んで美術館やコレクターに売り込んだり、パリの社交界の女性のポートレイトを描いてあげて、取り入ったりしています。また画商やコレクターの訪問を見越し、愛人のジローと商談が有利に展開するように、応対の予行演習をしていたともいわれます。

しかしそうだからといって、ピカソの作品の価値がそのために落ちるということではないでしょう。ゴッホにしても、自分の絵が売れることを望みながらも、その当時は売れなかったのです。もしゴッホが長生きをしたら、大金持ちになっていただろうとその本の著者は言っています。芸術家も私たちと同じ人間なんだという見方をすることが必要なのではないのでしょうか。

自己実現のために創作することが芸術家の使命としても、仙人ではないのですから生きていくには売るための絵を描くことも必要で、けっして恥ずかしいことではありません。その時には、批評家や芸術家仲間の眼よりも、思いきって潜在顧客の満足を重視して制作してもらえたら、自らのアート・ファンを増やすことになるのではないのでしょうか。

15. 女性の社会進出をファッション界から支援した ココ・シャネル

私は女性のファッションについて、論評できる程、知識も興味も持ち合わせていませんが、先日テレビでココ・シャネルの生きざまを紹介する映画を観てかなり感動したので、熱が冷めないうちにミニ・エッセイにまとめてみました。

彼女がファッション・デザイナーとして活躍を始める20世紀の初頭までは、

上流社会の女性のおしゃれといえ、舞踏会の映像でよく見るように上半身はコルセットできつく絞り上げ、下半身はペティコートで傘のように丸くふくらませ、帽子と共に飾り立てた姿から想像できるように不活発なものでした。悪く言えば、単に男性の観賞用に過ぎませんでした。

それをココ・シャネルは、男性の乗馬服に似たデザインまで女性用のおしゃれに取り入れ、女性用の服装をいかにも機能性に富んで活動性に優れたものへと、女性ファッションの主流を切り替えていったのです。

ココ・シャネル自身に最初からその気があったかどうかは分かりませんが、女性の社会進出という大きな歴史的動きを、結果としてファッション界から支えることになりました。私は少なくともその面からココ・シャネルを評価します。

ココ・シャネルはフランスのソーミュールという小さな村で1883年に生まれました。父はハンサムな行商人でしょっちゅう家を留守にしていました。ココ・シャネルは姉・妹・弟2人の5人兄弟でしたが、やさしくおとなしい母は、貧しさと子育てに疲れ果て、ココ・シャネルが12才の時に亡くなってしまいます。すると父は一週間もしないうちに5人の子供たちを修道院が経営する孤児院に入れ、別の女性と姿を消してしまいます。幼いココ・シャネルにとって最愛の父に見捨てられたことは、一生癒えない傷となりました。

彼女は「うそつきシャネル」というあだ名がつくほど、謎につつまれた生涯を送りました。彼女は自伝を書いています、そこでは孤児院育ちだということとはひた隠し、思いつきで美化した話をしていきますし、マリリン・モンローが「シャネル5番を着て寝る」と言ったという有名な「香水」も、シャネルは実際には一種類しか造っていません。彼女の本当の生きざまが次第に明らかになっていったのは、1971年に87才で亡くなってからのことで、いろいろな人が彼女の伝記を書いています。ここでは彼女のデザインした洋服と男性遍歴^{へんれき}についてのみ、その一端をご紹介します。

彼女は若い頃歌手になることが夢で、騎兵隊のある町の小さな劇場の歌手になり、兵隊たちのアイドルになりましたが、何のつてもない彼女は本格的歌手になる夢は果たせませんでした。その代わりに兵隊の中で一番金持ちのバルサンの愛人になり、彼は彼女を乗馬に、競馬に、避暑にと連れ歩き同棲もしましたが、決して結婚してくれとは言いませんでした。2人はあまりにも身分が違いすぎました。

彼女は他人に「愛人」だと思われるのがいやで、つとめて地味で、シンプルで上品な服装を心掛けました。自分で考案したシャレた帽子、男性用の仕立屋で作った白いブラウスにネイビーブルーのスーツなどは、上流社会の夫人たちにも評判となり、次々とシャネルのもとに相談に来るようになりました。彼女は「女性は飾ろうとすればする程老けて見えるものなのよ」と答えました。そして彼女はこれを機会にお店を開こうとしますが、バルサンは大反対でした。

「女が働くなんてとんでもない。家の恥だ。僕はびた一文も出資しないよ。」

彼女ががっかりして打ちひしがれている時に、思いがけない人物が出資の申し出をしてきました。バルサンの親友アーサー・ボーイ・カペルです。彼はイギリスの上流階級の一員でフランスの騎兵隊に勉強に来ていたのですが、私生児として孤独な子供時代を送った経験があり、そこがココ・シャネルと引き合ったのでしょう。二人はたちまち恋に陥り、同棲を始めます。

ココ・シャネルは28才の時、ボーイの出資を受け、パリの中心地にまず帽子の専門店を出店しました。すると女優をはじめ、上流社会の婦人やモード誌の記者が次々と押しかけ大成功をおさめます。その時、今でも帽子モードの定番とされる「カノティエ帽」が生まれました。

そして早くも2年後には、南フランスの避暑地ドービルにトリコット地のスポーティなドレスの専門店を、やはりボーイの出資を受けて出店しました。ココ・シャネルは「服は着る人のためにある」ということが信条で、あくまでもオートクチュール（お客様の注文をよく聞いてから製作する方式）にこだわり

ました。彼女はお客様に直接布地を巻き付け、自分でだいたいの所をカットしてからお針子に回し、最後にまたお客様に試着してもらい、自分で微調整してから引き渡しました。

このことがモード誌でしばしば取り上げられると、それまでフランスのファッション界を牛耳ってきたポール・ポワレは「なんだ、この貧弱なファッションは！ドレスとはなによりも豪華でなくてはならんのに！」と怒り狂ったといひます。それから半世紀にわたってココ・シャネルとポール・ポワレの競争は続きますが、ポール・ポワレの破産で幕を閉じます。

勝利をおさめたココ・シャネルはパリ・ファッション界の女王となりました。それにともない、女性としてだけでなく人間としても自立・自律していき、ボーイに出資金を返済してしまいます。男としての^{めんつ}面子をつぶされたボーイとの間の溝が深まり、ボーイはイギリスに帰って貴族の娘と結婚してしまいます。ココ・シャネルとは7年間の短い蜜月時代でした。しかしボーイの結婚はうまくいかず、新婚早々休暇を取ってココ・シャネルに逢いに来る途中、交通事故で急死してしまいます。ココ・シャネルはその現場に駆けつけ、泣き崩れました。

彼女はその悲しみから逃れるようにロシア公太子、イギリスのウェストミンスター公など次々に相手を変えて愛人になり、87才で亡くなりました。その間ハリウッドに招かれ、一本の映画の衣装を一手に任されたり、56歳で店を閉じ15年後71才で見事にパリのファッション界にカンバックするなど話題に事欠かない波乱の女の一生でした。

16. 米大リーグを軌道に乗せた ベーブ・ルース

ベーブ・ルースは1895年に夫婦で経営する薄汚れた小さなレストランの長男としてアメリカのボルチモアという港町で生まれました。ベーブ・ルースの

本名はジョージ・ルースといますが、プロ野球の選手となった時、赤ん坊のような顔をしていたので、選手仲間がベーブ（赤ん坊のこと）・ルースというあだ名を付けたのが始まりで、以降皆がベーブ・ルースと呼ぶようになったのです。

ジョージは学校嫌いのうえに身体が大きく暴れん坊で、レストランの子だというのに母親が病弱で貧乏だったので、いつもお腹を空かしていました。7才の時近所の悪餓鬼2人を引き連れ、とれたばかりの生牡蠣を1箱失敬し皆で食べてしまいました。夜になって家に帰ると、客で来ていた牡蠣を盗まれたひげ面の漁師が、ジョージを見て「牡蠣を盗んだのはお前だな！」と行ってジョージに殴りかかってきました。それを見た水夫が「子供を相手にするのはよせ！」と行って止めると、その漁師は水夫とけんかとなり、そのうち店中の客が参加して大乱闘となり、ジョージのお父さんが必死に仲裁しますが、たちまち店中の食器や椅子、テーブルもめちゃくちゃに壊されてしまいました。

その時2人のお巡りさんが入って来たので、ジョージは2階のお母さんが寝ている部屋に逃げ込みました。お母さんは下のレストランの騒ぎにとっても心配そうな顔をして、「これからどうやって食べていったら良いのよ。」とジョージに言いました。後について来たお巡りさんは、「お宅の息子さんについて警察に悪い知らせが入って来ています。今のうちに良く馴けないと手のつけられない子供になりますよ。」と言って帰りました。ジョージは腹を立て、お巡りさんを怒鳴りつけたい衝動に駆られました。が、両親にこれ以上迷惑をかけたくないとい我慢しました。

両親はジョージの今後のことで相談しました。そしてジョージが悪い子になってしまったのは、自分たちが仕事や療養のために十分にジョージの面倒を見てやる事が出来なかったためだという結論になり、当時ボルチモアにあった修道僧たちが先生をしている全寮制のセントメリー学校に、転校させることにしました。学校嫌いだったジョージは一晩目の夜中にベッドをこっそり抜け

出し、窓を壊して学校から逃げ出そうとしましたが、黒い修道服を着た身体の大きなマシアス先生につかまってしまいました。先生はにっこり笑いながら「私が言うことを忘れないようにするんだよ。いいかい、どんな子供でもどこか良い所があるものなんだ。どの生徒が何を一番上手にやれるか、それを見つけ出して伸ばしてやるために私たちはこうやって学校を開いているんだ。君は身体も大きいし、野球をやったら上手になるかも知れないよ。」とやさしく言ってくれました。ジョージは野球をやったことがありませんでしたが、マシアス先生が野球を教えていると知って興味を持ち、先生と自分のベッドに戻りました。

翌日、生徒たちは運動場でマシアス先生のノックを受け、外野フライやゴロの練習をしました。ジョージはますます野球が面白くなりました。数週間後生徒たちは赤白に分かれて野球の試合があり、ランナー一塁の時ジョージの打順が回って来ました。ジョージはホームランを打とうと勢い込んでバッターボックスに向かったのですが、マシアス先生にランナーを二塁に送るためにバントをするように耳元でささやかれます。ジョージは動揺して失敗し、キャッチャーフライに打ち取られてしまいました。マシアス先生は「野球はチームでやるゲームだ。バントをする時はそのことに集中し、絶対にボールから目を離してはいけない。」とジョージに注意しました。次の打順が来た時はランナーが二塁にいてマシアス先生はジョージに思い切り打つように指示をし、打球は何とライトオーバーの大きなホームランとなり敵も味方も皆驚き、マシアス先生も君は将来野球選手になる素質があると褒めてくれてジョージは有頂天になりました。

ジョージは最初キャッチャーでしたが、自チームのピッチャーが次々に打たれてしまい交代要員がいなくなってしまったので、マシアス先生が最後の手段としてジョージをマウンドに立たせてみたら、剛速球で連続三振を奪ったので、以降ジョージを正式にピッチャーとして起用することにしました。悪餓鬼だっ

たジョージは、野球に夢中になったお陰で15才になる頃にはすっかり良い子になり、学業の方もクラスで1～2位を争うまでになりました。16才の時、校内のクラス対抗野球大会があり、決勝まで進んだジョージのチームは、ジョージの逆転ホームランで接戦を制して優勝しました。

ジョージの学んでいるセントメリー校は、19才で卒業です。ジョージもそろそろ卒業後のことを考えなくてはなりません。家は相変わらず貧しくジョージが後を引き継げるような状況ではないので、ジョージは洋服屋の仕立て職人になろうと心を決め、学校でその訓練を一生懸命やっていました。そんなある日、メリーランドにある大学の野球チームと試合をすることが決まって、選手団、応援団が大挙して先方の野球場に乗り込みました。相手は大学生だから歯が立たないだろうというのが大方の予想でしたが、ジョージの好投と場外大ホームランで1対0で勝ってしまいました。それを観戦していた人の中に1人のプロ野球のスカウトが含まれていて、ジョージのピッチングの素晴らしさに目を付けました。そして翌年学校に直接ボルチモア・オリオールズという大リーグの下のインターナショナルリーグに所属するプロ野球チームの監督がジョージと契約に来ました。それまで自分が好きな野球で給料を貰えるようになるなんて夢にも思っていなかったジョージは大喜びで早速春のキャンプに参加することになりました。そこで付いたあだ名がベーブ・ルース（赤ん坊のような顔をしたルース）で、以降ジョージをベーブまたはベーブ・ルースということにします。

そのシーズン大活躍をしたベーブ・ルースはボルチモアの町中で大評判となるだけでなく、多くの大リーグのチームも注目するようになります。特に熱心だったのがボストンのレッド・ソックスで20才になったベーブ・ルースは憧れの大リーグに移籍することになります。そしてそのシーズンにレッド・ソックスは新人投手ベーブ・ルースの活躍もあって見事ワールド・シリーズ（アメリカン・リーグとナショナル・リーグの優勝チームが世界一を争う試合）で勝

利し、世界一に輝きました。

レッド・ソックスに入ってから4年目もレッド・ソックスはアメリカン・リーグで優勝し、ワールド・シリーズにも勝って世界一になりました。ベーブはピッチャーとしても打者としても大活躍していましたが、監督は大きな賭けとしてベーブを打者に専念させてみたらどうだろうと考え、ベーブの定位置を外野手にしてみました。すると翌シーズンはシーズン記録の29本というホームランを叩き出し、ベーブはホームラン王に輝いたのです。

それを見たニューヨーク・ヤンキースのオーナーは、ベーブを何としても自チームに欲しくなり、大金をレッド・ソックスに払ってベーブを獲得してしまいます。ヤンキースに移籍後もベーブはホームラン王を続け、30才にもならないのに全米一の人気者になりました。そうなる人間は誰しも我が儘になるもので、ベーブも翌日の試合のことも考えずに好きなだけ飲み食いし、夜通しトランプ賭けに興じたり、けんかをしたりと生活が荒れてきました。結果として打撃の方も振るわず、むしゃくしゃしている時に監督に注意されたことが面白くなく、口げんかになってしまいました。激怒した監督はベーブを当分ベンチにも入れないという強硬手段に出ます。それにも懲りないベーブは一人ぶらぶら生活していました。

そんな時、セントメリー学校のマシアス先生が訪れて来ました。第一の目的は学校が火災に遭った時、多額の再建資金をベーブが寄付したことに対するお礼を言うことでしたが、もう一つは全校の生徒、いや全米の子供たちがベーブ・ルースのようになりたいと尊敬していること、彼等の期待を裏切ったり失望させることを決してしてはならないと、最近の彼の言動をたしなめることでした。

ベーブはマシアス先生に抱きつき「マシアス先生、ぼくは間違っていました。先生にまで心配を掛けて申し訳ありません。これからは…」と大粒の涙を流しながら改心を誓いました。翌日からは一人トレーニングセンターに通い素振り

をしたり、自転車こぎをして身体を鍛えると同時に飲食にも気を遣うようになり、来シーズンこそはと決意を新たにしました。誰しもベーブはもう駄目だろうと思っていた予想を覆し、ベーブは見事に復帰し、再びホームラン王に返り咲きました。そして1927年ベーブ32才の時にはそれまでの大リーグ新記録となる1シーズン60本ものホームランを叩き出しました。

彼のホームランについては、いくつかの有名なエピソードがあります。重い病で入院している男の子の父親に対し、医者が「医術の手は尽くした。後はこの子が一番望んでいることを叶えることだね。」と言いました。父親はこの子が一番好きなのは野球で、中でもベーブ・ルースのことは神様のように尊敬している、彼のサインボールでも枕元に置いてやれば、ひょっとして元気が出て来るかも知れないと、何のつてもないベーブ・ルースの所に直接お願いに行きました。するとベーブは快く承知してくれて、直ぐにサイン入りのボールとバットを持って病室を見舞ってくれました。ベーブが「他に何か望みはあるかい。」と尋ねると、その子は「明日のワールド・シリーズでぼくのために1本ホームランを打って欲しい。」と頼みました。ベーブは「それは難しいことだけれど精一杯頑張ってみよう。」と答え、翌日約束のホームランを放ちました。その子はそれからみるみる良くなっていきました。

ベーブ・ルースは40才で引退しますが、21年も大リーグでプレーした選手は稀で、その間714本ものホームランを打ち、通算打率3割4分2厘という高い平均打率を維持しました。また四球で一塁に歩かされた回数は2056回、三振した数は1330回ですから四球王、三振王でもあった訳です。引退後ベーブ・ルースは全米を回って野球少年たちの指導に当たっていましたが1943年53才で亡くなりました。

勿論彼の記録は後に続く強打者によって破られるでしょうが、彼が現れるまでの大リーグは守備中心の野球で、ホームラン王といっても1シーズン12~3本といった地味なものでした。それを長打中心の野球に変え、大リーグの人気

を一気に爆発させ、野球をアメリカの国技にまで高めたのはベーブ・ルースのお陰とって良いでしょう。

4月27日を「ベーブ・ルースの日」と定め、野球・ホームランといえば誰しもベーブ・ルースを思い出すのは、彼が大選手だっただけでなく、心から野球を愛し、子供のように素直な気持ちを持ち、スポーツマン精神を貫いたことが大きかったと私は思います。

(注) この紹介文は主として偕成社の児童伝記シリーズ「ベーブ・ルース」(白木茂)によっています。

17. 100万ドルの脚線美 マレーネ・ディートリッヒ

私は映画鑑賞も重要な趣味の1つで、名作といわれる古い映画も良く観ます。ここで取り上げるマレーネ・ディートリッヒは第2次世界大戦をまたいで国際的に活躍した女優で若い読者は御存知ないかも知れません。

彼女は1901年に西ベルリンで中流の貴族家庭の次女として生まれ、父からゲルマン流の厳格なしつけと教育を受けましたが、父は第1次世界大戦で戦死してしまいます。19才の時音楽家を目指してヴァイオリンを習いましたが、すぐ断念し、演出家ラインハルトが主宰する演劇学校に入り、女優を目指し、後にドイツ演劇学校に転校して、オーディションとレビュー巡業を繰り返します。

ディートリッヒは23才で映画「愛の天使」の脇役で出演すると同時にその時の助監督ルドルフ・ジーパーと結婚します。この夫ルドルフとは生涯添い遂げますが、マリアという一女を設けただけでディートリッヒの有名人との浮気はニュースを賑わせました。

ディートリッヒは28才の時「嘆きの天使」の主演女優を探していたドイツの監督ジョゼフ・フォン・スタンバーグに見いだされ、このコンビでディート

リッヒは世界的な女優となっていきます。

翌年、このコンビはナチスによる映画への戦時統制の強化を嫌って、アメリカで制作するためにパラマウントと契約し、その第1作としてゲーリー・クーパーとディートリッヒ主演の「モロッコ」を撮影します。「モロッコ」は私がディートリッヒを知った最初の映画です。外人部隊のゲーリー・クーパーが砂漠の中を戦地に赴く後ろ姿をディートリッヒがサンダルを脱いで必死に追いかけるラストシーンは未だに忘れられません。

グレタ・ガルボを使って客を集めているMGM社に対抗して、パラマウント社はディートリッヒに莫大な宣伝費を掛けて売り出しました。ディートリッヒの脚に100万ドル（現在のお金にしたら大金です）の保険を掛けたのもその一つです。

ディートリッヒは30才の時、家族と共にアメリカへ移住します。スタンバーグ監督とのコンビで最大のヒット作は「上海特急」です。その後も何本か制作していますが、営業的にはいずれも不振で、このコンビは解消されます。そしてこの頃、ディートリッヒは祖国を裏切った者としてドイツでの興業は禁止となります。

ディートリッヒ34才の時、ヨーロッパからアメリカに帰る船の中で文豪ヘミングウェイと出会い生涯の親友同士となります。ヘミングウェイはディートリッヒの顔について「あの神聖な頬のくぼみ」と称賛していますが、実はそれは奥歯を抜くことによって実現したものでした。

その後ディートリッヒは契約上の揉め事でパラマウントを解雇されます。それを知ったのかヒットラーからドイツに戻って映画に出演することを再三勧告されますが、彼女は断固としてそれを拒否します。

ディートリッヒは第2次大戦の終戦前の2～3年は女優活動を休み、歌手として戦場を慰問して回りますが、その時次のようなエピソードが残っています。彼女の「リリー・マルレーン」という歌がラジオから流れると、それまで撃ち

合っていた連合軍とナチス軍の兵士が塹壕^{ざんごう}から出て皆その歌に聞き惚れたとい
います。それはどんな休戦交渉の効果もなかった当時のこととしては、まさに
歴史的出来事でした。最晩年になって彼女自身、戦場で兵士たちの前で「リ
リー・マルレーン」を歌ったことが一番楽しい思い出だと孫に話しています。
そして1947年には、兵士慰問の功績からアメリカ市民最高の栄誉である自由
勲章を授けられています。私たちはディートリッヒの物憂いような大人の歌声
が好きで、ドライブする時などよく彼女のCDをかけています。

終戦をパリで迎えたディートリッヒは既に44才になっていましたが、その
時からフランスの有名な男優ジャン・ギャバンと公然と暮らし始めます。彼
女の男性遍歴は見事という他ありません。彼女が75才の時、最大の理解者
であった夫のルドルフが亡くなりますが、夫に隠すこともなくヘミングウェイ、
ジャン・ギャバン、ジョゼフ・フォン・スタンバーグ、ジャン・コクトー、
ジャン・マレー、エーリッヒ・レマルク、モーリス・シュバリエ、フリッツ・
ラング、マイケル・ワイルディング、バステルナーク、ジョン・F・ケネディ、
ジェームズ・スチュアート、ユル・プリンナー……と恋をしました。

ディートリッヒは小娘が春や花に抱いたような恋心、つまりプラトニックな
ロマンスが好きだったのだと思います。1人娘によると、母はセックスは嫌い
だと言っていたといえます。

ディートリッヒは戦後も多くの映画に出演し、歌でもラスベガスやナイトク
ラブに出演し、91才で波乱に富んだ人生を閉じました。

(注) この紹介文は主として「永遠のマレーネ・ディートリッヒ」(和久本みさ子編著、
(株)河出書房新社発行)によっています。

18. 映画道を極めた 黒澤 明

黒澤明は1910年に東京で生まれました。小学生時代、泣き虫でいじめられっ子だった黒澤は、絵の才能を先生にほめられてから次第に自信を持ち始め、勉強や運動にも励むようになります。また当時洋画専門の映画館で映画説明者として活躍していた兄の影響もあって、しばしば映画館に通いました。そのことが後に映画界に入る伏線になったのかも知れません。

黒澤は最初画家を目指して東京美術学校を受験しますが不合格となってしまう、絵の専門学校に行きました。18才で早くも二科展に静物画が入選するなど、才能の片鱗を覗かせますが、その後大正デモクラシーの風潮に大きく影響され、二科展に批判的なプロレタリア美術協会に通うようになり、左翼運動にも身を投じるようになります。しかしこの方向では食べていけず、黒澤が26才の時現在の東宝の前身であるP C Lの助監督募集に応募し、合格したのを契機に映画の道に入ります。

助監督時代は尊敬する山本嘉次郎監督のもとでシナリオの書き方、演出、編集などについて、みっちり現場教育を受けました。そして監督第1作は、自ら小説の新聞広告を見て「これで行こう」と決め作家と交渉した「姿三四郎」でした。このデビュー作は大当たりし、黒澤は監督としてのデビューを飾りました。私も小学校3～4年の戦争中この映画を観ており、柔道家に扮する主役の藤田進のことは覚えています。黒澤監督のことには全く関心が行っていませんでした。

戦後黒澤は「わが青春に悔いなし」、「酔いどれ天使」、「野良犬」、「醜聞」など映画史上に残る名作を次々に発表します。これらの中で新人として登用した三船敏郎は、以降の黒澤作品には欠かせない存在となります。そして黒澤の名を一躍世界的にしたのが、1951年にベネチア国際映画祭でグランプリ

を受賞した「羅生門」です。さらに翌年には志村喬を主演にガンに冒された市役所職員の最後の生きざまを描いた「生きる」を発表して多くの人を感動させました。

次いで三船、志村等の「7人の侍」、三船主演の「蜘蛛巣城（くものすじょう）」、「どん底」、「隠し砦の三悪人」、「悪い奴ほどよく眠る」、「用心棒」、「椿三十郎」、「天国と地獄」、そして1965年の「赤ひげ」など、人間の生き方を考えさせるとともに、エネルギッシュな生命力に満ちた人間を描いた数々の名作を生み出します。黒澤は撮影所で「黒澤天皇」と呼ばれていましたが、それは、厳しく現場スタッフを統率する彼の指導力と、その完全主義に対する周囲の人々の賞賛でもありました。

1969年には、木下恵介、市川崑、小林正樹と「四騎の会」を結成し制作に当たりますが、順風満帆まんぱんというわけにはいきませんでした。第1作目の「どですかでん」こそ何とかうまくいきましたが、続く日米合作映画「トラトラトラ」では黒澤は皆と意見が合わず、途中で一人降板してしまいます。そして映画作りに行き詰まりを覚え、1971年に自殺未遂を起こしてしまいます。その作品や風貌からは想像もつかない出来事ですが、私は映画は総合芸術でその中心は監督だと思っているので、黒澤が繊細な神経を持ち合わせていたことは、むしろ当然なのかも知れません。

やがて立ち直ると、黒澤は名だたる賞を総なめにし、「世界の黒澤」の名を欲しいままにします。まず1975年にソ連（現ロシア）で「デルス・ウザーラ」を制作して、モスクワ映画祭でグランプリを受賞し、1980年には「影武者」でカンヌ国際映画祭でグランプリを受賞します。1985年にはフランスの資金協力で「乱」を、1990年にはアメリカ映画として「夢」を制作するなどまさにインターナショナルに活躍しました。

最後に黒澤明のエピソードをいくつか紹介しましょう。

1990年に制作した「夢」の中で黒澤は6つの原子炉が同時に爆発し、富士

山が真っ赤に染まって溶解するという衝撃的な映像を使いましたが、その中で子持ちの女が逃げ惑いながら次のように絶叫しています。

「原発は操作ミスさえ犯さなければ安全なのだ、絶対ミスは犯さないから原発は安全だなどと抜かした奴らは皆んな縛り首にしなければ死んでも死にきれない。」

この予言、警鐘的な発言がこの度の東京電力の福島発電所の事故で現実になってみると、この不世出の世界的監督の想像力がいかに優れていたかを思わざるを得ません。

また黒澤といえば近寄りがたい寡黙な人と思われていますが、娘の和子さんによると実際は全く違っていたそうです。「父は酒が入らなくとも良く話す、どちらかと言えばおしゃべりな人でした。話す内容は既に記事になった映画の話ばかりでなく、実に多様な内容に渡っていました。話すことで自分のテンションを上げ、無邪気にしゃべり続けることによって次作以降の構想をまとめるというのが父の方法でした。」

さらに黒澤と言えば出不精で有名でした。数々の授賞式には一切出たがらないし、記者に追い回されるのを嫌って撮影現場では日を定めてマスコミ公開日とし、それ以外は一切外部の人たちを寄せ付けず、撮影に没頭するという姿勢を貫きました。ですから撮影現場の創造のプロセスは神秘のヴェールに包まれていたものです。

ところが映画がテレビ攻勢の煽り^{あお}を受けて斜陽になり始めた頃から黒澤はそのシャット・アウトの厚い壁を自ら緩めていきました。それは映画をこよなく愛した黒澤の危機意識から出たことで、自分が元気なうちに映画による創造の方法を後に続く人々に伝えておきたいという気持ちの表れだったと思います。晩年には「蝦蟇の油」（岩波書店）という伝記を書いたり、率先してインタビューや対談に応じたり、授賞式に出席したりしました。

映画は全人格的な表現であるだけに、黒澤が語るものは映画を極めた人の人

生論であり、哲学であり、文明論です。

(注) この紹介文は主として「芸術・芸能人物事典」(日本図書センター)及び「黒澤明の遺言」(都築政昭著)に依っています。

19. 愛の奉仕者として生きた マザー・テレサ

マザー・テレサは1910年にマケドニアという地中海の北東部に位置する小さな農業国に生まれました。大昔、アレキサンダー大王という世界征服を夢見た英雄の出た国です。アルバニア系の熱心なキリスト教徒である両親は、その子にアグネス・ゴンジャ・ボアジュと名付けました。「ゴンジャ」には「花のつぼみ」という意味があります。アグネスは3人兄弟の末っ子でした。

父は商人で決して裕福ではありませんでしたが、一家は毎週日曜日には教会に通うとても幸福な家庭生活を送っていました。教会を通じて宣教師や修道女と交際をしているうち、アグネスは、自分もいつか宣教師になって貧しい人々を救う人間になりたいと思うようになりました。

アグネスは14才の時、アイルランドのダブリンにある有名なロレート修道院に留学したいと両親に申し出ました。両親はびっくりしましたが、言い出したらきかないアグネスなので、渋々承諾しました。両親は、「お前の身は神様に捧げたのだから、もう2度とこの家には戻れないんだよ。それでもいいんだね。」と言うと、アグネスは黙ってうなずきました。こうしてアグネスは1人アイルランドに旅立ちました。

修道女になったアグネスは、シスター名を「テレサ」としました。この名前は若くして殉教したフランスの有名な聖女テレジアからとったものです。テレサは、シスターになるとすぐに、最も貧しい人々が多いインドに派遣してくれるように院長に頼み、19才の時やっとそれが実現しました。

最初テレサが派遣されたのは、ベンガル州にある高級避暑地ダージリンで、

金持ちが避暑に集まる別荘地です。人々はヒマラヤの景色を見ながら散歩をしたり、乗馬をしたりして楽しく日々を過ごしていました。そこでのテレサの暮らしは毎日神に祈りを捧げるだけで、彼女が望んでいたこととはかけ離れたものでしたので、貧民の多く住む大都会カルカッタへの転勤を申し出ました。

カルカッタにあるロレート修道院は、インドでも最も人口が密集している地域にあり、周辺はスラム街で、ゴミ捨て場や零細工場でごったがえしていました。しかしロレート修道院の敷地内はきれいに掃除されており、テレサが勤務する修道会経営の聖マリア高等学校にはスマートな制服の少女たちが学んでいました。テレサは初めその女学校の地理の教師でしたが、やがて校長になります。校長室からはスラム街が見下ろせ、テレサは心を痛めると同時に、自分はこんな日常を送っていて本当に良いのだろうか、何か心の奥底にしっくりいかないものを感じ始めました。

ある日テレサは神のお告げを確かに聞いたような気がしました。「あなたは全てを捨てて1人でスラム街に行きなさい。そこで貧しい人の中でも一番貧しい人の中にキリスト自身を見出し、そのキリスト自身に仕えなさい。」テレサはその神の声に生涯仕えることを誓いました。

テレサは直ぐローマ法王ピオ12世とカルカッタ大司教に、修道院の外に出て活動する許可を得るための手紙を書きました。当時はシスターは修道院の外に出ることを固く禁じられていたからです。「1年以内に修道院に戻ってくるなら許す」という許可が下りた時には、テレサは38才になっていました。

こうしてテレサは住み慣れた修道院を後にして、ただ1人スラム街に入ってきました。勿論将来の見通しなど全く立っていませんでしたが、不安も全くありませんでした。ただ神の声に従うことが、自分の信念を貫くことに繋がるという確信だけが彼女の支えでした。

貧しい人の中には病気にかかっている人が多いので、その人たちを救うためにはまず医療の知識が必要だと、アメリカの医療学校で4ヶ月間集中的に医療

を勉強しました。その後1人だけの宣教活動に入るわけですが教育こそがスラムを救う鍵であり、貧しさと無知から逃れるただ一つの道であると信じているテレサは、子供達にまず読み書きから教えることにし、青空教室を開設しました。黒板もノートもない教室でしたが、5人の生徒が集まってくれました。土の地面を黒板代わりに棒切れをチョーク代わりにしましたが、口コミで少しずつ生徒数が増えていき、そのうち有志の資産家が屋根のある教室を提供してくれたり、資金を寄付してくれる人々が出てきて、学校も次第に形を整えていきました。

テレサはスラムにとけ込むためには、外国人ではだめだとインド国籍を取得し、服装も粗末な木綿のサリーに切り替えました。テレサが1人でスラムの子供達を教えていると知ってロレート修道院時代の教え子の1人が手伝いを申し出てきました。テレサはその子に自分の幼名をとってシスター・アグネスと名付けました。目の美しいこのベンガル女性は、とても控えめながら、テレサを生涯支えることになります。彼女に続いて修道院時代の教え子が次々とテレサの元に協力を申し出てくるようになり、自然にテレサのことをマザー・テレサと呼ぶようになりました。そして、1950年、僅か12人のシスターしかいないテレサのグループが、ローマ法王から修道会「神の愛の宣教者会」として正式に認可され、1年以内に修道院に戻らなければならないという制約もはずれることになりました。

以上がマザー・テレサの前半生で、これからマザー・テレサの性向の道が開けていくのですが、この部分は彼女の実績をたどるだけにとどめたいと思います。

マザー・テレサの事業は大きく分けて次の4つに集約されます。

- ①親に捨てられた子供達を世話する「孤児の家」
- ②誰からも相手にされず、道ばたで死にかけている人達を世話する「死を待つ人の家」

③貧しくて学校に行けない子供達のための「スラムの学校」

④ハンセン病に苦しんでいる人達の診療所や、彼等が世間に気兼ねすることなく働くことの出来る「平和の村」

これらの事業を称えてマザー・テレサが65才の時「シュバイツァー賞」、69才の時「ノーベル平和賞」、71才の時インド最高の栄誉称号「インドの星」を授与されます。そして1997年87才で心臓発作のため死去します。

私がマザー・テレサをここで取り上げたのは、これらの事業は全て純粹に人間愛からスタートしたものだからです。たとえば、「死を待つ人の家」では、死んでいく人達の宗教は何なのか、宗教を信じていない人の場合、どんな葬られ方をしたいのかを徹底的に調査した上で、その希望通りの死に方を可能な限り実現させました。かつて、フランシスコ・ザビエルが、カルカッタに来た時にも似たような事業をやっていますが、それはあくまでもキリスト教の布教が目的であって、マザー・テレサとは本質的に異なります。マザー・テレサはまるで大日如来のようにあらゆる宗教を容認し、自らキリスト教から追放されることを覚悟の上での行動だったのです。

(注) 以上の紹介文は「マザー・テレサ」(沖守弘、くもえ出版)によっています。

20. 最後まで女優道を生きた イングリッド・バーグマン

1915年、イングリッド・バーグマンはスウェーデンのストックホルムに生まれました。2才の時ドイツ人だった母を亡くし、父親の手一つで育てられましたが、その父も13才の時に亡くなり、1人っ子のイングリッドは叔父の家に引き取られ、外見は明るくても内面は孤独な少女時代を過ごしました。

父は亡くなるまで写真館を経営していましたが、本当は画家になりたかったらしく、イングリッドは恐らく父の芸術的資質を引き継いだのでしょう。18

才の時スエーデンの王立演劇学校に入学し、翌年その清潔で知的な美貌と確かな演技力に目をつけられて、スエーデンの映画界に引き抜かれ、多くの映画に出演しました。1936年に主演した「間奏曲」という映画が、あの「風と共に去りぬ」で名高いハリウッドのプロデューサー、デーヴィッド・O・セルズニックの目に留まり、7年間の専属契約が成立します。そして1939年に「間奏曲」のリメイク版「別離」で待望のアメリカ映画デビューを果たします。イングリッド24才の時でした。

実はイングリッドはその3年前に歯科医のベッター・リンドストロームと結婚、1人娘のピアを生んでいました。ベッターもイングリッドに遅れ1年後にアメリカに移住し、イングリッドのマネージャー役を務めながらも懸命に勉強し、後に立派な精神科医になります。

イングリッドがセルズニックとの契約期間中に主演した映画は11本、その中にはハンフリーボガードとの「カサブランカ」、ゲーリー・クーパーとの「誰がために鐘は鳴る」、シャルル・ボワイエとの「ガス燈」、ビング・クロスビーとの「聖メリイの鐘」、グレゴリーペックとの「白い恐怖」、ケーリー・グラントとの「汚名」など当時のハリウッドのトップ男優たちとの共演作も含まれており、イングリッド31才の時にはハリウッドのドル箱スターになっていました。

しかし商業主義に凝り固まったハリウッドの映画作りへの彼女の不満が膨れ上がったのもこの頃のことです。7年というセルズニックとの契約が切れ、再契約を望む彼の手を振り切って独立の道を選んだのは、まだまだ新しい可能性を秘めている筈だという自分への期待があり、それを実際に試してみたかったからでしょう。

しかし、独立後主演した「凱旋門」、「ジャンヌ・ダルク」はいずれも興行的には不振に終わり、ヒッチコックの「山羊座の下に」も不評で、34才になっていたイングリッドはこれからの女優としての道を突然見失ってしまいま

した。そんな時偶然観たのがロッセリーニ監督の2本のイタリア映画で、感動したイングリッドは直ちに出演を強く望んでいるということを手紙に書きました。

ロッセリーニからやっと返事が来て、イングリッドはマネージャー役の夫のベッターと共にロッセリーニとパリで面会します。その時のロッセリーニは、どこか恥ずかしげな物言いに、子供のような純粹さと芸術家らしい感性と知性を同居させており、イングリッドがそれまで映画界で会ったことのないタイプの男性に見えました。イングリッドには早くも恋が芽生えていたのです。彼女は夫ベッターと娘ピアを捨て、ロッセリーニのもとに飛び込みました。そしてベッターが離婚を承諾してくれないうちに、ロッセリーニとの間に息子ロベルティーノが誕生してしまいます。ベッターとの離婚がアメリカの裁判所でやっと認められた後、さらに双子の姉妹イゾッタとイザベラも誕生します。

こうしてみると、ロッセリーニとイングリッドとの結婚生活は幸せそうに見えますが、内実はそうではありませんでした。「ストロンボリ」を初めとする5本の映画はいずれも興行的には無残な結果に終わりました。未だ保守的な風潮が残っていたハリウッドが、モラルを無視した彼女の行動をスキャンダルと見なし、興行禁止の声を上げるなどの逆風も吹いていましたが、根本的にはロッセリーニとイングリッドの映画芸術に対する考え方の違いが原因でした。

王立の芸術学校に学んで、脚本に書かれた人物像を完全に把握した上でカメラの前に立つ正統派のイングリッドと、最初から脚本など無視し、撮影現場でインスピレーションに従って動き、演技者はたとえ主役であっても自分が望む映像のための被写体に過ぎないと考えているロッセリーニの間には大きなギャップがあり過ぎました。2人の離婚は直接的にはロッセリーニの浮気でしたが、イングリッドにも2人の間を修復する意欲は残されていませんでした。

落ち込んだイングリッドが強く望んだのは、最初の夫ベッターとの間に出来た娘ピアとの面会でした。ベッターの拒否に会いそれはなかなか叶いませんで

したが、1952年に裁判所の判事の前で14才のピアが言った言葉にイングリッドは深く胸をえぐられました。「ママは好きだけれど、私はママを愛していません。愛しているのはパパです。」

1958年にロッセリーニと正式に離婚したイングリッドは43才になっていましたが、「恋多き女」というフランス映画で主演をし、やっとハリウッドへの復帰が認められます。そしてアメリカ映画の「追想」でオスカー賞の主演女優賞（2度目）に輝き、彼女のもとに次々と出演依頼が来るようになってイングリッドは第2の黄金時代を迎えることとなります。晩年は映画よりも舞台に力を入れていましたが、昔の若さは失っていたものの、ふくよかな容姿には中年の魅力があふれ、彼女の主演する舞台はヒットを続けました。

また、アガサ・クリスティ原作の映画「オリエント急行殺人事件」では助演女優賞で3回目のオスカー受賞をしていますし、44年の映画生活最後の作品となる「秋のソナタ」では、ニューヨーク批評家協会賞とイタリアのアカデミー賞ともいえるドナテワロ賞を受賞しています。

私生活では、ロッセリーニと離婚してすぐ、スウェーデン人の演劇プロデューサー、ラルフ・シュミットと結婚しますが、12年で離婚します。それは彼女自身が認めているように、妻であるよりも女優であり続けようとしたからです。娘のピアも成人してからは、演技することに全てを捧げた母の一途な生き方の良き理解者になったといわれます。1982年にイングリッドは68才でガンで亡くなりました。

イングリッド・バーグマンは私の一番好みの女優であり、3人の男性遍歴はあったものの、女優としては立派な生きざまを見せてくれた人だと私も思っています。

（注）この紹介文は、主として雑誌スクリーンの「イングリッド・バーグマン、グレース・ケリー」に依っています。

21. 一代で松下王国を築いた 松下幸之助

事業家として独立するまで

和歌山市郊外の小地主の3男（8人兄弟姉妹）として1894年に生まれた幸之助は、父が事業に失敗したため、9才の時小学校を卒業間近に中退しなければならなくなります。実は幸之助はそれまでに、長姉以外の兄弟姉妹を全て結核で亡くしています。そして幸之助を立派な商人にしたいという父の希望で大阪の火鉢屋に奉公に出されますが、3ヶ月で店を閉めることになり、火鉢屋の主人の紹介で次いで自転車屋に奉公に行くことになります。

後年、幸之助は「僕が今日あるのは、自転車屋での6年間、ご主人と奥さんから実に親身に厳しい指導を受け、知らず知らずのうちに商売の道というものを身につけていったおかげである。」と述べています。

幸之助が11才の時に父を亡くすという不幸があり、幸之助が松下家一家を背負い、母と姉の生活を支える家父という立場に立たされます。

彼はいつまでも安い給与の丁稚を続けるという気はありませんでしたが、いづれにしても体を鍛えておかなければと、年に何回か開かれる新しい自転車のPRのためのレースに出場させてもらうことになりました。その賞金や賞品が魅力でもありましたが、彼はまるでプロの選手を目指すかのように朝4時半に起きて練習にのめり込み、何回か優勝もしました。ある時ゴール間近で1位の人を抜こうとして、前輪が触れて転倒し人事不省に陥りました。幸い左の鎖骨を折っただけでしたが、自転車屋のご主人から以降の出場を固く禁じられてしまいました。

幸之助は大阪市内を市電が走り出すのを見て、これからは電気の時代になると判断し、自転車屋には悪いと思いながらも15才の時大阪電灯（後の関西電

力)に転職してしまいます。大阪電灯時代、彼は2回命を失いかけてました。1回は通勤に使っていた蒸気船で船員が足を滑らせて転んだ時それに巻き込まれ一緒に海に落ちてしまい、懸命に泳いだものの、あわや溺れるというところでボートに救い上げられました。もう1回は、自転車で部品を配達していた時に猛スピードで突進してきた自動車に跳ね飛ばされ、自転車は大破し、自身も何メートルか跳ね飛ばされましたが、かすり傷一つ負いませんでした。幸之助はこの2回の命拾いで「自分は強運の持ち主である」という強い自信がつき、事業面でも積極果敢にチャレンジできるようになったといわれています。

彼は20才の時、2才年下の「むめの」と結婚します。むめのは海運業も営む中規模農家の娘で、大阪のある旧家で女中見習中だったといえます。幸之助はその頃は、普通の男たち並に女遊びもしていました。堺の廓では帰りの電車賃がなくなるまで遊んでしまい、電車賃を女郎に出してもらったそうです。

大阪電灯では、幸之助は配線工として働きながら、ソケットの改良に熱中します。そして1つの自信作が出来たので会社の商品の一つとして認定してもらおうと主任に見せると、「これは課長に見せるまでもない愚作である。」と言って相手にしてくれません。かれは更なる改良を重ねて再び提案しますが結果は同じでした。自分のような学歴のない者の提案は受け入れられないと思い、それならば独立して自分で作ってやろうと潔く22才で大阪電灯を辞めてしまいました。

公職追放解除まで

幸之助はまず、農商務省特許局に実用新案の届けを出し、「松下式ソケット」として登録されるのを待って大阪市郊外に4畳半と2畳の小さな平屋を借り、最初の工場としました。従業員は彼等夫婦と大阪電灯からの仲間2人の計4人です。何とか目指すソケットは出来て、さあ売ろうと皆張り切って大阪市

内を売り歩いたのですが、さっぱり売れません。これでは給料を払うどころではありません。大阪電灯からの仲間2人は早々と手を引いてしまいました。在庫の山を前にしてさすがに弱気になった幸之助を支えたのが、妻の「むめの」でした。労働力としては自分のすぐ下の弟を連れてくるし、資金も郷里でできるだけ借りてくるから、歯を食いしばって新規まき直しを図ろうと言うのです。

そんな時幸運にも扇風機の部品の1つである^{がいばん}碍盤の注文が舞い込んできました。碍盤とは、スイッチなどを取り付ける絶縁体で、扇風機の土台部分に取り付ける部品です。大もとの発注者は当時急成長していた川北電気ですから、幸之助の所は孫請けですが販売先の心配はいりません。

納品した碍盤は評判が良く、引き続き受注できたので、工場を拡張することにしました。そしてもっと広い二階屋に引っ越し、二階を住居に、一階を全部工場に使って新規に4～5人の工員を雇い、初めて「松下電気器具製作所」の看板も掲げました。

これで一応町工場として経営は安定しますが、幸之助はいつまでも下請け工場に甘んじている気はなく、目の回るような忙しさの中でも時間を見つけては、1人売れなかったソケットの改良に取り組んでいました。そのようにして大正7年にアタッチメントプラグと2灯用差し込みプラグという2つの新製品を発表することができました。これらは、地下足袋、亀の子タワシと並んで大正期の大ヒット商品となりました。

新製品は下請けではありませんから、自前の販売網を持たなければなりません。関西の市場だけでは捌ききれない生産量になったので、東京にも進出することにし、自ら月に1度は東京に出張することにしました。

幸之助がソケットに次いで開発したのは自転車用ランプです。最初は砲弾型ランプといって、自転車専用のものでしたが、それを改良した角型ランプは、自転車の持ち主が自由に取り付け、取り外しができて、懐中電灯にも使える便

利なものでした。幸之助は昭和2年にこの角型ランプに初めて「ナショナル」のブランドを付けました。

いろいろ紆余曲折はあったものの、松下電気器具製作所は町工場から従業員数千人の中堅企業へと成長していきましたが、一方で妻むめのとの間にもうけた長男を生後半年で亡くすという不幸に見舞われています。

角型ランプに次いで松下の主力製品となったのはラジオで、この頃から幸之助は製品開発を専門の技術者に任せて経営に専念するようになります。戦争中は、軍の要請を受けて木製の飛行機や船をはじめさまざまな未経験の分野の軍需産業にまで協力することになり、戦後その^{かど}廉で幸之助は進駐軍のGHQにより公職追放者にリストアップされてしまいます。さすがの幸之助もこの時ばかりは産業界からの引退を覚悟しますが、何と通常は資本家を敵に回す松下の労働組合が社主の追放解除運動の中心となってGHQや日本の関連省庁に陳情に回ってくれたお陰で、6ヶ月で解除になりました。

94年の人生を終えるまで

松下電気器具製作所の名で町工場として名乗りを上げて以来、営々と努力を重ねてきた幸之助の事業は幸之助が39才となった昭和10年には、創業から20年足らずで従業員3,500人を擁する中堅企業に発展するという奇跡の躍進を遂げていました。それは例えば「安くて便利で長持ちする電池式自転車ランプ」のように大衆の欲求を掘り当てるといふ「松下イズム」が原動力となっていました。そして個人企業だった松下電気器具製作所を株式会社とし、名称も松下電器製作所に改称しています。

その後、幸之助70才で従業員4万人、87才で30万人、系列会社700社という一大コンツェルンに発展していきませんが、その過程は決して平坦なものではありませんでした。

戦後の幸之助の公職追放を待ってましたとばかり、松下電器の重要なポストを担当していた妻むめの弟3人がそろって辞表を出してきたのには、さすがの幸之助もびっくりしました。特に一番上の義弟は創業以来30年にわたって幸之助を支えてきた人ですし、一番下の弟は幸之助が可愛がり期待をかけていたのです。しかも3人は三洋電機製作所を立ち上げ、松下電器ともろに競合する家庭電化製品を製造・販売するというのです。幸之助は必死に引き止めにかかりますが、3人の決意は固く、認めざるを得ませんでした。この後両者の関係は険悪となりますが、三洋電機がピンチに陥った時、幸之助は救いの手を差し伸べ、三洋電機を松下電器の子会社としています。義理人情を重んずる幸之助らしいやり方だと思います。

さらに主婦連等婦人団体によるナショナル製品不買運動がありました。これは松下電器が全国展開している販売網に対し、末端の小売価格までメーカーが決めて、強制していたことに対し、ダイエーの中内社長がスーパーでの大量仕入れ・廉価販売ができないとあって公正取引委員会に訴え、委員会が不公正な取引であるとして昭和42年に松下電器はヤミ再販価格をやめるべしという裁定を下したことに端を発した出来事でした。

もう一回は、幸之助は孫の正幸に松下電器の全てを任せようと画策したのですが、果たせなかったことです。幸之助は昭和36年に社長から会長に退き、昭和48年には会長から相談役に退いて形式的には具体的経営にくちばしを入れる立場ではなくなっていました。が、事実上は全く異なっており、実権は握ったまま手放しませんでした。

孫の正幸を社長にする前の訓練として、ビデオディスクの開発責任者に当たらせたのですが、多額の開発費を投入しながらも商品化に至らなかったのです。その原因は幸之助が世界のデジタル化の流れを認めずに、あくまでもアナログにこだわったことです。幸之助は技術者から何回説明を受けてもデジタル化の必要性を理解できなかったといえます。そのことは松下電器が手掛けていたコ

ンピューター事業から早々と独断で手を引いただけでなく、社内で使っていた事務管理用のコンピューターを全て処分させてしまったということからも想像できます。このあたりは、古いタイプのワンマン経営者の片鱗が出ています。

松下電器（現在はパナソニック）のことは以上までとして、幸之助のそれ以外の面についてふれたいと思います。

一つはPHP運動と松下政経塾についてです。PHP運動は戦後間もなく公職追放を受けた幸之助の溜まったマグマのはけ口として、また昭和55年に開塾された松下政経塾は経営の第一線に立たせてもらえなくなった幸之助のエネルギーのはけ口として始められたものとも考えられますが、いずれも「将来の日本の各界を率いる人材の育成」という点では共通しています。この二つには幸之助の思想家としての一面が良く出ていると思います。彼は生涯で100冊以上の本を書いています。

もう一つは幸之助の女性関係についてです。当時大阪ミナミの船場では二号さんを持つのは商売に成功した人の証とされていたのですが、それはあくまでも正妻の承諾を得た上でということでした。しかし幸之助はむめのに一切言わずに東京の世田谷に立派な邸宅を構え、「世田谷夫人」といわれる芸者上がりの30才年下の女性を囲い4人の子供をもうけてしまいます。晩年になってそれを知ったむめのの内心は穏やかではなかったと思いますが、幸之助も自分が悪かったと反省しています。

幸之助は94才で永眠しますが、彼はやり残した仕事があると生への激しい執念を顔に表しながら死んでいったといわれます。

私は全てきれいに精算して大往生するのも良いけれど、幸之助のように長生きしながらも尚やり残した使命を持ったまま死んでいく方が自分の生きざまとして理想的かも知れないと最近思うようになりました。

松下幸之助は「経営の神様」として今でも高い評価を受けていますが、あまりにも血のつながりにこだわったこと、ワンマン経営者だったこと、自分に理

解できなかったからとデジタル化のうねりを無視したこと、そして本妻に内緒で「世田谷夫人」を囲っていたことなど、かなり人間臭い面もあったことは事実です。

私より4つ年上で現在まだ存命中ですが、京セラの稲盛和夫の方が「経営者の鑑」とするにふさわしいのではないかと私個人としては思います。

(注) この紹介文は主として「血族の王ー松下幸之助とナショナルの世紀」(岩瀬達哉・新潮社)によっています。

22. 大相撲史上最強の元横綱 大鵬

この文章は主として2013年1月20日(日)毎日新聞の記事に依っています。毎日新聞は一度潰れそうになった新聞社で今や3大誌の中ではマイナーな存在になっていますが、私の友人の岩下君が記者だった頃から培ってきた記者魂は今も健在で私の一番好きな新聞です。ここに紹介された4面にわたる長い記事を短く紹介するのも意味があると思い、筆を執りました。

このところ、日本人横綱が少なく淋しく思っていたのですが、実は大鵬さんも、ウクライナ系ロシア人を父とし、日本人を母として樺太(現ロシア・サハリン)で生まれた合いの子です。彼は、「日本人が弱いのではなく、高度経済成長によって、日本人からハングリー精神が失われてしまったに過ぎない。」と言っています。日本人力士にもう一踏ん張りして欲しいと思うのは私だけではないでしょう。

前書きが長くなりましたが、ここからが毎日新聞の記事の要約です。

大相撲史上最多の幕内優勝32回を記録し、柏戸と共に「柏鵬時代」を築いた第48代横綱・大鵬の納谷幸喜さんが、2013年1月19日午後3時15分に心室頻拍のため72才(私より5才下)で都内の病院で死去されました。

納谷幸喜さんは、家族と共に終戦直後に北海道の弟子屈町に移り住みました。

彼は中学卒業後に営林署に勤めていた所を二所の関親方にスカウトされて入門し、1956年秋場所では初土俵、3年後の春場所後に18才10ヶ月で新十両、60年初場所には19才7ヶ月で新入幕、その場所で12勝を挙げて敢闘賞を受賞しました。入幕4場所目に新3役の小結になると、3役3場所目の60年九州場所では初優勝し、20才5ヶ月で大関へ、大関5場所目の61年秋場所には柏戸との優勝決定戦を制して2才年上の柏戸と共に横綱に昇進しました。

新入幕から所要11場所での横綱昇進は、歴代最速で21才3ヶ月は北の湖（現相撲協会理事長）の21才2ヶ月に次ぐ歴代2位です。

横綱昇進時の大鵬の身体は、身長177cm、体重133kgというバランスの取れたもので、左右どちらでも攻めの豊かさで優勝を重ね、横綱5場所目の62年5月場所目の名古屋場所から63年の夏場所まで6連覇を達成、全勝優勝も8回記録しました。その強さと人気から子供達の好きなものとして「巨人・大鵬・卵焼き」という流行語が生まれました。

68年秋場所から69年春場所にかけては、45連勝という偉業も記録しました。71年初場所で32回目の優勝、その翌々場所の5日目に貴乃花（元故二子山親方）に破れて、余力を残したまま引退しました。そして1代年寄「大鵬」を襲名し、大鵬部屋を起こし、幾多の力士を育てました。77年に脳梗塞で倒れましたが、その後復歸して、関脇巨砲おおづつらを育てました。

80年2月から96年11月まで16年9ヶ月にもわたって日本相撲協会理事を務め、その後は北海道の川湯温泉に相撲博物館を建て館長を務めました。また2009年には相撲協会では初の文化功労者に選ばれました。以上は大鵬の略歴ですが、その甘いマスクと、人柄と強さは、国民の脳裏に長い間焼き付いていることでしょう。

以上が本論ですが、以下にいくつかのエピソード等を加筆させていただきます。

①大鵬の鵬という鳥について

鵬は鯤（にしん）という魚が変身した大鳥で、両翼を広げると数千メートルにもなるという「莊子」の教えにある架空の鳥で、初代二所の関親方の大好きな四股名で、自慢の納谷青年が十両になった時に満を持して迷いなく与えた四股名だそうです。当の納谷青年は戸惑いましたが親方がそれだけおっしゃるのならと有難くお受けしたそうです。

②大鵬の一生は「忍」の一時に尽きる

若い少年時代は貧を忍び、大鵬を名乗ってからは、名前の重圧に押し潰されないように耐え忍び、脳梗塞になってからは、死の恐怖を耐え忍んで、親方道を極めていきました。

③無類の酒好きだったこと

同じ年のホームラン王、王貞治さん、5才年上の長嶋さんとは飲み仲間、王さんは一升も入る杯さかづきに酒をなみなみと注いで2人で飲み干したといいます。王さんは「巨人・大鵬・卵焼き」という流行語で個人名で出て来るのは大鵬さんだけです。それだけ強く、いい男で、人柄も抜群だったという証明でしょう。と大鵬さんの死を惜しんだといわれます。



第3部

房総ゆかりの人々

1. 房総とも関わりのあった 源 頼朝

源頼朝ほどの人物の全体像をここで紹介するのは、ちょっと荷が重すぎるので、まず頼朝がどんな人物であったかの概略を紹介し、その後入手できた資料を基に千葉県との関わりについて触れてみることにします。

本格的武家政治を始めた源頼朝（1147～99）

鎌倉幕府初代の将軍です。義朝の第3子で、母は熱田大宮司藤原季範の娘です。頼朝の幼名は鬼武者といい、器量才略があり、父の寵愛を受けました。

1159年平治の乱に父に従い、平頼盛と戦ってやぶれ、父の後を追って東国に逃げましたが、美濃で捕らえられ、平清盛のいる六波羅ろくはらに送られました。平清盛の母池禅尼いけぜんにの命乞いによりやっと死罪を免れて伊豆蛭島ひるじまに20年も流されました。

1180年4月後白河法皇の皇子以仁王もちひとおうから平氏追討の命を受けて兵を起し、大庭景親らの軍と石橋山に戦いましたが敗れ、房総に脱しました。そしてさらに関東各地に勢力を扶植しつつ鎌倉に入り、三浦義澄らの来援を得て勢いが伸張しました。

同年10月平維盛の軍と富士川に対陣して敗走させ、その時弟義経が奥州より参じました。11月常陸国府に至り、佐竹氏を破ります。かかる間に頼朝と同じく源氏の流れをくむ信濃の木曾義仲との間に対立が生じ、頼朝はこれを討とうとしましたが、義仲は子義高を人質として送り和を乞い、かつ婚姻を通じて一時事なきを得ました。

しかし義仲は1183年京に入り、平氏を西走させて次第に専横となったため、後白河法皇は頼朝に追討の密勅を送りました。

頼朝は範頼・義経に命じて追討させ義仲を近江の粟津で殺し、さらに進んで

平氏を一ノ谷から屋島へと追い落としました。

やがて京より大江広元・三善康信らの公家を招き鎌倉に公文所・問注所等の機関を作り、政治機構を整えました。

1185年、屋島に拠った平氏を義経らに討たせ、ついに壇ノ浦において平家を滅ぼしました。

こののち頼朝は、後白河法皇と結びついて自分の許可なく官位についた義経を毛嫌いし、鎌倉に凱旋するのを止め、結局義経を追補し、加えてこれを後援している後白河法皇を圧迫して天下の実権を握ります。同年義経追補に名を借りて守護・地頭を設置し、着々と政権の基盤を確立していきました。

1186年、義仲・義経にくみした源行家を和泉に捕殺し、1189年には奥羽の藤原泰衡を攻めて義経を殺します。奥州藤原氏を族滅した後、ここに奥州奉行を置き、先に九州に鎮西奉行を設置したことと相俟って、一応全国統治を完了しました。

1190年、入京して権大納言、右近衛大将となり、九条兼実とともに朝廷内政治について協議の後、両官を辞して鎌倉に帰りました。

翌年公文所を政所と改めて幕府の組織を整え、法皇死後1192年征夷大將軍に任ぜられました。翌年範頼を伊豆にしりぞけ殺し、1195年再度上洛し、その威容を京畿に示して東大寺の落慶式に臨みました。

頼朝は1199年病没します。頼朝によって始められた武家政治はその後700年続き明治維新に及んだのです。

(注) この紹介文は主として「世界人名辞典」(東京堂出版)によっています。

市原市の清水家に伝わる源頼朝伝承

頼朝は1159年の平氏との戦いにやぶれて囚われの身となって以来20年もの間、伊豆の蛭が島に流罪になりました。その間は毎日父や一族の者を供養する

ための写経や読経の日々だったといわれます。そして34才の時、真鶴岬まなづるみさきから房総に逃れたといわれていますが、千葉の何処に逃れたかはっきりしていませんでした。ところが去年私が出版した「尊敬する歴史上の人々」を読まれた清水氏から、次のような文書をいただき疑問が解けました。以下に清水氏の文書の概要を紹介させていただきます。

1180年夏、相模国足柄下郡石橋山にて源頼朝と平家の大庭景親との戦いがありました。圧倒的な兵力差で頼朝は破られ、一時箱根山中に潜み後に海路房総に逃れました。千葉の豪族千葉常胤を頼って街道を通る頼朝の行列はおよそ300人でした。

途中で姉ヶ崎の大庄屋の立野家に寄り、夕刻の為宿泊しました。本来は清水家に宿泊の予定でした。

その後、君塚（現・五井金杉）の清水家にて休憩します。君塚の地名は千葉常胤の家人が迎えに来て頼朝を待った事に由来します。当家では休憩のみであった為に用意していた米百俵を大八車に積んで、一行に同行して千葉城まで届けたといえます。

当時の清水家は源氏を支援する土豪でした。土豪とはその土地に土着している武士の棟梁を言います。清水家の姓は京都の石清水八幡宮に由来します。石清水八幡宮は源氏の氏神とされて来ました。源氏の旗色は白でした。現在の君塚に在る白旗橋は頼朝一行が通った事に由来するのではないのでしょうか。

当家では祖父の代までは正月の神社参りは鎌倉の鶴岡八幡宮に行っていました。神官は丁重に應對してくれたといえます。父の代からは八幡宿の飯香岡八幡宮で済ませています。当所に在る大銀杏は、源頼朝が立寄った記念に頼朝がお手植えしたものであるといわれています。

千葉県には仁衛門島などいくつか千葉市から遠く離れたところに頼朝の伝承がありますが、これは平家の追手を逃れる為に意識的に流した噂と伝え聞いて

います。

筆者のコメント

頼朝が房総に何日滞在したかは明らかではありませんが、千葉城の城主であった千葉常胤^{つねたね}味方につけたというだけでも相当ゆかりがあったことは事実でしょう。私の小学校時代千葉氏の末裔^{まつえい}だと称して千葉勝胤というクラスメートがガキ大将となり、君臨していたものです。

ところで皆さん「判官鼯^{ほうがんびいき}鼠」という言葉をご存知ですか。私も「はんがんびいき」と読んで、当時部下だった土屋さんにこっそり注意され、大変恥ずかしい思いをした覚えがあるのですが、頼朝が弟の義経を憎み、ついに殺してしまった話をご存知でしょう。

平家打倒で大きな戦功のあった義経なのに、頼朝が自分の地位を脅かす者として警戒したのか、弟の命まで狙う仲になってしまったのを市井^{しせい}の人々は、つい判官（義経のこと）をひいき目に判断してしまうことを判官鼯鼠^{ほうがんびいき}というのです。歌舞伎でも義経と弁慶のことは題材にしても、頼朝を主人公にしたものを私は知りません。

奥羽で義経を死なせてしまうのは惜しいという民衆の気持ちからか、北海道にまで義経の足跡が伝承されています。果てはモンゴルに渡ってジンギスカンになったという小説が、4～50年前にベストセラーになっています。

2. 自分の信ずる宗教を貫いた 日蓮

日蓮は1222年に安房国^{あわのくに}（今の千葉県）の小湊に漁師の子として生まれ、小さい頃薬王磨^{やくおうまる}とっていました。

「やい、そのわかめ置いてけ。」子どもたちがせっかく拾ったわかめを見て、

乱暴者の男が大声で叫びました。子どもたちはびっくりして顔を見合わせています。ここは小湊の海岸です。

薬王麿が10才の時、ひどい飢饉が起こって、人々は食べる物が手に入らず、痩せ細っていきました。

子どもたちは、海岸や山へ行っては、食べる物を探し歩いていたのです。

「これは、おれたちが見つけたんだよ。」

「ひどいや。せっかく見つけた物を取り上げるなんて。」

子どもたちは、残念そうにぶつぶつと言っています。中には泣き出してしまった女の子もいましたが、相手が乱暴者の大人ですからどうにもなりません。わかめはみんな取り上げられそうになりました。

「おじさん。ひどいよ。これはおれたちが拾った物だよ。取り上げるなんてまちがってるじゃないか。」

薬王麿は、みんなの中から進み出て、男に向かってなじるように言いました。

「なにを。この小僧め。」

男は真っ赤になって、薬王麿をなぐりつけようとししました。

「そうだ、そうだ。おじさん、よしなよ。」

子どもたちみんなに騒がれてはどうにもなりません。

「ちえっ。生意気ながきめ。覚えていろよ。」

男はくやしそうに言うと、恐い顔をしながら帰って行きました。

「やあ、薬王麿、えらいや。」「よく恐くなかったなあ。」「わかめを取られなくてよかったあ。」「薬王麿、ありがとうよ。」

子どもたちは、口々に薬王麿をほめ、お礼も言いました。

薬王麿は、小さい頃から曲がったことが大嫌いで、自分が正しいと思ったことは、どこまでもやり通す子でした。

今日も、乱暴者の男がまちがったことをするのが許せなかったのです。

薬王麿は12才の春、世の中の人々を救うために、立派なお坊さんになろうと

決心し、家を離れて天台宗のお寺のある清澄山に登りました。お父さんやお母さんや、仲良しの友達と別れるのはつらいことでした。

でも、薬王磨は、元気に清澄山に登っていき、^{どうぜんぼう}道善房という偉いお坊さんから、お経を習いました。少しでも暇があると、自分でお経の本を探しては、読んだり書いたりして勉強を続けました。

「薬王磨は、よく勉強をするなあ。これからどこまで伸びるか楽しみじゃ。」

「本当に。よく勉強をする子だ。」

薬王磨は、お寺にあるたくさんのお経を次々に読んでいき、その熱心な勉強ぶりは、清澄山のお寺の中でも有名になりました。

「お師匠様。ここはどういう意味ですか。」

お経の本の中で少しでもわからない所があると、熱心に道善房に、たずねましたが、道善房は、薬王磨があまり熱心なので、夜遅くまで薬王磨のそばにいて、やさしく教えてあげました。

こうして、薬王磨は、清澄山のお寺にあるたくさんのお経の本を、全部読んでしまい、薬王磨は同じ仏教の中にも色々な教えのあることがわかりました。

薬王磨は、お経の勉強だけでなく、おそうじや水くみなども一生懸命にやりました。朝、まだ星の見える頃から起き出して、庭や本堂のおそうじをしましたが、冬の朝のおそうじは、冷たくて、手がかじかんでしまうこともありました。庭を掃く時は、落ち葉が1枚もなくなるまで掃き続けましたし、本堂の廊下は、自分の姿がうつるほど、磨き続けました。

「薬王磨は勉強ばかりでなく、仕事も良くするえらい子だ。」

薬王磨の評判は一層高くなりました。薬王磨は、どんなことでも、とことんまでやらないと、気が済まなかったのです。

薬王磨は16才の時、髪を剃って正式の僧侶になり、^{れんちょう}蓮長という名前を道善房からいただきました。

「私を日本の国で、一番知恵のある人にして下さい。」

蓮長は、そのように仏様に祈りながら勉強を続けました。

「色々な教えがあるが、正しい教えはどれなのだろうか。」という問題を蓮長は、夜も昼も考え続けました。

「お師匠様。色々な教えがありますが、どれが一番正しい教えなのですか。」

蓮長は、考えても考えてもわからないので、ある日ついに道善房にたずねました。

さすがの道善房も、この鋭い質問には困ってしまいました。

「蓮長よ、あせるな。お前はまだ若い。お経には色々な教えがあるのだよ。もっと勉強を重ねれば、どの教えが正しいかが自然にわかってくるよ。」としか答えられませんでした。

もちろん蓮長はそれだけでは満足できません。「正しい教えとは、どんな教えだろうか。」

蓮長は、正しい教えを求めて、17才の時、清澄山を下りて比叡山の延暦寺へ行きました。

比叡山や高野山等で勉強を重ねた蓮長は、32才の時、再びなつかしい清澄山に帰ってきました。ここで悟りを得て、名前を日蓮と改めました。日蓮宗は日蓮が「法華教」が一番正しい教えであると信じ「南無妙法蓮華経」と唱えた時に開かれました。

「日本の国を救うためにも、人々を救うためにも、自分の考えた教えが一番正しいのだ。」

こう考えた日蓮は、また清澄山を下りて、幕府のある鎌倉へ行きました。鎌倉では、小さな家に住んで、町へ出ては説法をしました。

「変な坊主が来たぞ。」「他の教えはみんなまちがっていると言っているぞ。」「でも、あの坊主の言うことが、正しいのかもしれないぞ。」

日蓮の辻説法が始まってから、鎌倉は大騒ぎになり、悪口を言う人や、石を

投げつけたりする人もいました。

日蓮は、そんなことにはかまわずに、毎日説法を続けているうちに日蓮の教えを聞く人たちがだんだん増えてきました。

役人や、他の教えを信じている人たちは困ったことだと思っていました。

日蓮が「立正安国論」を著し、時の将軍北条時頼に差し出した時のことです。

これは幕府を批判するものであるとしてある日、役人が日蓮の家を取り囲みました。「召し捕りに来た。覚悟しろ。」「うそつきめ。くそ坊主め。」「世の中を乱す悪坊主。」役人たちは、日蓮に飛びかかって縛り上げました。「坊主、さっさと歩け。」役人が、日蓮をこづきながら連れて行きました。そしてついに懲らしめのために伊豆に流罪とされてしまいました。

日蓮はやっと許されて故郷の清澄山に戻り、また説法を始めると、他の宗教を信ずる地頭に襲われて眉間に傷を負わされてしまいました。

日蓮はそれにもめげず各地を巡って説法を続けました。その頃わが国は暴風、地震、飢饉などに見舞われ、蒙古が攻めてきました。それらは皆自分が唱える法華経を信じないからだと言ったのです。懲りない日蓮に幕府はついに日蓮を佐渡へ流罪とし、途中で日蓮を秘かに殺すように命じました。深夜に日蓮がまさに首を切られようとしたその時、海から大きな光の玉が流れて刑場を真昼のように明るく照らしました。刀を振り上げた役人は目がくらみ、他の役人は逃げ出し、刑は中止となりました。

佐渡に流されて3年後許されて鎌倉に帰った日蓮は、再び法華教を説いて幕府に迫りましたが容れられず、身延山で9年間弟子の指導と著述に当たっていましたが、病のため60才でその生涯を閉じました。私にはどの教えが本当に正しいのかは分かりませんが、自分の信ずる教えを命をかけて貫き通した日蓮の生きざまには感服しています。

(注) この紹介文は主として「房総伝記読物シリーズ」及び「貴族・武士の世に活躍した人々」によっています。

3. 義民 佐倉宗吾郎

わが国の義民を代表する者として佐倉宗吾郎は房総だけでなく全国的に知られていますが、本名は木内惣吾郎といい、1612年下総国印旛郡公津村（現成田市台方）に生まれました。

佐倉藩内に住む名主であったことから後世では佐倉惣吾郎とか、佐倉宗吾郎とか、佐倉宗吾と称され混乱しそうですが、この紹介文は宗吾に統一します。

今から350年前、即ち寛永より承応年間に亘り佐倉藩家老（藩主が参勤交代で江戸に出ている間留守を護る家老）による暴政と極度の重税が行われ、このため領民達の苦しみは一通りでなく、他国他領に逃れる者数知れず、路上に餓死する者も現れて、文字通り地獄の様相を呈するに至り、遂に百姓一揆が起こりました。この時割元部落の名主であった宗吾は、この状況を見るに忍びず各名主を糾合し、まず佐倉代官屋敷、あるいは佐倉藩重役に減税をお願いしましたが取り上げられず、それではと大挙して江戸に上がり領主堀田正信公^{かみ}上^{やしき}屋敷の門前でお願いしても役人に追い返されてしまいます。ついに意を決して將軍家側用人久世大和守広之公^{そばようにんくぜやまのかみひろゆき}の駕籠を止めて訴えましたが、願書は7日後に却下となってしまいました。

万策尽きた宗吾は最後の手段として將軍家への直訴を決意いたしました。妻子に罪が及んでは不憫^{ふびん}であると、承応元年12月10日大雪を幸いに江戸表を離れ我が家をめざして帰って参ります。

しかしながら印旛沼の渡し舟は鎖で繋がれ、宗吾への詮議^{せんぎ}は嚴重をきわめております。この時渡し守甚兵衛は、命をかけて舟の鎖を断ち切り、宗吾を妻子の許へ送り届けます。無事妻子との別れを告げた宗吾は、承応元年12月20日、上野東叡山寛永寺へ御参拝の4代將軍徳川家綱公に直訴を決行、願書をお取り上げいただいた結果、佐倉領民はようやくにして塗炭の苦しみから救われる事ができましたが、直訴の罪に問われた宗吾は、佐倉藩に引き渡され、翌年の承

応2年（1653年）旧暦8月3日公津ヶ原刑場において、宗吾は、はりつけ、子供4人は打ち首の惨刑に処せられて、世のため人のために殉じました。

これを知った藩主の堀田氏は、自分の失政を悔い改め、宗吾一家の命を救えなかったことを深く詫びたといわれています。

この刑場跡に埋葬された宗吾父子のお墓には、350余年を経た今日も香華が絶える時がなく、御魂（みたま）を祀る大本堂（10間四面総檜造り大正10年再建）には、大願成就を祈る参詣人が年間250万人を超え、「宗吾霊堂」の名は全国に知られています。

これに類する江戸時代の義人伝は全国各地に残されています。私も昔、ダム建設に伴う周辺地域の開発の仕事で、多くの農村を回りましたが、沼田ダム（日本最大のダムで未実現）のバックウォーターに一部含まれる群馬県月夜野町のラーメン屋に義民「はりつけ茂左右衛門」の絵が飾ってあったのを良く覚えてます。

この尊い宗吾の事蹟を、等身大人形66体13場面に再現した宗吾御一代記館、宗吾の遺品や関係文書、什器、当山の寺宝、宗吾の存在と持高を証明する名寄帳、宗吾と子供4人の法号を記載した過去帳など貴重な品々が展示された霊宝堂は御本堂横にあります。皆さんも機会がありましたら一度「宗吾霊堂」を訪れてみて下さい。そして飽食の時代に生きる私たちの現在の生活から宗吾の時代に思いを馳せてみましょう。寺内の庭園には巨木が繁っており、そこを散策しながら、自分に宗吾のような勇気があるだろうかと考えさせられました。

（注）この紹介文は主として「佐倉惣吾郎」（児玉幸多、吉川弘文館）と同寺のパンフレットによっています。

4. 「見返り美人」の^{え し ひしかわもろのぶ}絵師 菱川師宣

1618年、江戸時代初期に房州保田に生まれた菱川師宣のことを私は中島みゆきの歌に出て来る「見返り美人」の作者位としか知りませんでした。先日千葉県^{きよなん}の鋸南町にある「菱川師宣記念館」を訪れていろいろ勉強してきました。

館内にも「見返り美人」の絵はありましたが、それは模写したもので本物は上野の東京博物館に収蔵されているそうです。「見返り美人」は、昭和23年に戦後第1号の記念切手に採用されました。なお記念館の前庭に立っている「見返り美人」の彫刻は「東京湾観音」などの作者として有名な長谷川昂（のぼる）氏によるもので、私の好みの女優^{まや}真野響子をモデルとして制作したものだそうです。

菱川師宣の父吉左衛門^{ぬいはくし}は縫箔師^{ぬいはくし}といって、金や銀の糸を縫いつけたり箔を貼り付けて絵を作り上げる仕事をしていました。子供の師宣は、いつも父のそばについてその仕事ぶりを見入っていました。父が「どうして近所の子供達と浜辺で遊ばないんだ。」と言うと、師宣は「父ちゃんが金や銀の糸や箔を使って見事な絵を作り上げていくのを見ている方がずっと面白いんだもの。」と答えました。

師宣は子供の頃近くの勝善寺^{おしょう}の和尚さんに学問を教わっていました。師宣の父がそのお礼に和尚さんを訪ねると、和尚さんは「師宣は大変熱心に勉強しており、物覚えがよい、それにお父さんに似てまことに絵がうまい。」と言って1枚の墨絵を差し出しました。それは「おりく、夕涼みの図」という絵で師宣が姉のおりくを描いたものでした。そして和尚は「思い切って師宣を江戸へ絵の勉強に出してみたらどうですか。きっと素晴らしい絵師になりますよ。」と膝を乗り出して勧めるのでした。

父は師宣が幼い頃あまり外に出ず、父親の仕事場にばかりもぐり込んでいた理由がやっと分かったような気がして、妻と相談し、師宣を江戸の有名な下絵

師のところへ弟子入りさせることにしました。師宣16才のことでした。

弟子入りした師宣は、せきを切って流れ出した水のように、眠る時間も惜しんで猛烈な勢いで絵を描き始めました。ところが下絵師の弟子というものはあくまでも先生のお手本の通りに描かなければならなかったのです。師宣は3年もたつと、十分にマスターしてしまい、そういった勉強の仕方には不満を感じ出しました。「生きている絵、血の通っている絵を描くには、やはり本物が手本でなければならない筈だ。」と考えた師宣はやがて師匠のもとを離れました。しかし、当時は師匠の絵そっくりの絵でなければ、誰も買ってくれません。師宣の生活は急に苦しくなりました。「どんなに貧乏しても、おれはおれの絵を描いていくぞ。おれの目玉で見つけた美しさをおれの腕で描いていくのだ。」と自分に言い聞かせて頑張りました。師宣は雀ばかりを半日眺めていたり、馬の歩き方を見るのだと遠くまで馬にくっついて歩いたりしました。

その頃日本一と言われていたのは、狩野派や土佐派の絵でした。これらを師宣は独学で学んでみました。師宣は「これらは確かに素晴らしい。しかしどんなに素晴らしい絵でも、一部の大名や大金持ちの手にしか渡らないのではもったいない。」と思いました。あくまでも庶民派だった師宣は、普通の人の手が届く絵を描くことが目標でした。その姿勢が少しずつ世の人に認められ、師宣の絵も次第に売れ出しました。

師宣26才の時、郷里保田の近くにある無量光寺という大寺院の住職さんが、訪ねてきました。そして「志のある方々が、私の寺に高さ2間、横8尺という壮大な涅槃像を寄進してくれることになったのです。この作品はどうしても菱川先生親子に腕をふるっていただきたく、お願いに上がりました。」と言うのです。師宣はこれは最初の大きなチャンスだと喜び、快く引き受けて、妻を連れて郷里保田へ帰って行きました。

その話を聞いた父も大変喜び、早速仕事に掛かりました。師宣が下絵を描き、父がそれに刺繍するのです。2人の仕事にかける情熱の激しさは、近郷近

在の大変な評判となりました。そして2年の歳月を経て涅槃像は完成しました。人々は「まるで仏様の国に行ったようだ。有難いことだ。」と口々にこの大作の出来映えを褒めそやし、菱川師宣親子の名は房州はもとより、江戸にも知れ渡りました。

師宣の最初の大作「涅槃像」は、千葉県的重要文化財に指定され、無量光寺に残っています。

師宣が次に取り組みたかったのは、現実には生きている人間でした。彼は芝居や遊里の有様など当時の江戸風俗を描いて、民衆芸術としての浮世絵を創始しました。肉筆画としては「見返り美人図」が有名ですが、モデルは妻のおはるであると言われています。日頃から妻の献身的な世話に感謝していた師宣は、美しい妻を何とか、これまで描かれたことのない角度から描いてみたいとずっと思っていました。

ある日連れ立ってお花見に出掛けた折、少し先に行く妻を呼び止めた時、振り返った妻の美しさにはっと息を飲み、これだと決めました。そして1年かけて仕上げたのが「見返り美人図」です。師宣は64才で眠るようにこの世を去りましたが、妻に感謝して生涯の大作「見返り美人図」を描いた絵師としての生きざまは立派だと思いました。

(注) この紹介文は主として「房総伝記読物シリーズ」によっています。

5. 晩年に正確な日本地図を完成させた 伊能忠敬^{ただたか}

現役引退まで

忠敬^{かずさのくに}は上総国（在の千葉県）の九十九里町に1745年に3人兄弟の末っ子として生まれました。忠敬が7才の時母が病気になり、あっという間に亡くなってしまいました。養子だった父は兄と姉の2人を連れて実家に帰ってしまいま

す。幼い忠敬は祖父母のもとに1人置いて行かれます。その間の事情は良く分かっていませんが、網元だった祖父の跡取りとして残されたのでしょう。忠敬は淋しさを紛らすためもあり、村人と一緒にイワシを獲るための地引き網を一生懸命に引きました。

忠敬が11才の時、それまで何の音沙汰もなかった父が突然顔を出し、忠敬を実家へ連れ帰ってしまいます。祖父の家から3里ばかり北にあり、名主をしている立派な家でした。とはいっても後を継いでいるのは父の兄で、父は再婚はしていたものの小さな離れを借りて肩身の狭い生活をしていました。

忠敬の生活は名主の伯父の家の内外を掃除することで、新しい母親にもなじめず、決して楽しいものではありませんでした。ある日名主の土蔵を掃除していて古い算盤を見つけた彼は、伯父に頼んで貰い受け、父に基礎的な使い方を教わると、たちまち父以上の腕前に上達し、単調な生活の中で算盤が唯一の趣味となりました。

忠敬は、数学に優れた人が近隣に居ると聞くと進んで小僧になり、寺や医者の所に住み込んで数学を学びました。

そして18才になると、下総国佐原村（現在の香取市）の伊能家に婿養子となって入籍します。伊能家は代々村の名主として、利根川の支川である小野川のほとりにあり、酒造家であると同時に米、炭、酒などを江戸に運ぶ舟運業を営むかたわら、荒れ地を切り開いて田畑とし農民に分け与えたりして、周辺の農民の尊敬を集めていました。

忠敬の嫁「みち」は4才年上で、前夫を亡くして、次の養子を探していました。伊能家は後を継ぐ男運が悪く、以前程の勢いが無くなっていましたので、忠敬は勢いを回復しようと、朝早くから夜遅くまで身を粉にして働きました。その甲斐あって伊能家の家業は次第に隆盛となっていきました。彼が息子に家業を譲ったのは数えの50才の時ですが、それまでに冷害や浅間山の噴火による火山灰の影響もあって関東地方はしばしば大飢饉ききんに見舞われましたが、忠敬

は貯めたお金やお米を村人たちに分け与え、佐原村からは1人の死者も出さずに乗り切りました。

(注) 伊能家の旧家は伊能忠敬の業績を称える博物館となっており、私の兄の親友がすぐ近くに住んでいる関係もあって何回か訪れたことがあります。私も喜寿を迎え忠敬の「生きざま」に畏怖^{いふ}を感じています。なお平成22年の大地震では小野川沿岸も液状化などのため、大きな被害を受け、忠敬の旧家も屋根瓦などが崩れ、修理中で室内は見学できませんでした。

学問のはじめ

忠敬が勉強に専念したのは彼が51才の時からです。伊能家を次いだ長男の景敬^{かげたか}は「これからは、離れの静かな部屋で、思う存分勉強して下さい。」と言いましたが、忠敬は「江戸には優れた立派な学者がいる。わしはまだ51才になったばかりだ。」と言って1人江戸に旅立ちました。そして現在の門前仲町に家を借り、そこを日本地図作りの本拠地としました。近くに暦局（れききょく）という正しい暦をつくるための幕府の役所がありました。当時の暦は中国の暦をまねたもので、間違いだらけのものでした。西欧の列強に開国を迫られていた日本が文化の面でもこれではいけないと、天文台を備えた施設を作り、民間人からも優秀な人材を登用しました。

忠敬が注目したのは、高橋至時^{よしとき}という大阪で暦学を勉強していた若い学者でした。忠敬は至時を訪ね、丁寧に頭を下げて「弟子にして下さい。」と頼みました。至時は当時32才でしたので、「自分のような若輩があなたの先生になるなんてとんでもない。」と何回も断りましたが、忠敬のあまりの熱心さにほだされて、「一緒に研究するというのなら」という条件付きで受け入れることにしました。

忠敬は至時から暦学を学ぶために自宅から暦局に通うことになりましたが、学

んだことを自分で確かめないと気が済まない忠敬は地球の大きさを自分の足で計測したいと思い、秘かに暦局と自宅の距離を歩測し、北極星の方位の差から、北極から南極までの距離を割り出そうとしました。「秘かに」というのは、当時一民間人がそんなことをすることは、幕府に固く禁じられていたからです。そのことを至時に話すと、「論理的には正しいけれど、地上の2地点の距離があまりにも近すぎてこれでは精度が荒すぎる」と指摘されました。

蝦夷地の測量

1792年（忠敬48才）にロシア皇帝の使節ラックスマンが、日本の漁師で漂流し、ロシアに抑留されていた（エカテリーナ女帝にも面会している）大黒屋を連れて蝦夷地（現在の北海道）にやって来て日本に開港を迫りますが、鎖国中の幕府は大黒屋を入国させてラックスマンを追い返してしまいます。そして蝦夷地の守りを固めようとしませんが、そのためには蝦夷地の海岸がどうなっているかが分からなければ、どこに大砲を備え、どこに武士を配置したら良いかが分かりません。蝦夷地の地図が欲しいと幕府は心の底から思っていました。至時が仲介をしてくれて、1800年に幕府は56才の忠敬に蝦夷地行きを命じます。おかしい話ですが、幕府は自分たちのためなのに費用は殆ど忠敬負担です。忠敬は国の役に立つならと、伊能家で貯えたお金を惜しげもなく出しました。幕府は船で行くことを勧めましたが、忠敬は敢えて陸路を歩測しながら行きました。地球の大きさを推定するという自分の望みを同時に果たしたかったからです。彼に従ったのは助手3人に人夫2人の5人でした。

のんきに景色を見たり、おしゃべりをしたりの旅ではありません。歩測しながらの旅で、道が曲がっていれば小方位盤を使ってどちらにどれだけ曲がっているかを測り、坂道では傾斜用象限儀しょうげんぎを使い、夜は宿で天体用象限儀で星の高さを測り、その地点の緯度を帳面に書き記していくことの繰り返しです。し

かも蝦夷地が雪に埋もれば観測が出来なくなってしまうので、1日に10～13里（1里は約4km）の旅で、まさに超人的な速さです。

やっと函館まで行ってこれから蝦夷地の本格的測量が始まるという時、人夫の1人がもう歩けないと言って脱落してしまいました。仕方なく忠敬は重い大方位盤を函館に置いていかなければなりませんでした。そのために地図作りの効率が大幅落ちてしまいました。蝦夷地はまだ道が十分整備されておらず、案内を頼んだアイヌ人もしばしば迷子になりました。そして霜が下りる鮭の産卵期になると鮭漁で忙しく、案内のアイヌ人も雇えなくなり、ひとまず函館に戻ることにしました。

函館で忠敬は幸運にも蝦夷地の測量を引き継いでくれる間宮林蔵^{まみやりんぞう}に巡り会えました。林蔵は忠敬の弟子になり、測量の術を学びました。林蔵はサハリン^{からふと}（樺太）にも渡り、樺太が島で、アジア大陸との間には海峡（現在は間宮海峡と呼ばれている）があることを発見した人です。忠敬は林蔵のお陰で日本全土を隈無く測量することに専念することが出来たのです。忠敬が江戸の自宅に帰ったのは180日振りでした。

日本全図の作成

忠敬は間宮林蔵に蝦夷地以北の測量を分担してもらい、青森以南の日本全国を測量して回り、地図が出来上がった順に幕府に提出し、次第に高い評価を受けようになります。その証拠に幕府は忠敬を役人に取り立て、手当も増やしてくれ、帯刀を許されました。

忠敬が最も喜んだのは、地図づくりのかたわら秘かに地球の大きさを推定する基礎となる子午線1度の長さが、彼の推定通りだったことです。至時が入手したオランダの最新の暦学書にそのことが記述されていたのです。至時と忠敬は固く手を握り合って子弟そろって喜び合いました。

忠敬が最も悲しかったのは、彼の若い師（至時）が忠敬60才の時亡くなったことです。忠敬は自分が死んだら、至時の墓の隣に葬ってくれるように頼みました。彼が74才で亡くなった時、希望通り浅草源空寺げんくうじにある至時の墓の隣に葬られました。幸いだったのは、忠敬が亡くなった年に日本全図が完成し、それを確認できたことです。

忠敬が測量のために歩いた距離は約8,800里（35,200km）で、地球を約1回りしたことになります。至時の後を継いだ息子の高橋景保かげやすは忠敬が病床に伏して地図づくりの陣頭に立てなくなった時に、代わりに指揮をとってくれたのですが、オランダ商館付きの医師として来日していた医師シーボルトが忠敬の日本地図を幕府の禁を破って国外に持ち出そうとした事件がありました。景保はあまりシーボルトがほめるので、ついうっかり1部写しをあげてしまいました。景保はその罪で捕らえられ、獄中で死亡してしまいました。忠敬の死後のことですが、その地図は列強各国がそれほど欲しがるレベルのものだったということです。

（注）この紹介文は、主として「房総伝記読物シリーズ」によっています。

6. 南総里見八犬伝を著した 滝沢馬琴

江戸時代の後期1767年に、馬琴ばきんは武士の子として江戸深川に生まれました。父興義は小禄ではありましたが、馬琴兄弟が武士の子として育つのに支障をきたすということはなく、武士的厳しい教育を受けました。母は臨終に際して、「兄たちは素直で良い子だが、馬琴だけはしぶとく強情で兄を兄とも思わぬ所がある。これからは兄弟仲良く過ごすように。」とねんごろに教訓したと後年馬琴自身が述べています。馬琴はかなり腕白児でしたが、文字は早くから覚え、そうし双紙などを読み、近所では神童といわれていたようです。

馬琴が9才の時、父が深酒がもとで早死たちまにしてしまうと、滝沢家は忽ちに

ひきょうおちい
悲境に陥りました。兄が家督を相続しましたが、^{きゅうろく}給禄は大幅に減らされ、家も
取り上げられました。兄はたまらず^{しゅけ}主家の松平家を去ってしまいます。その後
を馬琴が継ぐことになりますが、役目は低能な若息子のお相手という退屈な仕
事です。一人ぼっちで残された馬琴は仕事の合間に^{じょうりり}浄瑠璃や^{くさそうし}草双紙などを読み
ふけり、好きな^{はいかい}俳諧の道にも時々手を染めていました。

そして、馬鹿な若様の相手をして、一人前の武士に取り立てられるのを待つ
くらいなら、自由な境涯を求めて市中をさまよう方がましだと、荷物をまとめ
て松平家を出てしまいます。心配した兄が、引き取って馬琴の生活を見てくれ
ますが、我が儘な馬琴はそこでの生活も満足いかず、18才で飛び出してしま
います。

馬琴は武士・医者・儒者・狂歌師・俳諧師と職を求めてさんざん迷いまし
たが、いずれもうまくいきませんでした。彼が21才の時、「俳諧古文庫」を
^{へんさん}編纂しますが、この書は彼の著述生活の出発点をなすものです。彼の財産とい
えば、あちこちさ迷い歩いた間に蓄積した雑多な知識だけでした。彼はこれ
を生かして身を立てる他にないと意を決し、24才の時、酒一樽を持って当時
^{ぎさく}戯作者の第一人者として知られていた^{さんとうきょうでん}山東京伝を訪れました。

京伝は、「戯作というものは、他に安定した仕事がある者が慰み半分に行
うものだ。普通の学問とは違って教えようと思っても教えられるものではな
い」と言って弟子入りは断りましたが、あまりにも熱心な馬琴に心を動かされ、
「弟子にはできないが、書いたものは見てあげよう」と言いました。馬琴は弟
子入りはならなかったものの、京伝の知遇を得たことによって、その名声を背
景に何か大きなことが出来そうな気がしてきました。

その後京伝の紹介を受けて馬琴はいくつかの戯曲を^{つたや}蔦屋で印刷しますが、そ
れらを執筆中馬琴は^{てだい}手代としての職を得て蔦屋に住み込みます。一方の京伝の
方は、3つの戯曲が今日でいうわいせつ罪に当たるとされて幕府の厳しい取り
調べを受けます。それ以降小心な京伝は謹慎し洒落本の筆を折りました。

馬琴は生来の我が儘から蔦屋の手代としては勤まらず、戯作も出来る婿入り先を探していましたが、江戸の飯田町にある下駄屋が入り婿を求めているというので、27才の時生活のために望まぬ結婚をしました。下駄屋の娘は馬琴より3つも年上で再婚であるし、学問もなく頭痛持ちで愚痴っぽく容貌も優れず、しかも下駄屋の旦那になるということも気が進みませんでした。しかし馬琴はそこに30年以上もすんで著作に励みました。その時に書いた戯作に有名な「椿説弓張月」^{ちんせつゆみはりづき}があります。29才の時、下駄屋は馬琴のプライドが許さなかったのか、近所の子供たちを集めて手習いの師匠を始めます。

58才の時に馬琴は飯田町を去って、神田明神下に移り、そこで70才まで12年間住んでいましたが、著述に最も脂ののった頃でいわば全盛時代であったといえます。

馬琴は68才で右眼を失明し、著述はかなり不自由になっていましたが、それを助けたのが唯1人の男の子宗伯^{そうはく}で「南総里見八犬伝」の原稿の校正をしてくれていました。宗伯は医者でしたが、自身病弱で他人の病気の治療をして一家を支えるなどとてもできる状態ではありませんでした。家計を支えたのは殆ど馬琴の筆料でした。それでも38才の若さで先立ってしまったことは、馬琴にとって大きなショックを与えずにはおきませんでした。馬琴はしばらくは筆を執る気にもなれませんでした。一家の生活のためには書き続けるしかありませんでした。一家とは自分の妻と息子の嫁、そして9才の孫、太郎です。

馬琴は太郎の将来のため自宅を売り、四谷信濃町に転居します。「南総里見八犬伝」が未完であったため、それを仕上げるためもあって、大切にしてきた蔵書も何回かに分けて売りさばきました。

馬琴74才の時、ついに両眼とも失明してしまい1字も書けなくなりましたが、「八犬伝」はまだ未完でした。終局が近づいているのに、始めがあって終わりが無いのは何としても物足りない。それで馬琴は息子の嫁おみちの手を借りて完成を目指しました。つまり口述筆記です。そのために大変な苦勞をして、お

みちに字を教えました。

このようにして「八犬伝」は馬琴75才にしてようやく完成し、1848年82才にして多難な人生を閉じました。「八犬伝」は、中国の「水滸伝」にも劣らぬ大作で馬琴の代表作ですが、その陰におみちという女性の血の滲むような努力がありました。また馬琴は自分の筆力だけを頼りに長い生涯を生き抜いた、我が国最初の人でもありました。

先日家内と「南総里見八犬伝」の舞台となった館山城に行ってきました。館山城は現在「八犬伝」の博物館になっており、多くの人で賑わっていました。

「八犬伝」の物語はテレビで観ており、また家内の朗読の先生の主な演目にもなっているので多少なじみはありましたが、馬琴がその執筆に28年も精魂を傾けて我が国の伝奇小説の最高水準をいく作品を完成させたことを知り、私は馬琴に対して尊敬の気持ちを新たにしました。

7. 農民を救った 大原^{ゆうがく}幽学

江戸時代末期、千葉県^{ききん}の東部は大変な大飢饉に見舞われ、長部村（現旭市）も農民の離村、退廃に悩まされていました。^{なぬし}名主遠藤良左衛門に招かれた大原幽学は、生活の仕方、稲作の方法から始まり、先祖株組合を通じ耕地の交換^{ぶんごう}分合などを指導し、村のよみがえりを実現しましたが、自らは、農民を^{まど}惑わした罪で役人に逮捕され、代官に6年にもわたって取り調べを受け、身も心も疲れ果て、農民たちに、「多くの迷惑を掛けて済まなかった」と書き残し、自らの命を絶ちました。

大原幽学といわれても知らない人が多いかも知れませんが、二宮尊徳に匹敵するような農村の改革者で、旭市には農協が運営する記念館が残っています。私たちが行った時には、館長が丁寧に説明してくれました。最後に自害という形で果てたのは、武家出身であるということも関係があるのではないかと館長

は言っていました。

記念館の前は、大型トラクターでも使えるような大きな区画の田んぼになっていて、大原幽学の名残なごりが残っています。そこに居合わせた農家の人が水田で国の重要文化財に指定されているのは、全国でここだけだと言っていました。

若い頃の大原幽学

大原幽学は1797年、尾張藩の武士の家に生まれ、一通り武士としての教育を受けましたが、何故か18才で家を出なければならないこと（一説には、果たし合いで人を殺してしまったといわれます）になってしまいます。それから彼の放浪の人生が始まります。しかし彼はこの幼い頃の武士の心を最後まで忘れることはありませんでした。

家を出てから30才近くまで、京都、大阪を中心とする近畿地方を渡り歩く生活をしています。そしてこの期間に多くの学問を学ぶのですが、それ以上に多くの人々との出会いと体験が後の幽学の指導者としての才能を開花させることにもなります。商家からは経営、経済を、農家からは農業技術を学びました。この言い伝えにより、名古屋にも幽学の墓こんりゅうが建立されて居り、生家といわれる大道寺家屋敷跡には看板があります。

そんな生活にも転機がやって来ます。それは滋賀県坂田郡伊吹村にある松尾寺の1人の住職ていそうおしょう、提宗和尚との出会いからでした。

松尾寺には幽学は人生のうち2度訪れて滞在しています。

最初は25才から約2年間、この時には提宗から易学などを学んでいます。

幽学は提宗和尚の人柄を大変尊敬していたようです。33才になって2度目の滞在の時のことを幽学は日記に書き留めています。幽学が各地を回りながら先生の教えを役立てていますと提宗和尚に報告したら、和尚は喜びのあまり、涙を流してこう言ったといひます。

「自分のように隠者いんじゃとなることなく、世に道を伝えていったら良いだろう。」

この言葉を受けて、幽学は次のように決意します。

「そうだ、師の志を尊重して、その志を自分が世に広めていこう。」

幽学はこの時生涯の目標を見つけたのです。

松尾寺は今も残って居り、幽学の記念碑きねんひが残っています。

これを機にして幽学は各地で人を集めては指導を始めることになります。指導を行った最初の地は信州、上田・小諸の地で、ここでははじめて幽学に入門する人々が沢山現れました。と同時に幽学自らの教えが確立され、この時期から自分の学問を「性学」と呼ぶようになります。

この初めての経験を経て、その後は江戸、鎌倉をまわり、船で房総に辿りつきます。1831年、35才のことです。以後、この房総での活躍が、幽学と長部村（現在の旭市で、今回の大地震による津波でも千葉県内では一番大きな被害を受けた）を結びつけることになるのです。

北総の農村改革に本腰を入れてから

大原幽学が長部村等北総の村々の改革を始めたのは、1831年幽学35才の時からです。その頃すでに幽学は立派な学者として知られていました。幽学は村にある正賢寺を使って村人を対象とする学校を始めました。はじめは僅かな人数しか集まりませんでした。4年後には老若男女合わせて70人が昼間の百姓仕事の疲れにもかかわらず、毎日勉強に来るようになりました。人々が村の飢饉を救って下さるのは幽学先生以外にないと信頼したからです。そして幽学の指導により、長部村の農民生活は次第に改善していきました。

しかし全国的にはまだまだ飢饉はひどいもので、各地で農民一揆が起きました。二宮尊徳が活躍したのもこの頃のことです。また1837年には大学者大

塩平八郎が大阪一帯の町人百姓の飢えの苦しみを見過ごせず、自らそれらの人々を率いて大阪の豪商を襲って奪った米や金を貧民たちに分け与えるという大事件を引き起こしました。

そして幽学は考えました。農村を子々孫々まで安定させるためには今までのやり方では不十分で、全く新しい方法を導入しなければならない。そこで考えついたのが、今でいう一種の保険のようなもので、苦しい中から各農家が分ぶんに応じて一定の面積を出し合い、それを共同の管理として益金を毎年積み立てていき、ある程度貯まったらそれを使って借金のためにやむを得ず手放してしまった農地を買い戻し、もとの持ち主に返してやるというものです。これは要するに先祖伝来の農地を自分たちの力で守り抜こうとするものだから、先祖株組合と名付けようと農民たちに説くと、皆大きくなずき、反対する者はいませんでした。

こうして1838年長部村に先祖株組合が結成されました。これは、ドイツに世界で初めて生まれた製パン業組合に先立つこと実に11年のことでした。

しかし、幽学にとってこれは農村改革のほんの一部にすぎませんでした。

長部村の農家の農地は小さく分断されていて、農民が作業するのに大変な不効率が生じていました。またちょっと渇水になると、農民同士の血を見るような水争いが頻発していました。この二つを一挙に解決する方法は今日でいう耕地整理しかありません。つまり、農地を交換分合し、大きくまとめて自宅の近くに四角く区割りして整備し、水路を広くして水門を設け、ある程度の貯水と公平な分水ができるようにすることです。

農民同士の利害の調整という難しい難事業を幽学は名主遠藤良左衛門や正賢寺の和尚などの協力も得て立派に成し遂げたのでした。時に幽学45才、押しも押されもせぬ堂々たる農村指導者でした。

こうして平安のうちに10年が過ぎていきました。ところが1852年幽学が54才の時、役人が幽学を捕らえに来ました。幽学の教えが人々の心を不当に惑わ

したという理由でした。驚いた門人たちは、幽学の正しさを文書にして役人に提出し、子供たちまで小銭を貯めては幽学のもとに届けました。にもかかわらず幽学は6年にもわたって厳しい取り調べを受け、無実が証明された時は身も心も疲労困憊^{こんぱい}に達していたのか、獄中で自らの生命を絶ちました。その理由は未だに謎です。

(注) この紹介文は主として下記の2書によっています。

- ①「大原幽学物語」（千葉東総物語）鈴木映里子
- ②「大原幽学」（房総伝記読物シリーズ）千葉県学校教育研究会編

8. 日本洋画の先駆者 浅井 忠

私が浅井忠をここで取り上げる気になったのは、ミレーのように働く農民の様子を数多く描いた彼の絵が好きなのと、千葉県佐倉市の出身ということもあるのでしょう。彼が絵を描いている姿の大きな銅像のある千葉県立美術館正面入口や、佐倉市の美術館では浅井忠の回顧展をやったり、常設展示をしているので、私には馴染みの作家の一人となっています。

彼は、江戸時代の末期、アメリカのペリーが黒船で来港した年（1856年）に佐倉藩の江戸屋敷に武士の子として生まれました。7才の時父が亡くなり、母と2人の弟と共に郷里の佐倉に戻されます。彼は幼くして戸主の役割を担うことになり、早く立派な人間になって一家を支えなければと寝る間も惜しんで文武両道に励みました。

小学校を卒業すると、すぐに母校の代用教員として働き出します。自宅と学校の往復で見た田園の風景が記憶に残っていて、後に画家になった時のモチーフとして取り上げられたものと思われます。

世の中は江戸から明治に変わり、20才の時東京にある国立の工部美術学校（後の東京芸大）に入学します。当時優秀な人は皆政治家や役人を目指して勉

強していた時代なのに浅井忠が一格下と位置づけられ、ある意味でいやしい仕事と見なされがち画家を目指した理由は定かではありませんが、彼の決意は固く生涯変わりませんでした。

彼の入学当時、西洋風の美術をきちんと教えられる教師は日本にはいなかった。浅井忠が学んだ教師はイタリアから招かれたフォンタネージュでした。彼はフランスでミレーに代表されるバルビゾン派で学んだ人で、農村風景を得意としていました。人格者でもあり、生徒たちからも尊敬されていました。彼はあくまでも現場主義で、生徒たちにも写生を奨励していました。

浅井忠が仲間と一緒に写生に行った時のことを仲間はこう言っています。「浅井は写生中さぼっていてなかなか絵筆を執ろうとしません。皆が帰ろうとする頃になってさっと描き上げてしまうのに、フォンタネージュから一番ほめられるのはいつも浅井だった。」

私は本格的に絵を勉強したことはありませんが、大学時代写真部にしばらく在籍していて、何よりも構図が重要だということは先輩から叩き込まれました。恐らく浅井忠は現場では構図を考えるのに殆どの時間を使い、さっとスケッチだけをし、アトリエに帰って仕上げていたのだらうと想像します。そう言えばアートサロンが大切にしている作家に大森運夫^{かずお}先生という日本画の大家がいますが、先生が「現場でのスケッチには時間的制約もあって、切迫感というリアリティが感じられるが、アトリエでゆっくり本画として仕上げていくと、いつの間にかそれが薄れてしまう。」と言っていたことを思い出しました。

私も分野は異なりますが、コンサルタントという商売を長年やってきた経験から、最初の構想、発想というものの重みを身をもって感じている一人です。そこからすると、画家が勝手に自分の絵は号いくらだと値をつけて絵の大きさに価格を比例させて売買する日本の商慣習がいかに不合理なものかが分かるでしょう。アートサロンを始めた頃、作家のアトリエに行って、気に入った大きな絵を欲しいと言った時、「自分の絵は号いくらで、この絵は100号だからい

くらだ」と法外な値を言われ、新参者である当方としては値切る訳にもいかず、やむなく支払ってしまったことが何回かありましたが、小さい絵でも大きな絵でも構図を決める労力、能力は共通な筈だと今では自信を持って主張できるようになりました。

ちょっと横道にそれましたが、浅井忠は尊敬するフォンタネージュ先生が^{かけ}脚気の治療のためイタリアに帰ることになった時、油絵の具一式をもらっています。後任としてきた先生は生徒たちの人気がなく、浅井忠は何人かの生徒たちと工部美術学校を退学してしまいました。そして、東京師範学校の教師となったり、全国の師範学校の美術のテキストを書いたりして生活の糧^{かて}としていました。

1889年に国は工部美術学校を閉じて東京美術学校をつくりましたが、1898年に同校は浅井忠を西洋画の教授として迎え入れます。その前に浅井は仲間と明治美術会という日本で最初の西洋画の団体をつくり、毎年展覧会を開催し、また日清戦争の従軍画家として戦地に行きデッサン力を磨いています。

浅井忠は東京美術学校に命じられて、1900年から2年間フランスに留学します。フランスでは恩師の学んだバルビゾンにも近いグレーという村が大変気に入って何回も訪れて何枚も写生しています。パリでは万国博覧会が開かれていて、日本から出展されていた陶磁器や織物、染め物などが西洋人の間で大変人気のあることを知り、デザイン、図案にも興味を持つようになりました。日本に帰ると留学費を出してくれた東京美術学校には戻らずに新しく開校する京都工芸学校の教授として京都に行ってしまう。そこではアール・ヌーボー風のデザインを教えたのですが、決して絵をおろそかにしたわけではありません。自分の家の一部を使って^{しょうごいん}聖護院洋画研究所（後の関西美術院）を開設し、多くの西洋画の弟子を養成しました。

その弟子の中に梅原龍三郎、安井曾太郎という二人の優れた若者が含まれていて、浅井忠の後の日本洋画界を牽引してくれたのですから、浅井忠は立派に

日本における西洋画の先駆者の役割を果たしたとあって良いでしょう。しかし、浅井忠の画家としての魂というか精神が、現代の画家からほとんど消えてしまっていることを残念に思うのは、私だけではないでしょう。

彼は52才の若さで病気で亡くなりました。代表作には「春畝^{しゅんぼ}」、「収穫」、「花園口上陸図」、「グレーの秋」、「武士の山狩」などがあります。

9. 女子高等教育の創始者 津田梅子

津田梅子は1864年、佐倉藩の家来であった津田仙の次女として生まれました。父は若い頃からオランダ語や英語を学んでおり、梅子2才の時にはアメリカも視察しています。そこで梅子の父は男の人と女の人が平等に暮らしているばかりか、女の人がむしろ先頭に立って働いているのを見てびっくりしてしまいました。そして日本でも女の人が立派になって、社会のために尽くすようにならないと考えました。

梅子は7才で渡米し、11年間もアメリカで勉強しているのですが、その背景には父の以上のような進んだ考え方があったのです。

アメリカまでの船の旅は23日間もかかり、梅子は船酔いで大変苦労しました。ワシントンに着くとランメン家に引き取られ、わが子のように大切に育てられます。最初の頃は、食べる物、着る物、生活習慣など何もかも日本とは大違いなのですから、7才の子供がとまどうのは当たり前ですが、何よりも困ったのは言葉が全く通じないことでした。しかしそこは子供だけが持つ学習力です。身振り手振りから始めて1つずつ単語を覚えていき、不自由なく日常会話ができるようになり、アメリカの小学校へ1人で通えるようになりました。

梅子はホームシックにかかりながらも、父母の期待を裏切るまいと必死で頑張りました。

その頃ランメン夫人が梅子の母に送った手紙には「引き取った頃は、こんな

人形のような子供ではどうなることかしらと心配したのですが、最近では梅子にはアメリカ人の友達が沢山できました。勉強は大好きですし、勉強したことを忘れることもほとんどありません。それに覚えることがとても早く、いつでも自分から進んで勉強するので感心しています。」とありました。

11年間のアメリカでの勉強を終わって日本に帰ってくると、日本はめざましく変わっていました。

郵便、鉄道、新聞など、アメリカにあった物が、東京でもたくさん見られました。

けれども、その中で1つだけ変わっていないことがありました。それは、女の人への地位が低いということでした。男の人がいつでも上に立ち、女の人はいやでも男の人に従っているのです。

梅子は、「これこそが、一番大切なことだ。これを解決することが、私をアメリカにやって下さったお父さんやお母さんに恩返しすることだ。」と考えました。

この頃、日本には、男子のための学校はたくさん出来、その教えもだんだん進んできていました。けれども、女の人が自由に勉強できる学校は、ひとつもありませんでした。梅子は華族女学校教授補として英語教師をしている間に女子教育視察のために2回再留学しています。

その後、梅子は、特に英語をはじめとする外国の進んだ文化を学べる女の人のための学校を作ることと考え、明治33年（1900）、「女子英学塾」という学校を開きました。

最初は、わずか10人の生徒でした。梅子は、入学式の時、こう話しました。

「この学校は、ごらんのように、部屋も2つしかない小さいものです。しかし、ここは、これからの日本になくはならない女の人を育てるのです。日本の女の人への地位を高めるための学校です。」

この梅子の話の中には、明るい未来の日本を夢見た新しい考えや希望が一杯

に込められていたのです。

梅子は、この言葉の通り、その後17年の間、日本の女の人の教育のために尽くしました。

大正6年、梅子は、重い病気にかかったために塾長を他の人に譲り、病院のベッドで生活するようになりました。そして12年後の昭和4年8月16日、たくさんの人々に惜しまれて亡くなりました。

津田梅子の開いた「女子英学塾」は、今では「津田塾大学」となって、優れた女の人たちを育て続けています。

最後に筆者の恥ずかしい思い出を書かせていただきます。津田塾大学は私の母校である一橋大学のすぐ近くにあったので、仲良くなる機会も多かったのですが、その中の1人と結婚する気もないのについずるとお付き合いを続けてしまい、ついに彼女を自殺未遂にまで追い込んでしまいました。若気の至りとはいえ、男女関係の難しさを知らされた苦い経験でした。

(注) この紹介文は主として「房総伝記読物シリーズ」によっています。

10. 牛乳屋と歌人・小説家を両立させた 伊藤左千夫

先日、「房総ゆかりの人々」の1人として選んだ伊藤左千夫に関して取材するため、山武市歴史民族資料館に行ってきました。同資料館はコンクリートの比較的新しい2階建ての建物で、その2階が伊藤左千夫の常設展示室となっていて、伊藤左千夫の生涯を紹介しており、彼の作品、遺品、同人たちとの関わりを示す資料等を展示しています。

私たちが訪れた時は、中年男性の学芸員が、自分は考古学の方が専門で文学の方は詳しくないと言いながらも親切に館内を案内してくれました。同じ敷地内に、左千夫の生家と茶室が保存されており、また資料館前の野菊路を300メートル行くと、伊藤左千夫記念公園があります。

私は伊藤左千夫について名前位しか知らなかったのですが、家内は山口百恵と三浦友和が主演した「野菊の墓」（伊藤左千夫原作）という映画を観ていて多少の知識があったので助かりました。

伊藤左千夫は1864年に現在の山武市殿台に伊藤良作の4男として生まれました。故郷で少年時代を過ごした後、大政治家になることを夢見て法律を学ぶために、東京にある明治法律学校に入りました。1人で下宿し小さな字の六法全書を勉強していたところ、突然激しい眼の痛みで襲われ、翌日を待って眼医者に行ったところ、「このままでは失明する可能性があり、今のところ確実な治療方法はない。薬を飲めば回復する可能性があるが、当分本は読まない方がよい。」という厳しい診断でした。

お先真っ暗となった左千夫は、明治法律学校を中退して帰郷しました。彼が16才の時でした。家族は失意の彼を温かく迎えてくれました。特に母は「よく帰ってきてくれた。ゆっくりと休めば必ず良くなるよ。」と励ましてくれました。このような家族に囲まれて、左千夫の眼は奇跡的に回復していき、度の強い眼鏡さえかければ多少不自由でも普通の生活ができるようになりました。左千夫は80kg、180cmという堂々たる体格で、農作業にしても誰にも引けをとらない働きをしました。夜は好きな読書もできるようになり、2～3年もするとまたも上京したいという夢が膨らんでいきました。

そんな時左千夫の家ではとんでもない事件が発生しました。次男（左千夫の兄）が大きな借金を残したまま、突然行方をくらましてしまったのです。その借金は両親が寝ずに働いても返せる額ではないのです。左千夫は、両親の窮状を見かねて、自分が上京して稼ぎ、借金返済の一助となることを決意します。左千夫は、神田の牛乳屋に住み込んで働くことになりました。その頃の牛乳屋というのは、十数頭の乳牛を飼ってその乳をしぼり、それをお得意様に配達してお金を貰うものです。早朝の2時から夜の9時まで働きずくめという重労働でしたが、それだけに収入も良く、毎月一定額生家に送金をする一方、将来自

分が独立するための資金もこつこつと貯金していきました。

生家の借金も返済し終わって、26才の時待望の自営の牛乳屋を持つことができました。それを契機に母を呼び寄せ、郷里に近い横芝町から妻をもらって次々と子どもが生まれ、伊藤家は次第に賑やかになっていきました。牛乳屋の方も順調に拡大し、生活は安定しました。余裕のできた左千夫は、同じ牛乳屋で大先輩の伊藤並根^{なみね}から茶の湯と短歌の手ほどきを受けます。左千夫の熱心さと才能を認めた並根は左千夫を桐の舎桂子^{きりのやかつらこ}に紹介します。左千夫は熱心に勉強し、桂子にも可愛がられて頭角を表していきます。

当時の大新聞「日本」では、「新自賛歌」と称して読者の短歌を連載していました。それを讀んだ左千夫が「こんなものちっとも立派な短歌とはいえない」と批判する論文を新聞に投稿しました。それが、紙上で選者との1ヶ月にもわたる論争に発展し、既に並ぶ者のない大歌人として有名だった正岡子規の目に留まり、無名の左千夫の存在が子規の記憶に残りました。

1年後の元旦に「日本」紙に秀作として左千夫の短歌が3首も選ばれており、その選者が正岡子規だというので、すっかり感動してしまった左千夫は翌日単身子規の家を訪れ、子規の人柄に直接触れてますます感銘を受け、即刻入門します。左千夫は先生の子規をはじめ高浜虚子ら高名な門人たちよりも高齢でしたが、そんなことは気にせず、田舎者丸出しのまま、いつも一番前に座って熱心に勉強しました。子規もそういう左千夫を好ましく思い目をかけて指導してくれました。

しかし運命はいつの世でも皮肉なもので、子規の胸の病はこの頃から急激に悪化し、子規は多くの門人たちに惜しまれながら35才の若さでこの世を去りました。

子規の死後、門人たちは火が消えたようになりましたが、左千夫は師の教えを引き継ごうと自ら中心となって歌誌「馬酔木^{あしび}」を創刊しました。そのためには牛乳屋の利益を惜しげもなく注ぎ込みました。また歌誌に載せる短歌を作る

ために全国を歩いています。同時に万葉集など古典の研究にも力を入れ、その研究成果を発表しています。

さらに左千夫は、自分の幼い頃の回想をもとにして小説「野菊の墓」を雑誌「ホトトギス」に連載し、夏目漱石の絶賛を博しました。

歌誌「馬酔木」は32号までで廃刊となりますが、その後を「アララギ」が引き継ぎ、彼が49才で脳溢血により亡くなるまで続けました。

学歴もなく、格別の財産もなくただひたむきな努力によって日本屈指の歌人、小説家となった伊藤左千夫の人生は必ずしも順風満帆^{まんぼん}ではありませんでした。彼は13人もの父親となりましたが、元気で育ったのは僅かに2人だけでした。幼い命を亡くす度に彼は大きな身体をゆすって泣きました。さらに左千夫の牧舎は3度も大きな水害を受け、乳牛も家屋も大きな被害を被りました。そういう不幸にもめげず常に前向きな姿勢を崩さなかった左千夫の生きざまに私は大きな感銘を受けました。

(注) この紹介文は、主として「房総伝記読物シリーズ」によっています。

11. 戦争を終結させた総理大臣 鈴木貫太郎

鈴木貫太郎は1867年に、関宿藩の武士だった父の仕事の関係で藩の領地があった今の大阪府堺市で生まれ、5才の時郷里の関宿に帰りました。

海軍兵学校を卒業した鈴木貫太郎は、日清・日露戦争でも活躍して、1917年には海軍中将に昇進し、練習艦隊司令官に任じられました。彼が50才の時です。翌年練習艦隊はサンフランシスコを訪問しました。

サンフランシスコ市長から招待された歓迎会のことです。会場には市民代表や日本人代表があふれる程に詰めかけていました。市長の挨拶の後で鈴木司令官はにこやかに話し始めました。以下にそのハイライトの部分を収録いたします。

「最近、日本人は戦争を好む国民であるかのように宣伝している者がおりますが、それは日本人及び日本の歴史を全然知らない者の言うことでもあります。日本人ほど平和を愛好する国民は少ないのではないかと思います。古くは元との戦い、近くは日清・日露の戦いがありますが、これらは全て国を護るためのやむを得ざる戦いでもあります。不幸なことに最近アメリカでも日本でも日米戦争という言葉が聞かれますが、アメリカと日本は絶対に戦ってはならないのであります。

かりに日本の艦隊が破れたとしても、日本国民は最後の1人まで戦うことになり、アメリカ兵も大きな犠牲を払うことになるでしょうし、占領しても狭い日本は、アメリカにとってカリフォルニア州だけの値打ちがあるかどうかも疑問であります。またかりに日本の艦隊が勝ったとしても、ロッキー山脈を越えて進軍することはとてもできないでしょう。これでは互いに人の命や物資を失うだけで何の得るところもないのであります。

太平洋はその名の通り平和の海でなければならないのです。」

会場には割れんばかりの拍手が湧き起こりました。これが現役の軍人の話ですからなおさらです。サンフランシスコの日本領事は涙を流して喜びましたし、カリフォルニア州の検事総長は、新聞1ページを使って「鈴木司令官の意見には全面的に賛成だ」という論文を発表し、それを持って鈴木司令官の乗っている船まで挨拶に来てくれました。

1924年には鈴木貫太郎は、海軍軍人としては最高の誉である連合艦隊司令長官に任じられ、海軍大将となりました。1929年まで勤めた鈴木貫太郎は停年となり、退官して宮廷に入り侍従長に任命されました。その時に大変な事件に巻き込まれました。世に言う2・26事件です。この頃陸軍部内には対立があり、若手将校が中心となって計画していたのが岡田首相や高橋蔵相などの主な閣僚と宮中関係者として斉藤内大臣、鈴木侍従長らを殺害して一挙に自分たちの望む軍事内閣を実現しようとするものです。

1936年2月26日の午前4時頃、土足のまま上がって来た2～30人の兵隊たちに取り囲まれた鈴木侍従長は寝巻の襟を合わせながら落ち着き払って問いかけました。

「まあ、静かにしなさい。こういうことをするからには何か理由があるだろうから、まずそれを聞かせてくれないか。」相手は緊張に身を震わせるだけで誰も何とも答えません。3回同じ質問が繰り返された後、下士官らしい兵士が「もう時間がありませんから撃ちます。」と言ってピストルを向けて、2メートルの距離から4発発射しました。頭と肩に命中し、鈴木侍従長はどっと倒れ、あたりは一面血の海となりましたが、気丈な妻たかは兵隊たちが引き上げると同時に応急の血止めをし、侍医に連絡しました。

侍医は鈴木侍従長を直ちに日本医大に運び込み、リンゲル注射や輸血などで、鈴木侍従長の命は奇跡的に助かりました。鈴木貫太郎は侍従長を辞任し、静養生活に入りますが、日本の情勢は再び鈴木貫太郎の登場を必要とする事態に立ち至っていました。

1945年4月、第2次大戦中最後の首相として鈴木貫太郎が指名されます。1945年（昭和20年）8月9日深夜12時近く、皇居内の地下10メートルの防空壕で、日本国の運命を決定する最高戦争指導会議が開かれました。鈴木首相以下全員の顔には、連日の会議の疲れがありありと現れ、重苦しい空気が会議場を包んでいます。

最初に指名された東郷外相は、日本軍の最後の砦である沖縄が陥落し、広島、長崎には原子爆弾が落とされ、加えてソ連が参戦してきたことなどを詳しく述べ、このような情勢の中で日本を破滅から救うには、ポツダム宣言を受け入れて無条件降伏する以外にないと結びました。

これに対し阿南陸相は、「米軍を待ち受けて本土決戦に持ち込むのが、最善の方法である。1億国民が命を捨てて戦えば必ず道は開ける。」と痛烈な口調で戦争続行を主張しました。賛否の意見は対立したまま、午前2時を過ぎてし

まいりました。その時鈴木首相は、「事態は一刻の猶予もできません。まことに恐れ多いことですが、ここで天皇陛下の^{おぼ}思しめしをお伺いして、それを本会議の決定とさせていただきます。」と述べて、静かに天皇の前に歩を運びました。天皇は、自分の考えは外相と同じである。今は1人でも多くの日本人が生き残って国を建て直すことが重要であり、自分はどうなっても構わないという趣旨のことを述べられました。このようにして日本は破滅から救われたのです。侍従長時代から昭和天皇のお考えを良く知っていた鈴木貫太郎だからできた決断だと思います。

鈴木貫太郎はこの3年後81才で波乱に富んだ人生を閉じました。

(注) この紹介文は主として「房総伝記読物シリーズ」によっています。

12. マルチタレント 武者小路実篤

武者小路実篤といえば、彼自身の人生体験から発した名言・格言を色紙に書き、文人画のような絵を添えたものが広く流通していたので、御存知の方も多いと思われませんが、私も「仲良きことは美しき哉」、「天に星、地に花、人に愛」という言葉をうろ覚えに知っている程度です。彼が房総ゆかりの人だということ、千葉の「ちいき新聞」の「お父さんのぶらり散歩道」という国仲香保氏の文を読んだことです。

武者小路実篤はその名から想像されるように公家の出身で、東京の麴町に1885年に生まれ、学習院で学び、無試験で東京帝国大学の社会科に入学しましたが、一度も入学試験というものを経験していなかったため、たいして有難いとも思わず、自由にやりたいことをしたいと1年で中退してしまいます。日本経済新聞の「私の履歴書」に自ら書いているように「井の中の蛙」と学習院時代引け目を感じていたが、天下の秀才が集まるといわれる東大も、入ってみれば学習院と大差なく、自分が特別劣っているとも思われなかったようです。

社会に出ると自ら食べていかなければならず、小説、戯曲、詩、絵画の勉強に必死に取り組みました。その頃の彼の思想的バック・ボーンとなっていたのは、同じ貴族出身のトルストイ、自ら理想社会を実現しようと試みるきっかけとなった有島武郎ではなかったかと思います。23才の時「荒野」、短編「芳子」を書き、24才で3幕もの「或る家族」を書き、これらを自らの処女作といっています。

25才の時、日本の文学界、美術界に大きな影響を与える「白樺」を創刊します。そこには自身の小説や詩を投稿したことは勿論、西洋の印象派の作品を次々に紹介し、さながら美術誌の様相を呈していました。ゴッホを初めてわが国に紹介したのは自分であると言っています。

その頃医師から当時「死に至る病」と恐れられていた結核であると診断され、空気の良い所に移住するよう奨められ、同じ白樺派で親友の志賀直哉、柳宗悦の住む千葉県の手賀沼沿岸に家を建て既に結婚していた房子と共に引っ越しました。幸いにも医師の診断は誤診ですぐ元気になり、宮崎県の日向に「新しき村」を建設するために移住するまで2年近くこの地に住みました。その間武者小路は志賀、柳らと舟や徒歩で家族ぐるみの交流をしていたそうです。

武者小路はかねてから温めていた「新しき村」構想の発会式はこの地で行いました。「新しき村」とは、階層や特権のない自由で平等な共同生活の理想郷で、志賀は体調を崩して顔を出さなかったけれど「白樺」の仲間や、「新しき村」の会員や賛同者等が大勢集まったといわれます。手賀沼の風景は彼の気に入ったようで、特に「夕日が雲に反射してそれが手賀沼を金色に染めた風景は彼の運命が暗示されているように思えた」と語っています。現在の手賀沼は全国でも有数の水質の悪い沼になっていますが、彼が住んでいた頃は清澄な水だったと思います。

「房総ゆかりの人々」を書く時は原則としてゆかりの地を訪問して取材するのですが、現在の所有者は一般公開していないということなので、取材を諦め

ました。

武者小路は昭和51年（1976年）に90才で死去していますから、千葉を去ってから60年近くも生きているので、その間のことも簡単にまとめておきましょう。

日向の「美しき村」では、自ら^{くわ}鋤をふるい、大木を^{かつ}担ぎ会員たちと共同生活をしました。世間では、ことに社会主義の人々からは空想社会主義だといって^{けいべつ}軽蔑されましたが、彼は「他人に迷惑を掛けるような生き方だけはしてくれるな」という母の教えを忠実に守り、社会主義には全く関心を持っていなかったもので、気にもとめませんでした。自分に肉体労働が無理となり41才で村内会員から村外会員になってからも、若い人たちが次々に村内会員に入ってくれて村が継続していることを喜んでいました。

彼は37才の時、房子と離婚し、安子と再婚しました。翌年に「白樺」を廃刊し、同じメンバーで「不二」を創刊します。日向から奈良、和歌山と転居後、関東大震災後の東京小岩に新居を構えると同時に個人誌「独立人」を創刊します。

その後彼は埼玉県に「東の新しき村」を開き、多くの会員を集めています。

「新しき村」の事務局を東京に設け、雑誌も発行し、何十周年記念行事と称してさまざまなイベントも開催しています。「新しき村」が彼のライフ・ワークの一つであったことは確かでしょう。

また次々に新しい雑誌をグループで、あるいは一人で発刊し続けたのも彼の特徴です。戦後国民が精神的よりどころを失っているのが気になって「心」という雑誌を出した時の集まってくれた仲間は安部能成、小泉信三、和辻哲郎、斉藤茂吉、田中耕太郎、辰野隆、志賀直哉、柳宗悦などのそうそうたるメンバーで彼自身の信望の厚さを物語っています。

彼の小説「愛と死」は日活で映画化され、書き下ろしドラマ「須佐之男命と大国主命」はNHKで、「新しき村の50年」は12チャンネルで放送されてい

ます。

彼は50才の時国画会会友となり、絵画の方でも活躍し出します。武者小路実篤を人物辞典でひくと、小説家、劇作家、詩人、画家、思想家で文化勲章受章者と紹介されており、まさにマルチタレントだったことが分かります。そのことは、彼の葬儀（1976年、昭和51年）委員長が梅原龍三郎、里見^{とん}弴、中川一政の三氏連名で、各界から1,500人以上の人々が会葬に訪れたという点にも表れています。

90年という当時としては長い人生を組織に依存することなく自立して常に前向きに生きていった人なのだということを知り、あまりにも知らなかった自分を恥ずかしく思う次第です。

（注）この紹介文は主として「武者小路実篤」（新潮日本文学アルバム）に依っています。

田中 義明

プロフィール

【略 歴】

- 1935年 千葉市に生まれる
- 1951年 千葉大学附属小・中学校を卒業
- 1954年 千葉県立第一高等学校を卒業
- 1958年 一橋大学商学部を卒業
- 1958年 日本精工(株)に入社
- 1959年 公認会計士元吉重成事務所に転職
- 1961年 (社)日本能率協会に転職
(企業に対するコンサルティング、国・自治体のプロジェクトの研究に従事)
- 1970年 (株)フォークアートサロンを設立(代表取締役)
(レストラン、パーティホール、カルチャースクールなど)
- 1975年 (株)水問題研究所を設立(代表取締役)
(建設省、国土庁、環境庁、東京都等からの委託にもとづき利水、治水、親水に関する
リサーチに従事)
- 1984年 (株)デシジョン・システム、P S マネジメントの開発顧問となり、思考
技術の開発、教材作成および研究指導にあたる
- 現 在 (株)フォークアートサロン代表取締役
(パーティホール、ギャラリー、貸し会議室など)



【著 書】

「新企業分析入門」(白桃書房)、「創造力革新の研究〔共著〕」(日本能率協会)、
「技術者教育の研究〔共著〕」(日本能率協会)、「アート・ファンの時代」
(近代文芸社)、「ホワイトカラーのプロジェクト・マネジメント〔共著〕」
(生産性出版)「尊敬する歴史上の人々〔共著〕」(自費出版)など

【資 格】

- ・ 公認会計士三次試験合格
- ・ 不動産鑑定士二次試験合格

尊敬する歴史上の人々

2014年3月発行

〈著者〉

田中 義明

〈印刷・製本〉

ワタナベメディアプロダクツ株式会社

